

LICENSED PRODUCT  
3/Color  
White  
Magenta  
Red  
Yellow  
Green  
Cyan  
Blue  
Black



返らぬ春

近松秋江

5

10

15

20

25

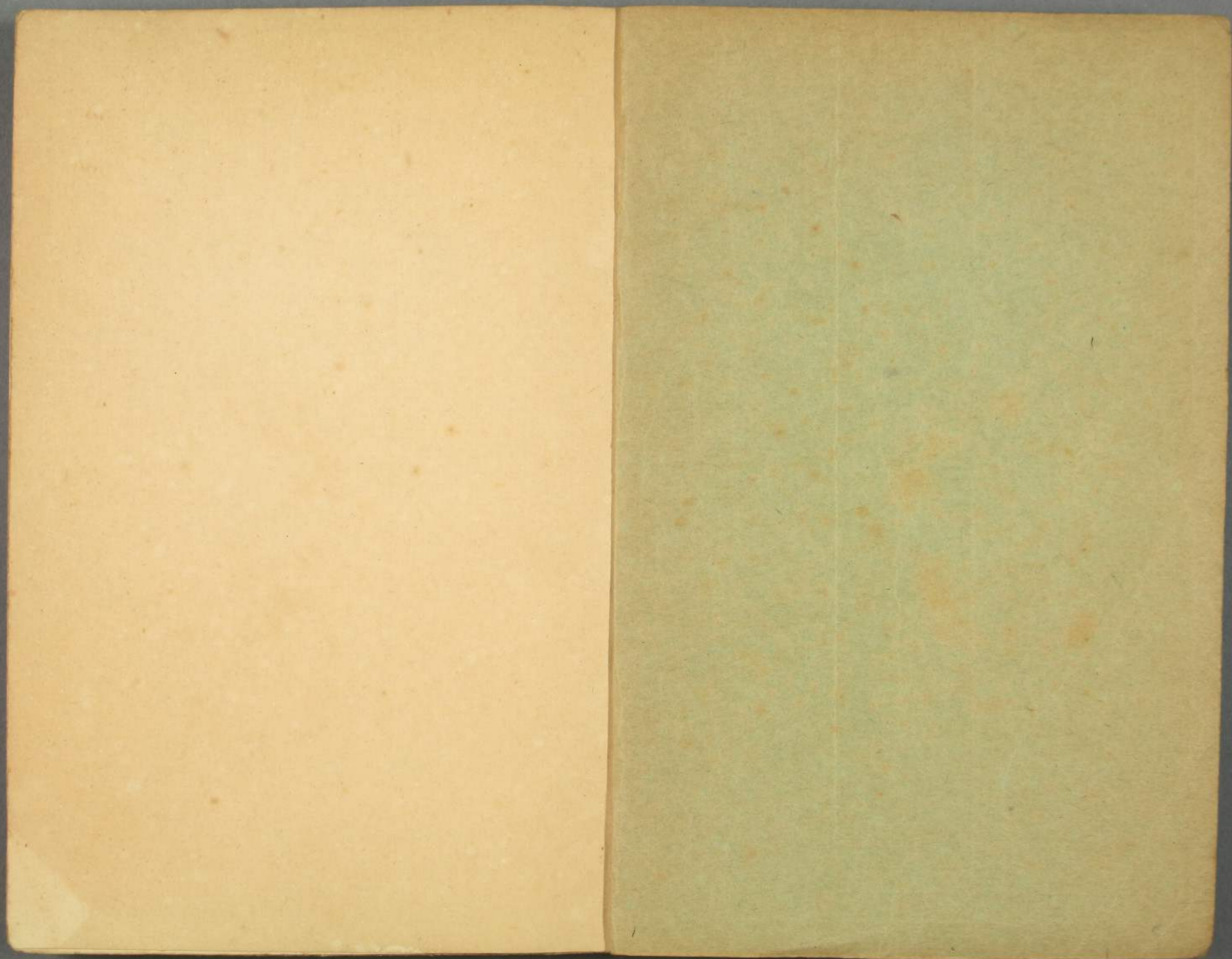














春 ぬ ら 返

著 江 秋 松 近



閣 英 聚



目次

1

自然の中へ.....	一
冬景雜筆.....	九
鳩.....	一七
梅花の賦.....	二五
車窓の春.....	三九
春の悲しみ.....	四九
新涼の頃.....	五九
よく見る女.....	六七
昔し任んだ家.....	七五



返らぬ ..... 一〇二

別離 ..... 一三七

旅人 ..... 一六一

老若 ..... 一八七

自然の中へ



この間暖い日に、新宿から京王電車に乗つて、半日、西武蔵の方に散歩にいつて来た。

東中野から、省線によつて東京の市中に出るのは譯はないが、地震以後、電車が殊のほか混んでゐるので、わづかに牛込あたりまで往くにも、生なまやさしい道中ではない。私には、その牛込から、東京驛あたりまで往つて來るのが、まるで、太平洋を横切つてアメリカに渡つてゆくか、昔この東海道を道中する困難を想像せしめるのである。先日も久し振りに夕方銀座を歩いて見ると長く廢墟のまゝになつてゐる銀座も大分復活して來たやうだ。あれなら、やゝ以前の銀座を歩いてゐる心持がしてくる。個人として知ると知らぬにかゝはらず、さうして、買ハ馴染みの店舗がやうやう復活して來るのを見ると、涙の溢れるやうな惨めさとともに又嬉し涙が交々に湧いて來る。しかしながら、何だか、たゞ歩いて見ても氣の毒なものと、慘憺なまくたる創痕なまくが生々しく残つてゐるので、震災以前のやうに、長閑な氣持で銀座の散歩を享樂するといふ氣にはなれない。氣の毒で見つてゐられないといふ心が先きに立つて早々に歸つて來る。

私は、それよりも、市中に出ることを避けて、こゝから西の方、古い武蔵野の中心に深く入つてゆくのが、どれだけ神経を休息せしめてくれるか知れない。京王線に乗つてゆくと幡ヶ谷、笹塚あたりには、もう、すっかり郊外の市街が出來てゐるが、それから先き、沿線は一望、霜を凌



いで一入青色を誇る大根の葉の鮮緑と、大地震に遭つても巖として微塵も揺がない洪積層の大地の黒土と、やうやく落葉した雑樹林に交る松と、あとは茫々たる枯れすすきのあるか、なきかの初冬の風にそよいでゐるのも野趣が深い。

幡ヶ谷、笹塚あたりまでは郊外生活者もあるので電車も満員であつたが、松澤あたりから先きは乗客も減り、四邊は丘陵の起伏せる田野の中を過ぎてゆくばかりで野趣窓に滿つるの感がある生憎遠くの空が、どんより曇つてゐたので富士の姿は眺めることが出来なかつたが、相模の大山と思ふあたりは雨氣を含んだ密雲が黒く鎖して、わづかに山の輪廓のみが水墨の山水畫の如く糢糊としてゐる。西は甲州境の連山から西北にかけて秩父の山塊が遠くさし渡つてゐるのが雪模様空に暗く煙霧を浴びてゐるのも望まれた。

電車が段々西へ進むにつれて一帯の丘陵が盡きると、平坦なる桑畑が開けて來た。そしてその桑畑の隈を取つたやうに野の隅に孟宗竹の竹藪を背負つて、愠せき草葺の百姓家が這伏さつた如く三戸、四戸隠見してゐる。農家はまだ收穫が終らぬと見えて、農夫は納屋の隅で糶などを精けてゐる。東京のやうな華美な大都會に程遠からぬ處で生涯糞土をいちつて、社會の下積みとなり何ひとつ榮養贅澤もせず惨めな生活をして暮らす彼等は、自分の社會的生存の無能を諦めてゐる

のか、それとも向上の自覺がないのか、或はまた浮華な都會生活の頼むべからざるを悟つて、安心立命してゐるのか。それはとにかく、彼等は太古以來嘗て人間によつて荒らされない、古い武蔵野の大地に強い根を下ろしてゐるので、東京があのとほりの天變地異に遭ひ現世地獄を面りに實現してゐる場合にも、彼等は葦蔭の茅屋の中に安臥してゐたであらう。自分はそんなことを、いろ／＼思ひ浮べながら、それらの、惨めな、愠せき生活をしてゐる農夫と都會生活者の幸不幸や運命について黙想してゐた。

そのうち電車は調布に來た。そこから電車線路は分岐して多摩川原ゆきは、やゝ左方に向いて走つた。終點に下車して、土手を越えて川原の方についてみたが、川原は季節が季節とて人もあまり歩いてゐない。それに時間を急ぐので三十分を置いてくる電車を待ち合はして、又それに乗り調布に逆戻りして、そこから府中ゆきに乗つた。今日は、府中の古社大國魂神社に詣うで、それから國分寺の古跡を探ねて國分寺驛から汽車で歸らうといふ豫定である。

調布から、又單調なる桑畑の間を電車は、ステーションを、あれでも四つ五つ過ぎたかと思ふと、やがて府中に着いた。

このあたりに往昔の鎌倉街道の通じてゐた頃には、今日の東京——昔の江戸——などは、まだ



名もなき洲沙の上に人家の散駐する漁村に過ぎなかつたであらう。府中から西南に數町を隔てる多摩川沿岸の河原を分倍河原といひ、古戦場の跡で、新田氏と北條氏と戦ひ、足利氏と上杉氏と戦ひ、後北條氏が上杉氏と戦つた處である、それによつて見ても、此の府中が當時いかに鎌倉から奥州に通ずる街道の要衝に當つてゐたかを思はせる。

府中町に在る大國魂神社は源頼義、義家父子が奥州の安部貞任、宗任の一族を征討せし折、ここに祈願をこめたといふから、随分、縁起の古い神社であることと思はれる。境内には老杉巨樺「霧隠」として社閨は古色蒼然としてゐる。一の大鳥居から一直線に通ずる數町の馬場には兩側に千年の樹齡を思はせる樺の大樹が、ずらりと並樹をなして續いてゐる。

私は、日曜日で偶々遊びに來た、甥と二人づれであつたが、何處かで、晝飯の代りに親子どんぶりでも食べようと思つて、社前の町をぶら／＼歩いて、とある小料理屋に入つて、腹をこしらへ、それから神社の境内を一めぐりしてゐるうちに、暖過ぎる天氣が次第に暗く曇つて來たのでまた、これから三十町の道を國分寺へ歩かねばならぬといふに心急ぎ、馬場を通つて街道へ出ようとする、乗合自動車に客待ちをしてゐるのを見てそれを呼んで臨時に出發せしめた。その乗賃、わづかに壹圓五十錢、安いと思つて乗つてゆくと、なるほど安いも道理、道は坦々として砥

の如く且つ思つたよりも、遙かに近い。道の兩側は野生の樹林、折柄、晩秋初冬の淋び色を呈し野趣横溢、宛然身は大公園の中に通ずる散歩道に往々に異ならず。ところ／＼に生垣の垣根を繞らしてゐる大きな圍ひがあるのを、運轉手に訊くと、東京の某々紳商等の山莊であるといふ。しかし、此のあたりの自然は、最も古い武蔵野の面影を偲ぶに好い處である。ゆく手の左方に當つて、松杉の繁茂せる一帯の丘陵が連互してゐるを指して、運轉手は、あちらが國分寺の跡です。といつたが、空の曇つて來たのを氣づかつて、又日を變へて來遊することにして、一路直ちに國分寺驛に向つて駛せた。(十二月二十四日)







### 古い中野の町

東京市の内外に住居を定るとすれば、この東中野あたりは最も理想的な住宅地である。市中ならば牛込、小石川から、麴町の高臺、赤阪、麻布など勿論好い土地であるが、郊外に比べると樹木の緑などすつと少い。東京のある天然の武蔵國は、自分はさまで好きな土地でもないが、東京があるために、爲方なく此の國に住んでゐるやうなものである。東京を、どうしても去りかねる事情に制せられて止むを得ず此の地に住居するとせば、即ち東中野あたりが自分の最も理想に近い土地である。震災後の焼け塵埃の立つ東京の市街の中から此の郊外へ歸つて來ると、まるで別天地の感があつた。蘇落を繞ぐる緑の色鮮かで、折柄の秋空拭ふごとく澄んで、これが大震災の慘禍のあつた東京の近郊地とは思はれないくらいであつた。自分は、時々それを繰返して考へつゝ、心の内で、こんな無難な土地に住んでゐた運命の幸福を幾度か感謝したのであつた。

十月、十一月は家事と執筆とに追ひかけられるやうな氣持ちの中に慌しく過ぎてしまつた。そして、やつと今日になつて、じつと考へてみると、もう今年も數へ日となつてしまつた。歳の暮れるのも、もう二十日餘を短すのみである。かうして、世界の人類の記録にすら發見することの



出来ない、恐ろしい天災の我が日本に降りかゝつて来た、忌はしい歳もやうやく盡きんとしてゐるのであるが、自然の現象は曆日とゞもに人間界の事には何等の顧慮を拂はないものゝ如き顔をして、流るゝ如く過ぎてゆく。人間によつて住み荒らされた土地を好むと好まないにかゝはらず、古い自然の武蔵野の野趣には棄てがたい趣きがある。

私は今日も二階の書齋で、靜に火鉢に凭れてひとり、ガラス障子の外に遠く見晴らされら古い杉の森や、樺の高樹に、じつと眼を遊ばしてゐる。視野の中には人家の屋根が續いてゐるが、それも我慢の出来ないほど稠密したものではない。眞南にあたつて見える高い杉と樺の一と叢は、古い中野の町の寶仙寺の木立ちである。寶仙寺といふは、此の邊の古刹である。従来からある中野の町は、所謂昔しの青梅街道に當り、西武の山岳地方に通ずる一つの宿であつた。土地は高臺にして、震災や水害などから最も安全な土地柄である。此の古い街の菩提寺として寶仙寺は古い頃建立せられた寺に相違あるまい。冬を急ぐ此の頃の夕時雨に落葉する宵々晩鐘の響が耳近く聞えて來るのは、ほかに近いところに寺があるとも思へないから、寶仙寺で撞く鐘であらう。古い武蔵野が年々歳々生々しい東京に蠶食せられて、昔しの面影の失はれてゆく時代に、この中野の町ばかりは、まだ何となく落着いた古めかしい町のまゝ残つてゐるのも懐しい。近年市區改正に

つれて市中に古くからあつた寺院はいづれも郊外に移轉して、寺といふは名ばかりの、一向尊き感じのせぬ建物ばかりになつてゐるに反し、寶仙寺は昔ながら古い寺として残つてゐるのは有難い。

私はその寺の境内に時々杖を曳いて散歩をする。老杉の木下蔭鬱蒼として、霜柱の立つた墓域をさくり／＼と踏んで、鬼籍に入つた未知の人の改名や、現世に在りし時の名を見て歩く。中には正何位勳何等といふ、嚴めしい名を見ることもあるが、私には世に時めいた人の墓碣に接するよりも、生涯名もなくして卒はつた人の方により多くの懐しい悲しみを感じるのである。英人グレイが墓域の挽歌は私の夙に最も好む歌である。

この村の先人永へにこゝに眠る

といふのが、何となく私の心をチャームする。彼等は生前顯達も光榮も富貴にも、恵まれずして死んだが、彼等の魂は、たとひ生前數々の慘苦を嘗めたことがあつても、今は其等の苦患から免かれ、永へに安らかなる天の國に休息してゐるであらう。暗鬱な老杉の下を歩いてゐると、まるで冥府の如き冷い風が顔に觸れる。私はそれを却つて快よく身に覺えながら幽かな墓域を長く逍遙してゐる。あちらの方の六地藏に絶えず燃えてゐる香花の薫が鼻に通ふて、老いた掃除男が



かさ／＼と霜柱を踏んで落葉を掃く音が靜に聞えてゐるばかり、騒々しい市街の物音もこゝへは響いて來ぬ。

### 假裝の銀座

この冬は、古い曆にもない大地震があつて不穩な忌はしい年であるが、いつまでも暖かで、その點は好い暮れの月である。昨日、久し振りに銀座の方に出ていつてみると、歳暮の賣り出しの支度に、いづれの商店でも、いそがしさうである。其等の街々に並ぶ商家のやうやく假裝を整へた有様を眼にするたびに、個人として知ると知らぬに係らず、私は實に胸の潰れる感がある。

松喜の牛肉店は、銀座でも最も冬の季節の親みを覚えさせる處であつた。あさ漬けのおしんこコースのすき焼、ほか／＼しゝ煮<sup>か</sup>立<sup>た</sup>ての飯、その二階にすらりと食卓を並べて、陶然たる醉顔を染めながら、暖かさうに酒食を攝つてゐる多勢の客の、さも／＼暖かさうな、平穩無事な有様も眼に浮んで來る。その松喜もどうやら假建築で復興したらしい。

それから、飲食店で最も早く簡易食堂を始めたのは、尾張町角を歌舞伎座の方に向つた右側にあつた竹葉の鰻であつた。私は、銀座の方面に出掛けるたびに、そこへ入つて六拾錢の鰻井と拾

五錢の肝の吸物を辨當の代りに食べる。同じ角の服部時計店の跡に三越のマーケットが出来た、そのつゞきに上海亭の食堂もある。その又筋向うの天金もやうやく簡易食堂を始めて、以前の大東京のありし時を偲ばしめる。

資生堂の暖い飲み物も、明るい電燈の下に懐しさをそよる。銀座食堂の珍味も食べられるやうになつた。

飲食店を先づ復興の魁として、冬支度の洋品店洋服店などが、寒さとともに一時に復活して來たのも嬉しい。かうなつてみると、やつぱり銀座は銀座である。洋品店の中で最も早く店を開いたのは新橋際の信成堂が、以前より大きな間口で盛に賣り出した。一丁目の田屋の飾窓も昔ながらに香氣の高い毛織物の色彩が眼を惹く。

それから尾張町の向う角の佐野屋の足袋店も復興の魁の一つであつた。佐野屋の足袋は私の京都に放浪してゐた時代にも取寄せて穿いたものである。小はぜのはせ具合からいつても、京阪では求められないものである。

越後屋の飾窓は、私の東京生活に缺くべからざる興味の一つであつた。その越後屋もやうやく復興して來た。



十字屋樂器店も開店した。明治屋、龜屋も流石に盛大である。それ等の店舗は、その主人や店員達と個人的に知ると知らざるとに論なく商店として、品物を購ひ、銀座氣分の總合色には缺くべからざる有力なる要素であつた。それ等の店々によつて出来てゐる銀座がいつまでも眞暗になつてゐるとしたら、私は東京生活の意味の大半を失ふであらうに、忌はしい年の暮れに迫まるにつれて、銀座はやうやく銀座らしくなつて來たことは、何より嬉しい。冬季の氣分を濃厚にしてくれる。(大正十二年十二月六日)

鳩



今日、友人から借りて来たマウパッサンの短篇集を読んでゐたら、この中に「愛」といふのがあつて、それがひどく私の興を惹いた。

マウパッサンは、新聞の雑報で、ある心中話しを読んだ。ある男が女を殺して自分も死んだ。事情は種々あつたらうが、男は女を愛してゐたには違ひない。その愛といふことが自分の興を惹いた。といふのは、自分は、それにつけて、若い時分に目撃した不思議な愛を想起した、と言つてゐる。

それは、ある時、田舎にゐる従兄と一緒に夜を罩めて獵に行つたことがあつた。翌日二人は可也の獲物があつて、もう歸り支度をしてゐる處へ、何處からともなく二羽の小鴨が翔つて来た。マウパッサンは、その一羽を射落した、すると、連を打たれた雄は、マウパッサンが手にした手負ひの雌を眺めながら心を破るやうな悲鳴を揚げて二人の頭の上を輪を描いて舞つた。従兄が銃口を差向けてそれを狙ふ氣勢を示すと、獨りで寂しく飛んで行きさうにもするが、それでもまだ思ひ切りかねたやうに、またしては低く飛んで来る。従兄は、マウパッサンに向つて手にした雌を地に投げよと言つた。マウパッサンはその言ふ通りにした。すると、雄は、果して近く飛んで来た。そいつを従兄は容赦もなく射落した。



マウパッサンは、此の妻鳥を慕ふた小鳥の愛をば初期の基督教徒の眼に、天の眞中に、十字架が出現した感を以つて愛の發現を見た、と言つてゐる。

私が此のマウパッサンの「愛」を読んで興を惹かされた、といふのは、私もまたマムパッサンと同じやうな實驗を持つてゐるからだ。

それは最早十五年も昔のことである。

丁度此の頃のやうに、晩秋初冬の候、空が廓然と青く晴れ渡つて、山にも、林にも、屋敷にも樹々の枯葉が落ち盡して、細い梢がその好く澄んで紺青の色に、反照して、透明に浮いて見える。凜と引締つたやうな心地のする空氣の中に、黄金色の温和な光線が緩く漾うてゐる。私は斯ういふ時候が一年の中で最も好きだ。

その頃になると、山の淺い、私の故郷でも可なりの獲物が取れるやうになる。ヒヨ、ツグミ、山鳩などが取れる。

私は、五人の兄弟の末の弟で、長兄達には、稚い時子のやうに可愛がられた。さうして長兄は皆な獵をしたり、馬に乗つたりするのが好きであつた。けれども私一人は、此の年齢になつてもまだ銃を手にしたことがない。私は銃に對して一方ならぬ恐怖を感じる。その發砲の音は常に私

の胸をして驚き戦かしめる。それから私は血を見るのが何とも言へず厭である。傷いた小鳥の死骸、美しい羽色を染め做した無惨な紅の色は、私の弱い心を痛めしむる。

その弟を連れて長兄達は、屢々近場の山や林に出掛けた。さうしてその兄も二人は、若くて死んだ。一人は二十九で、一人は三十八で。

これは、二十九で亡くなつた兄に就いての話である。十一月の末の清い暖い日であつた。彼れは鐵砲を擔いで近場の雜木林を漁つて歩き廻つてゐた。が、何時もヒヨを打つ場に定つてゐる大きな稱檀の樹にも獲物は來て留らなかつた。彼は鐵砲を提げて戻つて來た。すると、酒倉の高い屋根に家鳩が二羽來て留つてゐた。

その頃になると、何處から來るともなく家鳩の群が來て屢く私の家の酒倉の屋根に留つた。それは一里ほど隔つた村のお寺の家鳩だと言つて、快活な悪戯好きの兄達も、それに平常銃口を向けやうとしなかつた。それゆゑ家鳩は氣樂に庭に降りて溢れた酒造米を啄んでゐた。

彼れは、折角彈丸をこめた鐵砲を、その儘放さずに了ふのが何だか物足りなかつた。何物でも好いから命中して見たい。さういふ心持で戻つて來ると家鳩が來てゐた。彼れはそれでも好いから射落して見たくなつた。狙を定めて發射すると、過たず命中した。高い二階の棟から、瓦を傳



ふて轉々と、小鳥の死骸が地上に落ちた。白い胸には生々しい鮮血が流れてゐた。と、思ふ間もなく、パツと白扇を投げたやうに白い羽を開いて残つた一羽が死んだ連を追ふて飛んで降りかけたが、軒の瓦の上に、自分も手傷を負ふたやうに、羽翼を亂して留つた。

その時、私と母とは裏縁に立つて見てゐたが、母は覺えず魂消げた聲を出して

「アラツ！」と叫んだ。

兄は、轉げ落ちた。

鳩を拾ふとして、その方に二三歩歩き寄つたが、生き残つた方の有様を見て、之れも暫時凝乎と見守つてゐたが、直ぐまた弾丸を込めた。

母は、それを見て聲を振つて

「國！——兄は國男と言つてゐた——もう打つのはお止め！」と言つた。

で、兄は弾丸を込めた銃を横にして、また暫時鳥の有様を見てゐたが、羽毛を瓦の上に擴げたまゝ、可愛い、赤い眼で、靜と地上の連の方を見遣つて少しも動かうともしない。

「これは殺した方が好い！」

と言つて、彼れはそれをも遂に射落した。

それを捉んで私と母との前に持つて來て置いた。二つとも同じやうに胸を射られてゐた。

その歳の暮に押迫つて、その兄は、初めは風邪のやうだと言つてゐたのが、どつと病床に就いて、風邪は劇症の肺炎に變つて、二十日ばかり患つて死んだ。

母は當分兄のことを想ひ出すにつけては、その鳩のことを繰返してゐた。



梅花の賦



麗かに晴れて暖い正月二日の好い日も靜に暮れて、夜一時蓄音機などを戯れて、やがて、此の間中頭腦のいそがしかった身體を休めるべく、自分はいつもより早く電燈を消して、獨り二階の八疊の書齋の寢床に横たはつた。そして精神を落着けてゐると、靜かな夜の冷氣の中に幽かな清香が通ふて來るのを覺えた、初は何の好い薫かと思つたが、すぐ氣が付いたのは、それは床の間に置いた盆梅の香が夜氣の靜まるにつれて室内に漾ふてゐるのであつた。私はその時仰臥しながら、心の中でうなづいて、これこそ正に暗香浮動の辭に背かぬものであると思つた。

どんな名人の橐駝師が丹精したのか、去年の十二月の中旬江戸川の草花屋から届けさし、古木の盆梅が南縁の暖日に蒸されて歳暮に五六日といふ時になると、遠から賑んでゐた蕾が、一輪曉の明星の如くにはつと眞白い花を開いた。その優しい、長い蕊をじつと窺いて見てゐると、それが、ちやうど夢みる少女の睫毛のやうにも思はれる。それから二三日して又一輪開いた、そして間もなく正月になると、忽ち五輪七輪と、高さ尺五寸にも足らぬ檜椀たる古木に滿枝の蕾が大半花を開いた。それは、飽くまで自然の精神に深く入つていつてゐる巧みな橐駝師が植物の精と堅く契つてゐた約束を守つて日を期して開花したものであるかのやうに思はれるのであつた。

馥郁たるその清香は、私の心に、何となく早い春のおとづれて來たことを思はしめる。暖い浦



縁に持ち出してその盆梅を愛でながら、朗らかに照り渡る遠くの青空を眺めてみると、何處か野梅の咲く暖い野邊に出ていつて見たいやうな氣分を唆られる。梅は魁春第一の花であるとも、春を待つ心をそよる花である。

許六も百花の譜に、櫻は全盛の傾城なり。天晴れ當風に打込みたる風俗。行未明日のたくはへの、一點もなき花なり。……梅の風骨たる事、水陸草木の中に似たる物はあらず。十月一陽の氣に、燦々たる江南の王妃、まづ笑めるより、生涯を物好きに苦しみ、幽かなる住居に、朝夕の煙を立てても、なほ風流の細みに富めり。これを色に譬へては、吉野高尾などいふべき遊君の心おとなしく、名を耻ぢ、心、意氣に、相火昂ぶり、容瘦ぎすに、涙脆く、昨日の我れに飽ける心より、はづんだる男の一言に、百年の富貴を代へて、やう／＼盛りも過ぎたる頃生前の本望を遂げて、世を靜かにいとなみ、同穴のかたらひをなせる人に似たり、といつてゐる。

梅花を遊女に譬へたのは、やゝその清高の姿韻を傷けたやうな氣持ちがせぬでもない、春風駘蕩といへば、烟花の爛熳たる姿を聯想せしめるが、東風料峭といへば清香馥郁たる寒梅の容を思はしめる。

梅はまだ淺春肌寒きを思はしめる花である。その點がいさゝか物足りないといへばいはれる。

しかしながら櫻花の季節になると、春はもう爛熱してゐる。何となく四邊が混濁してゐる。俗な快樂はあつても、風雅な樂みはない。梅花の季節は早春の空が青く澄んでなほ料峭たる東風は吹いても既に麗日の影は天地に漲つてゐる。百花に魁けて一陽來復を思はしめるところに楽しい希望がある。

私は梅花については他の花によつては感じられない、懐しい聯想や憶ひ出に富んでゐる。しかし、特に梅花には限らないが由來名所として人口に膾炙さるゝ處の花よりも、多く人に顧られない所に佗しく咲いてゐる花の方に風情は多いものである。許六が梅花の譜の意も亦たそれである。熱海の梅林は自然の風致をあまり損じない程度に相應に庭園に人工を加へてあつて好かつたが、暫く見ないから今はどうなつてゐるか、心許ない。今から二三十年も前私が東京に来てまだ間のない時分始めて江東の臥龍梅を見にいつたことがあつた。龜戸の天神に詣で、その東門から出るとすぐ潤い田圃になつてゐて、もうそろ／＼青草の萌え出た畦徑を傳ひながら臥龍梅にいつたものであつたが、桑田碧海の譬に洩れず、今は不穩な殺生事の起る場末の陋巷と化してしまつた。思へば淺間しくもあり悲しくもなる。

芭蕉の句に



## 梅が香にのつと日の出る山路かな

といふのがある。何といふ平明な、風韻に富んだ句であらう。同じ七部集の中に誰れの句であつたか、

## 梅が香や屋根に干したる酒袋

といふのがある。あまり名句とも思はれないが、私にはそれが自分の遠い實景の思ひであるのが懐しい。子供の頃、酒造家であつた自分の家の酒倉の屋敷まはりに澁色の酒袋が毎時よく乾してあつた。もう、ぼつ／＼酒の仕込みも急しい盛りを過ぎて、深い冬の間詰つてゐた日も大分伸びて、青く晴れた空に麗々と暖い日が照り輝く頃になると、麴室の草家の軒に一本の梅の古木が立つてゐるのが、三輪五輪と次第に花を開いた。それは年中忘れられたやうに、知らぬ頃からそこに立つてゐる梅の木であつたが、いつの年も長く寒香結不開であつたが、勝手な人間は、その堅い蕾がやうやく開く時分になると、

「おう、梅が咲いた。」といつて、はじめて一顧せられるのであつた。私は殆ど四十年の昔と過ぎたその頃の事をじつと聯想してゐると、ちやうど今、床の間から送つて来る清冷なる幽香と鼻管の作用とによつて其等の懐しい、過ぎし日のことどもがまぎ／＼と思ひ出され、強烈なる酒袋の

匂ひがしてくるやうである。その梅の古木にはよく鶉鷄が来て留まつてゐた。雀よりもずつと小さいその小鳥は片時も落着いて居らず、急しうに枝から枝に抜け、すぐにも捕へられうで、委さへ碌々見せず、梅の木から草屋の軒端を渡り、隣家の石塀の小孔に隠れなどして、後には行くえも知れず、ゐなくなつてしまふのであつた。

名所の梅の期待したほど興趣を催さしめぬに反し、野道の藪の垣根などを歩いてゐて、幽かな香に、ふと氣が付くと思ひがけもないところに野梅が枝を翳して、點々たる蕾まじりに白い花を開いてゐるのを見たりするのは何ともいへず好い。

いつであつたか、嘗て私は、私の最も好める風景の一つである南山城の笠置山の麓を流れる木津川の溪に沿ふて汽車に乗つてゐたことがあつた。木津の溪谷のことは私は屢々書いてゐるが、その邊一帶南畫めいた氣分に富んだ處である。懸崖に據つて家屋を架したり、雛段のやうな畑に青い麥が萌えたり、山寺の鐘樓が遠く望まれたりする。高い溪谷の岸に沿ふて藪がつゞいてゐる私は餘念もなく其等の風景を眺めながら、ひたすら汽車の進みの速いことを惜んでゐると、すぐ眼の前に迫つた眞竹の藪の中から、そちらにも此方にも南日に向つて梅花が白、蕾を開いてゐるのを見たではないか。私はひとり欣然として喜んだ。その木津川の上流は即ち大和の月ヶ瀬の溪



になつてゐるのである。芭蕉の生國もそこから、もう程遠くはない、私は是等の風景を見るにつけ、ます／＼月ヶ瀬に往つて見たく思つた。けれども、それは、それから尙ほ何年かの後にならなければ果たされなかつた。

數年前京都に滞留してゐる頃は極めて落着いた氣持ちになつてよく梅のことを思つてゐた。長い冬威に虐げられたやうなその古い都の薄暗い家の内にも、二月の中ばを過ぎる頃になると屢々麗らかな日影が射し込んで来る。すると、まるで日の目を見ずにあたかと思ふやうな京の女の眞白い顔もそろ／＼戸の外に見られるやうになつてくるのである。私は、殆ど耐えがたい氣持ちで長い京の一冬を、薄暗い家の中で過してゐた、一刻も早く春の來復するのを待ち侘びてゐた。やがて二月の中ばになつた。せめて早咲きの梅でも見て春を待つ心を引き立てようと思つた。この日頃の暖かさに、何處か京の田舎の方へ出ていつたならば野梅の咲いてゐるところがありはせぬかと思つた。

「何處へいつたら、それを發見するであらう。」と考へた末、いつぞや紫野の大徳寺の境内をぶらついてゐた時、彼處の舊い寺跡の雑木林の中に梅の木が多くあつたのを見たことがある。その時「あゝこんな處にある梅が咲いたら、さぞ好いだらう。」と思つたことであつたのを思ひ起した。

「さうだ、今日は天氣も暖いし、これから彼處へ出て往つてみよう。」

さう思ふと、私はすぐ出掛けていつた。京の街は廣いやうでも、さすがに東京などゝちがひ、郊外へ出るにも譯はない。四條祇園町といつたら、京の中でも最も繁華な處であるが、そこから電車に乗つて今出川大宮まで往くと、もう紫野の郊外に出られる。大徳寺の境内はなかく／＼廣くつて、まるで山の中の廣場にでも出たやうに、樹木が鬱蒼としてゐて、藪があつたり雑木の叢林があつたりする。古い土塀で取り圍んだ末寺の院々は奇麗に掃き清められた敷石のゐまはりに青苔が蒸して、四邊に人の氣配もなく、閑寂を極めてゐる。廣い境内を寺から寺へ敷きつめた小石の歩道を踏んでゆくと、冷く輝いた檜の葉などが暗霽として土塀に沿ふて茂つてゐる。その茂みの裡に、姿は見えぬが、鶯か、それとも名も知らぬ小鳥でも餌を漁つてゐると思はれて、かさこそと、深い茂葉の蔭をわたつてゐる音が、四邊が閑靜なだけ、一層よく聞える。古色蒼然たる山門から經堂や金堂の大きな伽藍の脇を通り過ぎて、其等の飽くまでクラシツクな冷灰なる建築物の處から稍々奥へ進んで、比較的安易な氣持ちのする念佛堂か何かの新しい堂宇の處まで來ると其日は何かの法忌にでも當ると思はれて、その堂宇の中から盛に衆僧の讀經する聲が靜かな山内に響いてゐる。私はその傍をも通り抜け、まるで獨り山中を往くが如き、次第登りになつた細徑



を尙ほ何處までも深く入つていつてみると、本山の大方丈からまたすつと背後の方に密まつたやうな場處に敷石の小石を敷いた道がつゞいてゐて、その行きつまりは、瓦を以て壘み上げた土塀が取り圍んであつて、氣持よく清掃された、老僧の隠棲めいた門には白梅院といふ太い黒文字の標札が懸つてゐる。そして何人か貴人の來訪者でもあるのか、美しい溜塗りの腕車が四五臺も門前に待つてゐる、その車の上には、ふか／＼とした紫緞子か何かの背蒲團が置いてある。土塀の中の書院の方から高らかな話聲が洩れてゐる。私は思はず、そんな處に行き當つたので、暫くそのまま敷石の上に突立つて物の様子に眺め入つてゐたが、やがてふと見るとその低い土塀の外には一叢の梅林が槎枒たる枝を翳して立つてゐるのであつた。「白梅院とは、なるほど」と心に肯きなから、寒香尙ほ堅く結んだ樹枝の間に、殊に南に面して日當りの好い枝にわづかに三點五點の白蕾が半ば綻びかけてゐるのが眼についた。私は、出獵して好い獲物でもした時のやうな悦びを感じて、「あゝもう春がおとづれて來たのだ。もう大丈夫だ。」と、いふやうな何かしら希望に満ちたやうになつて境内を出て來た。

そして、今度は、いつしか見て置いた、その日の探梅の最初の目的であつた、紫野の舊い寺屋敷の跡に來て見ると、そこ等はまるで一面の雜木林になつてゐたが、それでも誰れかが梅林を作

らうとした形跡は明かに見えて、脛を没する枯木を分けてだん／＼奥へ入つていつて見ると、深／＼荆棘に鎖された叢林には苔の蒸した斷礎が埋まつてゐたり、泉池のあつたと思はれる窪地があつたり築山の跡の小高くなつてゐる處などあつたり、そのおまはりには眞青な色をした眞竹の藪が亂生してゐるのであつた。奥へ入つてゆくほど梅の木は意外に數が多く、木はいづれも若いのが先つきの白梅院の梅よりも此方の方が日當りが好いせいも、もう花の數も多く綻びてゐた。こんな廢址の竹藪の中に世を忍びやかに咲いてゐる梅があるのに、北野や紙屋川の梅信は、もう、ちら／＼新聞の上で見られるが、誰れもこゝに氣のつく者はないのであらうかと思ひながら、荊に杖を捉へられて、ぼ／＼梅畑の叢林の中を歩いてゐると、誰れか不風流な男が忍び込んだあと、思はれて、高いところに、最も多く蕾の綻びた枝を太い處から折り取らうとして、半分生木の枝を割きかけたのがあつた。

それから一週間か十日も経つた頃になると、大阪の新聞の京都附録には京洛の梅信が頻りに傳へられた。北野天神の梅、紙屋川の梅の満開したことなどが報ぜられた。中にも紙屋川の梅は新しい名所の發見であつて、新聞は、京洛近郊の新月ヶ瀬などと仰山に報導した。もう三月の上旬にもなると、高い山々を以て圍まれ、長い冬季の間陰濕な雪模様、密雲に鎖されてゐた此の舊い



都にも、附近の山々の姿が、青空の下に淡蒼い霞を帯びてゐるのが眺められ、日に／＼何處か知ら近郊に遠歩きを試みたいやうな心が唆られるのである。

北野天神の梅には、古木があり名梅があることは、かねて知つてゐるのであつたが、紙屋川の新月ヶ瀬とは、いづれ遊覧の客を呼ぶ爲めの廣告的誇張であらうとは思はれたが、何となく紙屋川と聞いたゞけでもそゞろに遊意が動いて止まない。紙屋川は京都で西陣の名とゞもに随分古い名であると思はれ、西鶴の「櫻陰秘事」の中にも、その邊の西陣屋のことを書き、紙屋川の名が記されてゐる。西鶴の草紙に表はれてゐることを背景として考へると、紙屋川といふ、些やかなる郊外の小溝さへ、私には何となく藝術的な聯想が生じてくるのであつた。

紙屋川は北野の天神の裏門を出て、衣笠道を平野神社の方へ往かうとするところに土橋が架つてゐて、その下に深い溪川が流れてゐる。昔は清流であつたのだらうが、今は染織工場の剩り水などが溢れ落ちてゐるので水の色は清浄ではないが、その高い橋の上に立つて上流の方を見ると深い竹藪の被ひかぶさつた、兩岸のそゞり立つた溪谷が暗いところから流れて來てゐる。春蘭の頃になると、その邊の橋の袂には黄色い菜の花が亂れ咲いて嵯峨や御室の花ざかりの唄のとほりの蝶々が道行く人の袂に戯れたりするのである。そして藪蔭の暗い深みには眞紅な椿の花がのべ

つに咲いては落ち、蕨鶯が姿も見せずさゝ啼きしてゐる。

私は、その春の景色を思ひ起して、早速に紙屋川の梅を探ねていつた。そこは北野の天神の境内から、昔し太閤殿下が、天下の大小名を參集して所謂北野の大茶會を開催したといふ遺跡のあつた邊を通り越して、西側の土手の上にあがると、高い上手の下には紙屋川の深い溪底が一帶に見渡されて、なるほど、瘦せ細つた潺緩たる細流に沿ふて、雑木まじりに幽かに白い花が春を魁けて、もう此處ばかりには都の春が訪れたかと思はれるやうに葭簾張りの水茶屋などが架つて、春めかしい緋毛氈を掛けつらね、花模様の染幕などを張り、襷がけに薄化粧を施したる若い女中が頻りに客を呼んでゐる様子である。私は、その天神裏の高土手に沿ふて九十九折りに切り開かれた小徑を傳ふて、水茶屋の架つてゐる紙屋川の溪底まで下りていつた。うで卵、するめ、巻き壽し、などの、一寸した酒肴の用意も出來て正宗の瓶など置き並べ上戸に不自由もない、觀梅の支度である。そして梅の數も可なりあつて、なか／＼馬鹿に出來ぬ一つの梅溪であつた。

そんな處でも多くの人が餘り顧みないでゐるならば却つて好いのだが、もう、そんな水茶屋などが出來てゐては可惜清境を俗了してしまつてゐる。やがて私はその溪をもとの道へ上つて、今度は、紙屋川の向岸に沿ふて、叢林の中に人の踏み馴らした形ばかりの細徑を傳ひ、川の土手を



下へくと歩いて来ると、日は麗らかに背を温め、歩きながら微睡を催うすやうである。小徑の右手につどいた一帯の田畑や藪林には、そちらにも此方にも金槌や鉦の音が高く響いて木の色新しい普請をしてゐるのが眼につく。篠竹の叢林と點綴して處々に立つてゐる道傍の茅屋の中から長閑かさうな梭の音が、かたんくと洩れて来た。何時の頃からそのまゝであるやら分らないやうな、古びた、その機を織る家に、私は、何となく懐しい興味を覚えて、軒下に立ち寄つて、こち等は、洛西の何といふ處であらうと思つて表札を窺いて見ると、それには白梅村としてあつた。なるほど、肯づきながら又段々下へくと歩いて、二たび、とある家の軒を窺いて見ると、そこには紅梅村としてあつた。

## 車窓の春



ついで一週間ばかり前まで、梅が丁度満開だなどいってゐる間に、冷い雨の彼岸びよりが續いたりして一向春らしい氣が引立たなかつたが、氣まぐれな天候は一日のうちにも幾度も空の顔色を變へて、まだ何となく十分に降り足りないやうな雨晴れの、妙に暖い日がぼか／＼照つてゐると思ふと高い上空にもく／＼しい夕立模様の黒雲が瀰漫して、それが頻りに動いてゐると、それにもかゝらず天の一部分には澄んだ紺青色の大空が、優しい、外國の美人の眼のやうに覗いてゐるのが見える。實際、よく注意して見てゐると三月の末のその頃の天空の色ほど氣まぐれで、そして美しいものはない。地濕めりのした大地からは暖い春の日に蒸されて、うすい緋のやうな陽炎が上騰つてゐる。

さうかと思つてゐると、たつた一日か二日好晴がつゞいた後は、——東京の空では——今度は又厭に氣持ちの悪い南風が吹いて、砂塵を捲き揚げ、此の二三日、眼に立つて急に蕾の膨らんだ櫻の梢を折れるかと思ふほど揺りさはめくのである。そして、そんな厭な南風が二三日も續いて吹くと、大きく肥つた蕾は遂に堪らなくなつて、氣の早い枝から花を開いてしまふ。年によると、それが、まだ四月といふ聲を聞かぬ間に、七八分どほり咲いてしまふことがある。そんな時に限つて、氣候がまだ本當に定まらないので、折角開いた花が、その頃の季節に有り勝ちの颯風に煽



られて終日吹き揺られてゐるのを見ることがある。そのうち三日も四日も續いて狂ふてゐた嵐がやう／＼治まつたと思つてゐると、その晩あたりから雨になつて、開いたばかりの花は一夜のうち、すっかり色が褪めてしまふ。私は、そんな春に出會ふたびに、實に天を仰いで熱々と天の無情を怨む氣になる。東京の櫻花は得てそんな運命に終はることが多い。

ある年の四月の末、私は、東京から關西の方に向つて汽車に乗つてゐた。寢臺の上には、いつまでも春眠を貪つてはゐられないので、早く眠を覺して、そこらの形付けられた寢臺車の窓に凭つて、まだ、十分曉の夢から覺めない外景の山野に眼を放つてゐると、そこは丁度、東海道線では、私の常に最も好む關ヶ原あたりの峡谷を走つてゆくところであつた。私は、もう屢々この邊の車窓の眺めについては書いたことがあるが、私は何となく此の邊の風景が好きである。これは無論歴史の聯想が自から然らしめるのであるが、關ヶ原の峡谷から西へ抜け出で、やがて伊吹山を眼近に仰ぐ風景は決して凡庸でない。悲しくもあれば雄々しくもある。

その時、東京ではいふまでもなく東海道の沿線到る處既に春開け花辭してゐたのであるが、關ヶ原附近は冬季東海道第一の雪の深いところだけあつて春も自然と晩れてゐるので、私はまだ全

く明けきらない、向うの山の根を見ると、松の雜樹の中に交つて、たつた一本の山櫻が、薄暗い木蔭に、ぼつと眞白に咲きいでゐるではないか。それは、花ばかり早く咲き出る種類の櫻樹とちがつて、純粹の山櫻と見え、薄紅の葉と、ともに片山里の春を飾つてゐるのが、又となく佗しくもあり世の常ならず美しくもあつた。櫻は四圍の環境や背景や如何によつて、集簇的に眺める時は瑰麗であるとも、動もすれば俗氣を帯び易いのであるが、その時觀た櫻は聊も俗氣の無いばかりでなく何だか、それこそ春の精とでもいふものゝやうに感じられた。私は、その後もその邊を汽車が走るたびに、春でない時といへども、眼敏くこの櫻樹を探し眺めてゆくのである。心ある人は氣を付けて見て往かれよ。

さうかと思ふと又、ある年の春は四月の中間に東京から夜汽車に乗つてゆくと、その汽車は參遠あたりで早くも夜が白み渡つた。名も知らぬ村落を通過してゆく時、ふと見ると、家々ではまだ深い春眠中にあることゝ思はれて早起の人の姿一つ見えぬが、ある農家の前庭に一本立つてゐる山櫻が、靜かな白い狹霧の棚曳いた中に、眞白く満開してゐるのを見た。さながら春の精でもあるかのやうに思はれた。私は汽車の窓から何時までもこれを見返りつゝ、汽車の速きことを憶



んだ。そしてもう春は野に山に漲つてゐることを思った。

又ある年の春、それは既う四月の末であつた。東京では降りつゞく春雨に、八重櫻さへ見にくく色褪せて、日にく青葉し、空しく逝く春の悲しみを催うさしめるやうな時分であつた。私は月の二十四日の夜立つて關西の旅に出た。その時は名古屋から乗換へて關西線をいつた。――その時のことは既う度々誌したことがあるが――折りしも尾州の平野には菜の花が一望黄金色の席を敷き延べたやうで、木曾、揖斐の長江を上下する白帆が靜にその野の果てに望まれたりするのであつた。汽車が伊勢の龜山まで來ると、伊勢大廟へ參詣した客が多勢乗込んで、車内は一層陽氣になつた。沿道の野には茶種の花が咲きこぼれ、往く手の右方に高く聳えてゐる鈴鹿山脉には春蕾を帯びた物凄しい黒雲が湧いて、その爲めに山の輪廓が墨繪の如く鮮明に半空に浮んで見えた口數の多い大阪あたりの旅客が車室にぎつしり詰つて賑かに語り合つてゐるのはうるさくもあるが、また春の旅にふさはしい陽氣さでもあつた。關西線の拓植驛あたりまで來ると、あまりに暖く春口に蒸されてゐると思つてゐた空が一面に曇つて來て、ぽつり／＼と大粒の雨滴が車窓を斜めに打つて來た。それから汽車が伊賀の上野平野をさして只走りに駛せ下つてゆく間、山峽の春雨は濛々として白く、遠くの山近くの野を罩めて、白雨のやうに一と仕切り降つてゐた。が、やが

て程なく上野平野の中心に出て來た頃には雨は竭み、雲散じ、薄墨を流したやうな空の一部に眩しい太陽の光線が縞目のやうに射して、疎らに落ちて來る雨滴は微温湯のやうに暖かであつた。汽車が上野驛に着くと、暫し峽中の雨に閉ぢ籠められてゐた旅客は、はじめてほつとしたやうな氣になつて、車窓を排して吾れもわれもと物賣りを呼んで茶を求め辨當を買つた。名残りの雨は野の面に尙ほ銀絲の如く落ちてゐるのが、雲間を漏れてくる日の光に白く照らされてゐる。野には蘭を過ぎてやがて凋落しかけた黄白の菜の花が、先程の白雨のために認めか叩かれて、芳香散亂、いと春雨に濕つた甘酸っぱい匂が強く鼻に通ふて來た。

昨夜東京から乗つて來たのであるが、今朝一度早く眼を覺ましてから、寢不足で假睡々とした氣持ちで恚れかゝつてゐたのが、こゝまで來ると、もう奈良も京都も遠くないといふ、はつきりと氣の引立つたやうな氣持ちになるのであつた。上野から島ヶ原の驛を一つ過ぎると、長いトンネルがあつて、それを向うに出抜けると、そこはもう山城の國になつてゐるのである。そこには畫趣饒かなる木津川が深い山峽から清瀬となり又急潭を成して流れ出てゐる。それからその木津川の奇態百様の溪流に沿ふて汽車は笠置の方に向つて西するのである、笠置あたりは櫻花の多いところである。



その時汽車が、トンネルを南山城の方に抜け出ると、一度晴れたと思つた空は又春雨に曇つて強い西風は狭い峡谷を真正面に西から東へと吹いて來た。雨の脚は殆ど三十度ばかりの角度をなして横さまに吹きしぶいてゐる。高い崖の上を駛せてゐる汽車の窓から溪流の方を見下ろすと、そこには一艘の柴舟が急潭に溯つてゆくのが見える。磊々たる巨岩の上を一人の男が雨に濡れて這ひながら纜を曳いて溯つてゆく、一人の男は棹を操つて巧みに危岩怪石を避けたり又それを利用して舟を進めてゐる、一人の男は紺蛇の目の傘を阿彌陀に翳して西から吹き附ける春雨を避けてゐるのである。私はそこに一幅の日本畫の繪を見たのである、それから汽車は段々笠置加茂と過ぎて木津驛まで來ると、又雨は晴れて遠くの方に春の野が開展して來た。眞青い緑の麥畑が、和かな白い霞の中に遙かに望まれた。私はその時は奈良に志してゐた。

奈良に着いた時には、生駒山の頂邊にまだ稍々残暉があつたが、公園の畔に在る旅館に就いてお茶を飲んで一息すると私は早速奈良の公園に出て見た。長い春の日はやうやく暮れんとして大佛殿の畔に薄ら寒い風が蕭々として吹いてゐる。そこにはまだ遅咲きの山櫻がところどころに寂しく咲いてゐた。そして南圓堂の方では多勢で御詠歌を流す合唱の聲が高らかに響いて、それにつれて打ちたくく鉦の音が、靜かに暮れてゆく公園の樹立の中に冴えて聞えた。その鉦の音に誘は

れるやうに、山櫻の花がほろほろと落ちて來て、樹下を往く私の袖のうへに散りかゝつて來た。ゆく春の夕暮れの鉦の音に誘はれてほろ／＼と袖の上に散りかゝつて來た山櫻にも、私には忘れられない詩趣があつた。



春の悲しみ



長い冬に閉ぢこめられてゐた古い都の人間は、もう三月の聲を聞くと、いつまでも家の中にじつと縮つてばかりはゐられなくなつた。それに今年には陽氣の回復するのが例年になく早くつて、幾度か寒さの振り返しがあつたにも係らず三月の中旬を過ぎる頃から、もうすっかり洛の内外に本當の春景色が調つてしまつた。

四條の大橋が、今日では日本にたゞ一つ取り残された此の古い都に不似合な鐵筋コンクリートに改築されたり、又この都の生命とも云ふべき加茂川の流れに溯つて京阪電車を架設したりする文明的破壊力が思ふまゝに古都の雅致を破壊してゐるにも係らず、三條の大橋ばかりは、それでも尙ほ、少くともその外形だけは青銅擬寶珠を飾つた古風な舊形を保存してゐるのであつた。自分はその橋の上を渡つて見ることに興味を持つてゐた。——死んだ島村抱月氏も嘗てそんなことをいつてゐたが——しかし、自分のやうに京都に殆んど常住してゐる者にとつては、三條橋をたゞ單に渡つてみるといふことのみには興味が薄らぐのであるが、自分はもとより京都に滞在してゐても、京都の住民ではないので、なるべく常に観光を目的とする旅客のやうな心持ちで居ようと心掛けてゐるのであつた。何處に住んでゐても常に一面旅客のやうな心の持ち方をしてゐるといふことは、一寸考へれば落着かないやうであるが、又一面に於ては、日常目睹耳聞の凡てに對



していつも清新な刺戟を感じ潑刺とした興味を持つことができるのである。私は東京に居ても、つとめてその心掛けを失ふまいとしてゐる。

三條橋も見馴れては一向興味が少いが、それが、もうぼつぼつ外に出歩いて今までほど厳しい寒さを感じぬ頃になると、加茂川の河原の芝生に眞青な春草がいつの間にか芽を出す。それは、こんな都の中央にあるとも覚えぬ鮮麗な緑の色をしてゐるのである。すると、それと時日を期して約束してゐたかと思はれるやうに兩岸の塘堤に立つた柳の枝が自然と色づきはじめる。それを傍に立ち寄つて見るとそんなにまだ芽ぐんでゐないやうであるが、遠くの方から見渡すと、何となく青く煙つて見える。

それでも三條橋の中央に立つて、北側の欄干に凭たれながら川上に方つて遠く連亘してゐる鞍馬から雲ヶ畑一帶の北山の方を眺め渡すと、まだなか／＼に冬は深い。高野川の溪の奥、山と山とが襟を重ねたやうに折り重なつてゐる彼方に、丁度北極熊の背の如く、白く、まる味を持つて一部分見えてゐるのは比良岳の肩背である。そちらの方から、春は四月になつてもまだ、どうかすると朔風の如き寒い風が、この都に吹いて来る。

けれども北の方にさういふ執拗な冬の名残りを留めてゐるにもかゝはらず、この古都にはもう

早い春の音づれてゐることは、どうしても争はれない。

そして、暖い日が続いてゐると思ふと、その翌日あたりから絹糸のやうな春雨がしと／＼と降り出して来た。それが、昨夜からかけて今日半日も降りつゞいてゐるうちに、陽氣が又雨のため寒くなつた。いやに空氣が濕つぽくなつて来たが、それでも戸外に立ち出て街を歩くのが怠儀なほどでもない。傘を翳して自分は祇園町の通りに出て行く。春の雨は絹糸のやうにしと／＼と街衢を罩めて降り濺いでゐるが、兩側の人道を歩いてゐる人間も少くはない。それが、東京の銀座街に行く男女ほど新しくはないが、何となくこの古雅な市にふさはしい小綺麗な人間が多いやうに思はれる。晝のお座敷に行くのであらう、美しく化粧した舞妓が長い／＼だらりを背に飾つて、小鳥のさへづるやうな黄色い聲で何か呼び交はしながら、男衆に紺蛇の目の傘をさしかけられて相合傘で、雨に濡れた四條通を横切つてゆく。

祇園町の通りのちやうど中ほどの北側を横丁に切れる角の處に京人形を賣つてゐる店がある。それが、先達て中殿しい冬の間は、思ひなしにか、何となく道を行く人に見棄てられ勝ちであつたが、不思議なもので、陽氣がだん／＼春めいて来ると、自然と又傍を通る人を飾店の前に立ち止まらしめるやうになつて来た。ガラス戸の中には室町人形や、菊慈童や、筒井づゝなどのやう



な飄逸な、淡彩な物があると思ふと、小春治兵衛やお祭佐七のやうな纖巧な艶麗な物もある。道を行く人の心にも春が芽ぐんで來たのである。彼等はいそその前に立ち止まつて見てゆく。

私はそこを北に折れて松井の町を真直にどこまでも北に行くと、富永町末吉町の古めかしい花街を左右に見て、やがて狭い横丁の露地を向うに抜けると、そこに白川の流に架した小さい板ばしがある。それは巽橋である。私はそれを何度渡つたか知れぬ。橋を北に渡ると、それが新橋通りの花街で、そこを今度は右に折れるとすぐ又小さい板橋が架つてゐる。やつぱり流れは白川であるが、その處で流れが曲折してゐるのだ。その新橋の袂に古い柳が一本立つてゐる。私は京都といふ京都の中で、おそらくこの柳ほど好きな柳は好きな柳はない。それは場處柄が既に祇園の花街である。祇園幾千の美人が紅粉を粧ひ、凝賦を洗つた使ひ流しの水の落ちてゆく白川の残流に臨んで長く枝を垂れた青柳の風情が私には何となく興を惹くのである。私はその柳が今日の春雨でどのくらゐ芽を吹いたかと思つて雨の降るたびにそこらあたりまで幾度となく見にゆくの常であつた。

私には、まだ、この古い都に生々しい戀の創痕が残されてゐる。それは今尙ほ思ひ返すだに惱ましい思ひ出である。晝夜を分たす白川を流れ落ちてゆく水にも逝く春の怨みは盡きす絶つてゐる。

新橋の畔の青柳は、あれからもう幾度か枯れては芽ぐみ、枯れては芽ぐみしたが、私の惱みの癒ゆる機なく、私の怨みの融ける期はない。

私は春雨のしぶきを全身に浴びながら、それから花街をすつと一と廻りして、祇園繩手から又四條の川端の方に出てくると、加茂川の兩岸は濛々と春雨に煙つてゐる。そこにも妓樓の畔の岸の柳が萌黄に色づいてゐる。四條橋の東袂の南座には大阪の花形に東京の役者が二三枚加はつて派手な出し物に繪看板が客を呼んでゐる。

私は祇園町の南側に軒を並べた書畫屋だの骨董屋などの飾窓の中を覗いて見ながら、祇園神社の西門の石段下まで來て、そこらにある、時々買ひつけの花 に入つて椿の花と黄梅の枝を少許り買つて春雨に霏しながら花見小路の花街を、露地から露地に抜けてもどつてくると、演舞場の大きな建物の中で高い調子に太鼓を打つたり三味線の合奏をしたりしてゐるのが、静かな春雨の中を傳つて響いて來る。

「あゝ、つい、うつかりしてゐた。もう都踊りの稽古をしてゐるのだな。」と思ふ。が、もうその都踊りを見る興も湧かぬ。そんなことを思ふて見るのも何だか惱ましい。

東京などでは、とても見られない。脚の早い、おとなしい京の春雨は一日降ると、もうその夕



暮から晴れた。

翌日は雨上りの、丁度歩き加減の地濕りがして、折から彼岸の入りといふので、もう、長い冬の間から今日を待ちかねてゐた老若の男女の群れが、今年の春のはじめての人出といふほど出るわ／＼。私も道を歩くに重苦しい外套は家に置いて、輕衣のまま東山の方に出て見た。なるたけ人通りの少い處をく／＼と縫ふやうにして、東山電車線を向うに横切つて、下河原から高臺寺の一の表門の前に出て、八阪の塔の下を通りかゝると、千幾年と古りたる五重の塔の褪緒色を背景として、その前に立つてゐる彼岸櫻がもう三四分どほり花を開いてゐる。櫻は梅と違つて花を開きかけると、瞬く間に開いてしまふ。それが何だか春を享樂するに心が追はれてゐるやうである。

それから五重の塔の脇をすつと廻はつて産寧坂の方に上ぼつてゆくと、清水の方へ上がつて行くもの、下りて高臺寺から圓山の方に出ようとすする群衆で、さすがに砂塵の立たぬ、この山の都も今日はめづらしく往來に塵埃が立つばかりである。私はその群衆の中を分け／＼、たうとう清水の舞臺まで上がつていつた。そこには大勢の群衆が欄干に凭れて餘念もなく、遠く一眸の下に見渡せる洛中洛外の大景に眺め入つてゐる。愛宕は一と際高く頂の邊に薄い雲の切れを附けてゐる。

それから左の方にすつと、西山一帯が長く走つてゐる。その盡きる處に一ヶ處凹處があつて遠くとほく雲とも霞とも水とも人煙ともわかぬ糢糊とした物がある。その左方にはすぐ男山八幡の丘陵が起伏して、それから又左へ／＼と續いてゐる。その糢糊としてゐるあたりの狹隘が即ち淀川の流域で、その向うの方に大阪の平野が展開してゐるのである。それからすつと近くに伏見から下鳥羽の山城平野がやうやく早春の目を覺めようとして淡白い靄のやうなものを一面に被いでゐるかのやうである。

私はそんな物をあてもなく遠望してゐると、春の押寄せて來るのが楽しいといふよりも、生なまなか中に浅い悲しみを促されるやうな心がある。それは何故とも解らない。戀の叶はぬせいか、そんな生々しい怨みでもない。紅顔の衰へるを惜む爲めか、それは夙に覺悟してゐる。これぞと口に明言することの不可能な氣持ちであるが、たゞ／＼何となく春の音づれが、うすら悲しいのは、どういふところから湧いて來るものであるか、捕捉することが出来ぬ。

私は清水の境内をすつと一とめぐりして、今度は高い石磴を踏んで降り、舞臺の下の櫻樹の中の徑を又もとの西門の方に戻つて來て、そこから群衆に交りながら順路を高臺寺の前の松林の方に返つて來た。



そこから試みに瀟灑な石段を登つて高臺寺の境内の上によつてゆくと、方丈の土塀の中にある彼岸櫻の老樹が、こゝではもう五六分通り開いて枝を垂れてゐる。あたりには人も居らず、静かな境内に花は獨りで咲いてひとりで散らうとしてゐる。

高臺寺は豊臣太閤の室北の政所の菩提寺である。歴史の聯想は、私をして寂しく咲いてゐる老櫻のやがて散りゆく色を悲しませしめた。(十二年三月十日)

## 新涼の頃



六月の末から赫つと照りはじめた暑さは、七月のお盆も過ぎて土用に入ると、たるみもなく、一日々々と劇しさが加はつた。そこへ以つてきて、西南の風が四五日もつゞけて吹き荒れるので連日の炎天に乾燥しきつた砂塵が、巷や市中の廣場に濛々と捲き揚つてゐる。道を往く者は、じはくじはくと汗のにじむ肌とその砂塵がざらざらと吹き付けるので、まるで人心地もしないほど氣持ちが悪い。奇麗に撫でつけた女の頭髮には埃が白くたかり、男の紺の羽織には、肩のあたりが砂文字が書けさうである。

長い間の炎暑に、身體や金の自由の利く人は都塵を離れた山の上、海のほとりに去つてしまつて、東京にはたゞ働く人間ばかりが踏み留まつてゐる。夏日の清新味も七月のお盆過ぎまででそれが過ぎると人々の面には連日の暑氣に悩む疲労の色が表はれる。いかなる健康さうな屈強な男子の容貌にも、日々炎熱と闘ふ苦痛の痕が浮び、憔悴の影が伴ふ。私はそれを見て、何ともいへない無惨な感じがする。人間は、かくまでして酷熱なる氣候と闘はねばならぬのかと思ふ。そして、かくして苦熱と闘はねば妻子眷族を養ふことが出来ぬのかなあと思ふ、人生は實にミゼラブルのものであると感ずる。

それは七月の二十日過ぎ、土用に入つて四五日過ぎてからであつた。私は三間しかない、狭い



家の茶の室になつてゐる四疊半に、西日が酷しく射込むので、——それを遮るために、六月に此處に移つて来た時、もう西日を豫想して、手ごろの梧桐を二本、植木屋を頼んで植えてもらつたのであるが、その時肝腎の入日の方向を少し見當はづれたので、折角の梧桐が効ひがなかつた。——そこへ日おほひをしようと思つて、テント様の物を買ふつもりで、四谷の通りに出掛けていつたが、どうも特別に注文しないと、丁度恰好の物がなかったので、たうとう四谷を通り越して銀座まで電車に乗つていつてしまつた。銀座まで往くと、もう十二時を過ぎてゐたがさすが人通りの多い銀座街もまるで深夜のやうに人の往來少く、ひっそりとしてゐる、兩側に軒を並べた店舗も米客が始と絶えてゐるので、伽藍としてゐる。店の者も奥に入つて店頭には、何處の店にも人の多くなる氣はひもない。鈴懸けの路傍樹も、ぐんなりと烈日の威に凋れてゐる。その間を電車が、尖つた神経を刺戟するやうな喧しい響を揚げて走つてゐるばかりである。

私はそんな時に、銀座を歩いてゐて、何ともいへない盛夏の市中の寂莫に襲はれる。

去年の夏の炎暑は、私をはじめて東京に来てから殆ど三十年に近い間に嘗て遭遇しなかつた暑さであつた。東京の暑氣は、七八九月の夏の間に九十度を越す日は三日か四日かくらゐるものである。然るに去年は九十度を越した日が二十幾日もあつた。八月が來ても又九月が來ても、初秋

の爽涼なる空氣の色を見て喜ぶことが出来なかつた。

自然は實に不可思議である。單に氣象だけについて考へてみても、「今日は實に好い日だなあ。」と、生存の幸福をしみじくと感じて、天に向つて甘えたいやうな心地にならざることがあると思ふと、今年のも、四、五、六のやうに、淫雨三ヶ月にわたりても尙ほ霽れないといふやうな不愉快な天候を辛抱せねばならぬこともある。かういふ時には、まるで冥府にでも住んでゐる如く生きてゐる心地もせぬ。生存がつく／＼厭はしくなる。

ある年の夏八月の、もう土用が明けてから十日あまりも立つてからであつた。二十日ばかりも息も繼がせぬやうに炎天の打ちつゝいたあと、一夜軒下の泥溝に瀧の流れ落ちるやうな豪雨がして、夜一と夜降りとほした雨は、翌日の午頃になつて奇麗に晴上がった。私の住んでゐる處は、牛込の赤城の高臺の阪の途中であつたが、二階の、西北に向いた高窓から眺めると、のろい勾配になつた牛込臺が江戸川の低地の方に次第下がりに低くなつてゐるのが一目に見渡されて、その向うの方には目白の丘、その左方には早稻田の方から遠く雑司ヶ谷、鬼子母神の鬱蒼たる杉の森も見えてゐる。そして尙ほその彼方には秩父の連山も見えるのであつた。それが先日中炎暑の打ち續いてゐる間は、天地が濁つた空氣に銷されて、紅のやうに赤熱した夕陽が毎日毎日毒瓦斯のや



うに餘炎を放射しながら、そつちの方に沈んでゐた。

すると、その夜來の豪雨の名残りなく晴れた日の午後、いつもの高窓から、のろい勾配を成した地面の形なりに人家の瓦屋根の連続してゐる方を見やると、昨日までひどく濁つて不透明であつた其等の屋根や瓦葺に交じる樹木などが非常に透明に見えて來た。蒼く晴れ渡つた大空の空氣の色も爽かで、いつもは毒々して黄濁してゐる西北の空の果ても今日は清く澄み、藍に染まつた秩父の連山が、手に取る如く見えてゐる。

「あゝ、もう、すつかり秋だ。」

と、口に出して獨り言をいつた。

その頃から市中には、葉唐辛を賣る聲がよく聞かれる。

「唐辛しやい、とうがらしやい！」

といふ百姓の寢呆けたやうな賣り聲を呼びとめて私はよく自身で葉唐辛のつくだ煮をこしらへる。

涼しい朝餉の膳に、ちやうど漬き加減の茄子の色は朝顔の色と紫紺を競ひ、冷水に拭き清めた身體には、案外、酷しい暑中にも似ず健康な食欲の進むのを感じる。

その頃から市中の焼芋屋に母指ほどの大きさの新芋を煮で、賣つてゐる。私はその新しい風味を好む。黒芋や枝豆もその頃から、おいおい本當の味になつて來る。ピールの冷したやつをぐつと呷りながら、さういふ清新な野菜で夕飯の膳に向つてゐると、新秋の涼は膳の下から膝のまはりに湧いてくる。(七月四日夕)



よく見る女



去年の春私は山城の宇治の町に半月ばかり逗留してゐた。それは四月の末から五月の中旬にかけて所謂宇治の新緑が、あの、いつ見ても水量の多い宇治川の清流に滴らんとする時分のことである。私はその時くらゐ新緑を心ゆくばかり眺め暮したことはない。

それのみならず宇治には甘い酒があり、美しい仲居がをり、口に適する食物も数々あつた。それでもどうかすると私は時々京都にいつて見たくないので宇治橋の袂から電車に乗つてよく京都に出掛けた。そして半日くらゐ京都の寺々を巡つて晩は何處かで夕飯を済まして夜遅く最終の京阪電車で歸つてくることがある。宇治ゆきは中書島で乗り換へるので、どうかするとそこで三十分ぐらゐは待たなければならぬことがある。

その夜も最終の電車で私は四條の停留場から乗つてきて中書島で降りて宇治ゆきと書いた向ふ側の電車に入つていつて長いボギー車の中程に腰をおろした。まだ誰れも乗つてゐないので私は唯ひとり發車を待ちわびながら下駄の踵でコツ／＼車臺の土間を叩いてゐるとそこへ男女の二人づれが入つてきた。私は見るともなくその方へ視線を向けると、女はどこかで寫眞か何かで見たことのある女である。女は巻といふのか總髪を兩方に分けてすつと後の頸窪うなじぼのところうなじぼで圓子のやうに束ねてゐる。一眼見てもすぐ氣のつく顔の特色は眼と眉毛の間に隙がなくなつて形の整つた眉と



二重瞼の、張りのある強い表情をもつた大きな眼とが何だか西洋人と日本人の混血児ではないかと思はれる。年は若くて二十八九、もう三十を出てゐるかも知れない。男はその女と二人ぎり並んで腰を掛けるにしてはさまで立派な方ではなく、色の黒い、顔の細長い、鼻目の引立たない、平凡な表情をしてゐる。その男の特色は新しくアメリカからでも歸つてきたといつたやうに高いカラアが色の黒い顔と黒の勝つた洋服の洋套との間に白く輝いてゐるのであつた。

「はて何處かで何かで見た覚えのある女の顔だ。」とおもひながら、私は所在なさに朧な記憶を思ひ浮べやうとした。それとも神戸あたりにゐる雜種兒であらうかと思ひながら尙ほ考へてゐるとふつと思ひ出したのは嘗て大阪のある演劇會社で女優養成所を設けたときその募集に應じて入つてきた女優の中に以前の操行を新聞で攻撃せられ、決してさうでないといふ身のあかしを立てるために、女には生命から二番目の大事の黒髪を根元からふつつり切つてクル／＼坊主になつて見たといふその女優の顔を「演藝畫報」か「演藝俱樂部」かで見ることがあつたが、今見る女の顔がその寫真に活寫しである。例の演劇會社の女優だらう。あれはたしかその後會社を退いてアメリカへ行つたといふことをその當時新聞で見たことがあるやうに思ふ。それからアメリカでは何でもウエストの方の大平洋岸のある州の女優學校に二三ヶ月入つてゐて半歳ばかりでそのアメリ

カから歸つてきて横濱に上陸したときに、何事でも種にしようとして張躰明目としてゐる物好きを東京の新聞記者に捉まつて話を訊かれたその時の記事が出てゐたのを新聞で讀んだことがある。そのうち新聞にその女に関する記事を見たことはない。新聞にでも出なければ固よりその女について何事も聞かう道理もない。しかし此の女の顔はどうも嘗て寫真で見たことのあるその女に酷く似てゐる。

私が電軍に腰掛けてそんなことを思つてゐる間に彼等は車掌臺へのすぐ出入口口に近いところに腰を掛けて、遠くには何を話してゐるか聞えぬほどの低聲で、靜に囁いてゐるのである。

そのうちに、後からあとから人が入つてきて、ガラ明きかと思つた電車の中にはそれでも十四五人の人が乗込んだ。やがて車掌は車掌臺に上つてきて、ハンドルを廻はすと、車臺は動きはじめた。觀月橋、御陵前、六地藏、木幡、黄蘗と五六ヶ所に停車して宇治橋の終點に着くと、乗客はみな降りてしまつた。彼等もそこで降りた。晝間は停留場前の宇治橋のすぐ橋袂のところ、俾が五六臺客待ちをしてゐるのだが終電車の着く頃には皆な引揚げてしまつて、ゐないことが多かつた。それで私は仕方なく歴史的懷想に富んだ古風な青銅擬寶珠のところ／＼に立つてゐる宇治橋の橋板をコツ／＼と下駄の足音を立て、渡りながら浮舟園の離座敷に戻つてくるのであつた。で、そ



の晩も改札口から出てきながら彼等の動靜に別段注意するともなく好奇の眼をやりながら注意して、いづれは浮舟園か、菊屋か、それとも向河岸 温泉か此の三つのどこかへ落着くのであらうとおもひながら私と同じやうに宇治橋を渡つてくるかと思つてゐると、彼等はそつちにはゆかずに十々道を眞直に向河岸の方へといつてしまつた。

それから五六日して五月の十三日の午前九時二十四分京都發の最大急行列車で私は東京に歸つた。そのとき汽車は大谷のトンネルを東に通り抜けて、一度大津に停車し、それから琵琶湖の煙波や比良比叡の連峰を双眸に收めつつ急速力で駛せてゐた。私は車窓に顔を向けて暮春の野を渡つてくる軟かい風に面を吹かれながら沿道の景の移りゆくのを飽かず眺めてゐると、すぐ後部の車室から此方に入つてきた一人の女があるのに眼がついた。それはつい此の間京都から宇治にかへる最終電車に乗り合せたあの大阪の演劇會社の女優であつた女に違はない。此の間は夜眼のうへに遠目であつたのでそれほどと思はなかつたが、今日は此の間の夜のときにもまして數段晴やかに美しく見える。頭髮は野暮らしい廂の出たのちがひすつと以前に流行つた夜會風にして金茶色の錦紗の羽織を軽く被つてゐる。食堂へいつたのか便所に立つたのか彼女は私の前を通つて前部の方に入つていつたが、間もなくまたそこを通つて後部の方へ歸つていつた。さうして晝

間の明るい汽車の中で見ると特色のあるのは眉毛と二重瞼の眼ばかりではない、よく通つた鼻筋の格好といひ、色艶のいゝ顔の血色も紅の唇も丈の高いのも肉付の豊かなのもどうしても純粹の日本人の女のやうではない。私は思つた。これは例の演劇會社にゐた女ぢやあるまい、やつぱり神戸あたりにある混血兒の娘に違ひない。さう思つて見てゐると、彼女は後部の自分の今まで坐つてゐた座席を起つて向側に腰を掛けてゐる洋裝の乗客の側に寄り添うて斜に腰をかけつゝ、かねて知人と見えてさも馴れ／＼しげに話しを仕掛けてゐる。その口付の飽まで嬌羞を湛へたる、眞珠の如き眞白き齒並の整うたる、何かいはうとして心持ち眼を見張るときにする上瞼の働く具合など、どうしても日本人とはおもへない。神戸にゐる混血兒に違ひない。と、私は遂に獨りで心の中にさう定めてしまつた。

と、私の乗つてゐる車室の私の側の一番後部の隅のところに私より前から乗つてゐた一人の紳士があつた。彼男はどこかの學校の教授などでもあるか縫紋のある無地お召の羽織に矢張り袖も袴を穿き、小形の洋本を先刻から眼を放さず讀みつゞけてゐる。

すると彼女の側に寄つて腰を掛けた洋裝の男子は暫らくしてちよいと起つて縫紋の紳士の側にきて一言一言ささやいていつた。すると縫紋の紳士はあとから自席を立つていつて後部の車室に



入り、彼女と並んで三人腰を掛け少時談話を交はしてゐる風であつた。

汽車はそれからまだ／＼長い時間を経過せねば東京にはかへり着かねのである。そのうち私は長時間の車行に疲れて凡ての物に對する注意の興味を失つてしまつた。

今年になつてからであつた。二月の中旬私はある友人と二人づれで外濠線の電車に乗つてゐると、お茶の水の停留場から入つてきた男女の二人づれがあるのを何の氣なく眺めてゐると、その女の方はまさしく宇治ゆきの電車の中で見、そのうち東海道の汽車の中で見た女であつた。連れの男が宇治ゆきの電車の中で連れであつた男か、それと違つてゐるかは記憶してゐない。

その後また此の春京都へいつたときふと、ある旅館の廊下でその女を見た。私は「あゝ此處でも見た。よく見る女だ。」とおもひながら私のところへきた女中に先刻廊下で見た女は何といふ女であるかと訊くと、それは果して大阪の演劇會社にゐた女であるといふことが分つた。私にはその女が京都大阪、東海道の汽車の中、東京と股にかけてゐる女のやうに思はれた。(大正六年六月十五日)

### 昔し住んだ家



生き残つた、これから先の晩年を、何處に居つて過さうかといふことを、私は屢々考へさせられる。いな、屢々どころではない。殆ど常に私は思つてゐる。勿論、金が自由に有つて思ふとほりのことが出来たら、東京の市街の中にも、自分だけの別天地を造ることが出来るのだが、その自由の叶はぬ自分には、何とかして、微力の許す範囲内で老後の落着き場を安定したいものである。

東京の郊外に今後を落着くことにきめてしまはうか、湘南の方についてみようか。それとも駿河灣に瀕した岳南地方に遠く離れていつてみたいなど、いろ／＼に迷つてみる。

今のところ、東京の西郊東中野あたりは、省線電車の便利もよく、銀座などへ出るにも電車の乗換へがなくて、有楽町驛あたりへ三十分で往けるから、東京へ遊びに出るにも丁度いゝくらいである。この上もし、欲をいふなら、櫻木町ゆきの省線のやうに二等車があつたら、申分ないと思ふくらゐのものである。が、東中野附近は、自分で家を建てるとして、借り地でもする日になると、地代が馬鹿に騰貴してゐるから、とても少し贅澤に空地を樂まうなどいふことは困難であるがさうかといつて、折角郊外に住居するほどならば、空地でも樂むことが出来ないは無意味である。それとも、省線について、すつと奥——西——へ入れば地代などもさう高くないから



二百坪や三百坪の地所を借りることも、さよで金は掛らぬ。しかし武蔵野もこれから以上西へ入つてゆくと、何となく秩父風しが寒さうである。事實又寒いのである。

これから段々年を取つて、肉體に抵抗力が乏しくなつて來ると、寒氣に耐えなくなるから、いつそ今からさういふ場合を見越して湘南の方にでも、落着かうかとも思ふ。しかし海に近い處は松林などを樂むにはいゝが、その他の庭樹を植えるには地味がどんなものかと思つたりする。それには小田原の舊城址につゞく一帯の高臺とか鎌倉の山に寄つた方なら好からうと思ふが、もう、そんな好い場處は金のある者に夙に占領せられてゐるから、吾々にはとても望めないことである。海濱でもすつと駿河灣の方だと、まだ相當な景勝の地が、どうかすると手に入らぬこともなからう。

この間、東海道を汽車の窓から見てゐると、興津から東、富士川の西方に至る邊、由井、蒲原といふ所あたりに山を背負つて海に面した好い處が多くあつたのを見た。あの邊に住んでゐたらと思つたが、東京からは、かなりの距離である。所詮何處に落着いていゝかに迷つてしまふ。

しかし、自分もさう落着いてゐたい。偶には旅行することはあつても、歸つて來て、こゝが我が家ぞと、樂々と脚を踏み伸ばして寝る處を定めておかぬと、精神まで休息することができぬ。

それにつけても思ひ起すのは、若い時から今まで、通つて來た過去の生活である。私にとつては其等の過去の生活は悉く甘い、懐しい追憶であるよりも苦々しく忌はしき記憶に過ぎない。しかし、苦々しく忌はしき過去の生活の中にも、心の置き方によつては、全く、懐しみのないことばかりもないやうである。

彼れこれ二十幾年の長い歲月の間に、轉々として、あちらに往き、こちらに來たりして住居を移して來た、其等の場所を、今日から振顧つて思ひ起して見ると、なか／＼に懐しい思ひ出での種が残されてゐるのである。

今から二十年前といへば丁度日露戦争が行はれてゐる時分であつた。明治三十七年の五月か六月の頃であつたと思ふ。君はその時小石川の小日向臺町に住んでゐた。小日向臺町は住宅地として土地は高燥、閑靜で上品な一廓を成してゐる處であるが、その前の年の三月からもう其邊に住んでゐたことは、何日か「小石川の家」といふ追憶の文章に書いたことがある。小日向臺町の、やゝ奥まつた處から、これから夏が始まらうとする時分になつて、大日阪の上の、ある新築の家屋を借りて住んだ。部屋數は八、六、三半、四半に家の割合に、臺所の板の間も廣く、それに一坪



の湯殿も附いて居り、便所も上と下に二ヶ所にあつて、八疊の座敷の前には十坪ばかりの庭もあつた。玄關から門のまはりに、どこか權式のある好い家であつたが、二十年も前のことであるから、家賃はわづかに拾四圓五拾錢であつた。家主は前から一寸知つてゐる家で、その邊に莫大な邸宅地を所持してゐる某大會社の海外のある支店長の家であつた。家の前はすぐ久世山の高臺でそこから秩父連山の夕陽を望むことも出来れば富士の姿を見ることができた、牛込の高臺はすぐ江戸川の低地の向うに初夏の緑に埋まつて見渡された。私はその頃、郷里から半歳ばかり上京してゐた母とともに十六七の小婢を使つて住んでゐた。どうかして、その拾五圓にも足らぬ家賃の家に、將來もし自分の家を建てゝ住むことが出来るまでは、何處へもゆかず、そこに落着いてゐたいといふ本願で居つたが、生計上の事情はその拾四圓五十錢の家にさへ、わづかに五六ヶ月しか住むことが出来なかつた。そして、まるで没落してゆく者のやうな寂しい心理状態で、その久世山の高臺を向うに下りた、すぐ音羽の谷の裏屋に引越していつた。

その小日向の家に居ると夏の間、すぐ大日阪の下の縁日の夜毎に草花を買つて來ては植ゑ、そして庭の中に一つの花壇を造つた。桔梗、白萩、芙蓉などがあつた。殊に白萩は最もよく成長して、はじめ一尺あまりの三本の莖のものを買つて植ゑたのが、一と夏の間人の背よりも高く

伸び、一坪ばかりの地を占領して、月の美しい夜には、まるで薄雪の降つてゐるかと思まがふばかりに満枝の花をつけてゐた。紅芙蓉は宵に少しばかりの朱唇をのぞけてゐると思つてゐるとて翌朝早く起きいで、庭に下り立つた母が、いつまでも長寝してゐる私を雨戸の外から呼び覺まして、

「これ早う目を覺まして起きて見なさい、芙蓉が咲いてゐるがな。」  
と、ことごとくしくいふのであつた。

芙蓉が咲いたといふ一言に、私は深く寢床を離れて雨戸を押し開けると、なるほど滿庭夏草の緑の中にたゞ一つ芙蓉の紅が高貴なる美人の如く大輪を開いてゐるのが、夜露を吹いた曉氣の中に鮮かに浮き出でゐる。

その白萩の雪を愛で、芙蓉の紅を樂み眺めた効もなく、十月の初、母を郷里に送り返へした後一と月ばかりして、私は遂にそこを仕舞つて久世山の下の音羽の谷の裏家に逼塞しなければならなかつた。

借家ではあつたが、いつまでも其處に住んでゐたと思つてゐたその家にも愛着があつた。白萩と芙蓉と桔梗の花壇にも盡きぬ名残りがあつた。私は時々音羽の谷の裏家から散歩に出たついで



に久世山の上にあがつて、先に居つたその家の方を見て、庭の白萩や芙蓉はどうなつてゐるであらうかと思ひ詫びたことがあつた。私の生活はその頃最も艱難を極めてゐた。

音羽の谷の裏家といふのは、目白の新坂を下りて來たすぐ右側の處に在つた。音羽の裏通りを護國寺の方から落ちて來る大きな泥溝があつた。その泥溝に沿ふて愼せき裏家が建つてゐる、その一つであつた。そこには少し前から、その年の春まで、去年から一年ばかり自分と一緒にゐた女が彼女の母親と一緒にゐた。私は拾四圓五拾錢の家に住んでゐることが出來なくなつて、つまり、其處へ轉げ込んだわけなのである。閑靜な高臺に居つたあと、雜司ヶ谷や目白の方の百姓が肥車を挽いて通る大きな阪の眞下の家に落ちて來た夜はじめて寝てみると、すぐ、寝間の壁の外は往來になつてゐるので、重い荷物を積んだ車の轟く音が枕に響いて、落々安眠することが出來なかつた。朝は五時六時頃から眼が覺めがちであつた。燥いだ風の立つ日には阪の上から眞正面に砂塵が家中に吹込んで來た。六疊の座敷に少しばかりの縁があつて、右手に鍵なりに便所が附いてゐて、猫の額ほどの庭を目隠しの板塀で仕切り、その外はすぐ大泥溝になつて、便所の外は目白の新大阪であつた。それでも六疊の脇に三疊の間があつて、それに押入れもあり、表の、裏通りの道路に面した方に出格子が附いてゐた。私はそこへ机を置いた。そして六疊の次には入

口の土間から取付きに三疊の座敷があつて、その障子の外が臺所の板の間で、流しの外は、やゝ広い空地が大泥溝に臨んで残されてあつた。

そこへ逼塞して來たのは十一月の初でもあつたらうか。愼せき裏家住居の、わづかに膝を容るゝに足るだけの陋屋であつたが、それでも私は、やつぱり一年餘同棲した女の煮たきした物によつて、不如意の生活の中にもその日／＼の露命を繋いでゐることが出來た。今の生活が極度に惨めなものであるにつけて、折につけて振願られるのは去年の今頃のことであつた。その時分はまだ、いさゝかの定收人があつて、生活の方法が立つてゐた。そしてすぐ鼠阪の上の小さい家に落着いてゐた。その小日向の高臺から私は晩秋秋冬の日に護國寺から雜司ヶ谷の方の森を望んで、日々に霜が帯びて色づいてゆく雜木林の美を愛でゝゐたものであつた。そして、好く訝へたる青空の下に自然の美しい色相をちつと見入つてゐると、何といふことなく、強い希望が胸に湧いて來るのを覺えた。私の行く手には山のやうな楽しい希望があるやうに思はれた。然るに今は、去年の今時分とは全く境地を異にして來た。居は志を移すといふ諺のとほり、嘗て雲の如く湧いてゐた希望は、すっかり打碎かれてしまつた。私はこれから先きどういふやうにして生きてゆかうかといふ、極めて現實的の困難に面接して來た。その年の二月から日露戦争が開始されて、世間



の人心は極度の緊張をして、日本の國家は今や興廢存亡の危期に立つてゐるのである。とても暢氣な文學などに悠々耽つてゐられる時ではない。それでも雑誌などは平時とちがはず發行されてゐたが、文筆の仕事といつては、とても、それから二十年の今日とは比較にならぬほどの、寥々として寂しいものであつた。私は僅かにある書肆の辭書の原稿を書いたりして糊口してゐた。

そのうち秋も漸く開けて折柄の時雨に寒さはいよ／＼冬季に入つて來た。人は追々戶外の寒さを厭ふて室内に閉ぢこもるやうになるにつれて、私の心も諦めと／＼もに、いつとなくそんな裏家の陋居に落着いてゐられるやうになつた。何か書いても、それを錢に換へることが出來ないので書くことの望みは暫く斷絶しなければならなかつた。そして、それまでに随分所持してゐた古本——といつても新出版物ばかりであるが——を賣つて、それで四圓五拾錢の家賃を拂つたり、米代にしたりしてゐた。その家は先の家より拾圓家賃が安かつた。

やがて正月が來た。けれども少しも正月らしい楽しみはなかつた。人間といふものは、諦めやうによつては、どんな處に窮迫してゐても、そこには又箇中の生活の安心があるものだといふことをも、私はその時思つた、これから先き長い一生こんな處に侘びて居なければならぬのだと運命がきまつてしまへば、譯なく諦めてもゐられなかつたが、何となしに、自分はまさか、このま

ゝに窮迫の中に死んでしまふものとも思へなかつた。將來、大した榮達立身といふほどのことはなくとも、今のやうに、朝夕にも事を缺ぐやうな惨めな生活をして一生を終るものとは考へられなかつた。

毎日々々戦争の號外賣りの呼び聲によつて、わづかにだれ切つた生活興味を引き立てられて目を立てゝゐたのが、その頃であつた。乃木軍の包圍してゐる旅順港が、今にも陥落しさうで、惡戦苦闘してゐるのが丁度前年の暮から翌年の一月にかけてであつたが、一月の中ばになつて漸く旅順が陥入つたといふ號外を見た。しかし私自身には旅順港の陥落よりも自分の生涯の問題の方が重大であつた。私は戦争の捷報によつて自分の心を浮き立たすことが出來なかつた。國家の悦びを自己の悦びとして悦ぶことの出來ない、今の場合の自分の不如意なる境遇をいひ効なく思つたがそれをどうすることも出來なかつた。

音羽の谷の大泥溝に沿ふた裏家に逼塞して微かな露命を繋いでゐると、自然氣が鬱血してくるので私は時々用もないのに、そこらを歩いて見るのであるが、偶に久世山の上に登つて見ると、山の上は一目荒寥とした冬枯れである。何方を向いて見ても陰雲低く垂れて雪を鎖してゐる。私は聲を揚げて叫んで見る勇氣もなくして又山を下りて來る。



一月も過ぎ二月になり、寒さの時分のことゝて、朝はいつまでも寢床を離れかねつゝ快い心地に眠つてゐると、朝まだ暗いうちから、納豆賣りの呼び聲が霜に冴えて裏町の通りを遠くから響いて來た。その呼ぶ聲は女であつた。そんな陋巷に窮迫してゐても、馴れては萬事がさまで苦にもならず、殊にその嚴冬二三ヶ月の間は妙な心の落着きを覺えて過すことが出來たが、毎朝の習慣になつて、六時頃に寢床の中で聞くその納豆賣りの呼び聲が待たれるやうな氣持ちでゐた。遠くの方からある調子を帯びた聲で初は微かにかすかに聞えてくる。それが一と聲ごとに段々吾々の家の方に近づいて來て、やがて、又一聲ごとに遠くへ幽かに消えてゆく。

「なつと、納豆う、うを……」

と、聲尻を少しくしやくるやうに呼んでゆく。それが朝霜に凍て付いた裏町の小路に笈を返へす如く高く響いてゆくのである。一緒にゐる女は、

「あの人よく稼ぐ人ですなあ、」

と、心から感心してゐるやうにいつた。

「うむ、よく稼ぐなあ。いゝ聲ぢやないか、」

「内ぢや買はないから分らないが、あの聲を聞くと何だかひどく若さうですが、此の間一寸見た

時には、もういゝ加減な年取つた人のやうでした。子供を背に結付けてゐますよ。」

「さうかねえ」と私はいつてゐたが、自分達は毎朝好きな時分まで暖々と寢床に潜つてゐられるのに、あのとほり朝凍ての中から大きな聲で納豆を賣つて歩いて生活の資を得てゐる女のことと思ひ比べると、まだ自分どもの境遇の方が大名の暮しであつた。

その納豆賣りの呼び聲を、夢うつゝの間に聞きながら快い朝寢を食つてゐる冬ごもりの間私には貧乏がさまで苦にならなくなつた。私には差當つて何かしようといふ意思はなくなつた。そのうち冬が過ぎて、三月も末になり、櫻が咲きそめる頃になると、どうしたのか、その威勢のいゝ納豆賣りの聲が裏町に聞えなくなつた。自分も陽氣が好くなつたので、寢床を離れることも、怠儀ではなくなつた。

暖くなるとゝもに筆を持つことも臆却でなくなり、その頃ある友達のしてゐたある編纂ものゝ手傳ひをして、わづかに生活の糧を得てゐた。やがて春も過ぎ夏になつた。狭い家で蚊いぶしをしたり、臺所の流し板の上で行水をつかつたりしながら、暑苦しい一と夏を不如意のうちにも、何とか斯とかしてその日その日を無事に送つてゐた。その頃のことを思ふと、味氣ないながらも、何となく思ひでの種である。



蚊いぶしの煙が家中に立ち迷ふ惚せき六疊に色の褪めた蚊帳を吊つて暑い夏の夜々を過したことも今からもう十八年の昔しとなつたことを思ふと、不如意に啣ちてゐたその時分の果敢ない露命を繋いだ生活の悩みよりも、却つて懐しい追憶ばかりが残つてゐるやうである。女の母親は一生不幸な人であつた。三十五六で盗賊のために夫が不慮の横死を遂げ、あとに四人の子供を残された。彼女はその四人の孤兒を抱へて一時途法に暮れてゐた。それから今まで三十年の間長男が出来そくなひであつたりしたために、いつも不如意ばかりの境遇を経て年を老いて来た。彼女の生國は能登であつたが、田舎は困らない家であつた。しかし今は従兄弟の一家が存在してゐるばかりであつた。私は、彼女の通つて来た生涯を思つてみるたびに、人間は何のために此の世に生まれ来てたかといふことを、毎時も思はせられたのであつた。彼女はまだやつと十三四の時分に叔父の養女に貰はれて江戸に連れて来られた。叔父は牛込の、江戸時代から榮へたある古い町で商賣を営んでゐた。彼女は、九尺二間の裏長屋に住むまで零落しても、先祖の時分から傳はつてゐる大きな佛壇ばかりは手離すことを欲しなかつた。そしてお盆になると、いつも不如意の中から懇ろに草や團子を供物にして亡き靈を祭つた。私は惚せき蚊遣りの煙の立ち迷ふ中に佛壇の前に坐つて念佛を唱へてゐるその老婆の姿を見ることに、昔の人の古句にある、「味氣なや蚊帳の裾

踏む魂まつり」といふ情景を思ひ起すのが常であつた。その後その女とも別れ、老婆はそれから何年か後に死んだといふことを聞いた。……  
毎日の炎天つゞきに長い阪の上から吹き下して来る砂ほこりを、まともに六疊座敷の椽側に浴びるので、家の中はいつも透して見ると、こまかい塵埃が立つてゐた。暑さは暑し、私は毎日のやうに、もつと高臺の閑靜な處に引越したいといつてゐた。そのうち八月の中ごろであつた阪上の高田老松町に一軒庭の廣い周圍に樹木の多い家が空いてゐるのを見付けて、そこへ引越すことにした。そこは玄關などもよく出来てゐて、二疊に三疊に八疊と六疊の、好い家であつたが、座敷の方の庭は可なり荒廢してゐた。生垣の外の隣家の庭ではあつたが、すぐ庭先の眞上のところに見上げるやうな高い銀杏の老木が聳り立つてゐた。ほかに檜や樺なども立つてゐたやうである。

その家を借りて移轉することに定まると私は女と二人で箒やバケツや雑巾などを持つて掃除にいつた。一昨年の春女と一緒に家をもつやうになつて、何度も引越しをしたことがあるので、空家の掃除をするのもういゝ加減うんざりしてゐるのであつたが、今居る所ではとても辛抱が出来ぬと私がいひ張るので、そこへ引越すことにしたのであつた。私にしても又、さう思ふのも無理



はなかつた。音羽の谷底の裏家の大泥溝の端の家に窮迫してゐるといふことは、どうしても我慢の出来ることではなかつた。

「今に秋が来て、時候が好くなつたらば……」といふことに、来る年も来る年も望みをかけて年を経て来た。私もその頃は、まだやつとはじめて三十になつたばかりの歳であつたから、まだ好い夢を見てゐる時のやうな楽しい空想が前途にあつた。

三十八年八月の末にその家に引越した。暫く人の住んでゐなかつた家と思はれて、襖や畳なども貸家に造つたものではなかつたが、何となく空家らしい微くさい臭いがしてゐた。その時分はまだ山の手の住宅などには何處にも電燈をあまり用ゐてゐなかつたので、ラムプであつた。水も井戸であつた。高臺の堀井は釣瓶繩を十何尋も手繰らなければならなかつた。私は荒れて伸びるにまかせた庭木を暇にまかせて自分で刈込んだりした。

まだ残暑も酷しかつたが、青い植込の木の葉を洩れて射込む日光が座敷の畳に薄緑の蔭をつくつてゐるのが夏の暑さに焦立つた氣分を落着かせた。間もなく月が變つて九月になると、それは、忘れもせぬ六日の朝であつた。毎朝葉みにしてゐる新聞が朝起きて見ると投込んでゐないので、午前へまで、どうしたのだらう？」と訝りつゝ待つてゐると、やつと一時過ぎになつて、何かの新

聞配達がいつもと異つて閑氣さうな様子をして「どうも遅くなつて済みません。」とぶつて、ふらり持つて来た。

「どうして今日はさう遅いんだ？」と訊くと、

「昨日の晩から、日比谷は大變な騒ぎです。今度の講和談判が氣に入らぬといつて、方々の交番の焼打ちがあつたり、大臣の官邸の打ち壊しをやつたり大變です。」おとなしい新聞配達は法被姿でそんなことを話してきかせた。

「ふう、それは大變だなあ。君はその焼打ちを見たのか。」と訊くと、見た。そして今晩は東京中の交番や警察署を焼拂ふといふ話が専ら傳はつてゐるといふやうな不穩な風説を語つて聞かせた。

「それは大變なことになつたものだなあ。」と、私は暫く黙想してゐたが、その頃はまだ自分もやつと三十になつたばかりであつたから無論元氣であつた。そして午後から、残暑のきびしく照り付けてゐる日比谷公園まで出掛けていつて見た。今から十八年も前の日比谷あたりは、まだ今日のやうに、人がさう雑沓しなかつた。それでもその日は可なり多勢の群衆がそつちこつちに集まつてゐて、公園の芝生や木蔭には疲れたやうな草鞋ばきの労働者のやうな者や、生活に難れたや



うなへこ帯着流しのあふれ者などが不平に輝く眼付をして今に何か爲出しさうに塊まつてゐた。すぐ公園外の内務大臣の官邸の前は騎馬巡查の垣をつくつて警戒した。

即日東京市には戒嚴令が布かれて、軍隊の出動となつた。晝間日比谷の方から一旦引返へして戻つてその晩又涼みかた／＼目白臺を下りて牛込の方に往つてみると、通寺町から神樂坂の通りは兩側の各戸はいづれも電燈を消して戸を閉め眞暗な街筋には、たゞ野次馬の群衆が時々鯨波を揚げてうをう／＼と寄せては返へしてゐる。私もその中に交つて前へ／＼と群衆の中を進んで神樂坂の方へ下りてゆくと、前へゆくと、街は暗になつて野次馬は皆な兩側の戸を閉めた商店の軒下にくつ付いたり、物蔭に密みひそみ一歩々々前進してゐる。私もそれに倣つて軒下の物蔭に身を忍ばせつゝ坂を下りていつた。そして外堀の電車通りまで出てみると、牛込警察署の前には兵隊が劍尖の附いた銃を組んで三脚に立て人垣をつくつてゐる。時々群衆の背後の方から警察の窓ガラスを目當て、礫を投げ付けるものがあると、劍尖銃を脇に抱へた兵隊が、ぬつと、それを前に突立して一つ脅かす。すると此方に又ずらりと人垣を造つてそれを見てゐる群衆は、らつと一人が聲を出して逃げ出すやうになると、他の群衆もわあつと雪崩れを成して浮足になる。群衆は兵隊に向つて何をしようともしない。日露戦争は、軍人の難有さと尊さが絶頂に認められた時

であつた。ポオツマウスのウイツテ小村の平和條約に不満を抱いた國民も軍人に對しては少しの反感を持たなかつたばかりか、日比谷の焼討ち騒ぎを始めた群衆心理には折角の戦勝を外交の失敗のために無駄にしてしまつたといふ不満の勃發があつた。軍人の勞苦に對しては非常に同情を抱いてゐたのである。軍人の威力をあれほどに國民が認めた時代は後にも前にも嘗てないことであつたかも知れぬ。

多勢の野次馬は、兵隊の横列の前に、ずらりとこれも横列を作つたまゝ、手を束ねて、今にも何か始まりさうな物凄いな光景を見詰めてゐるばかりであつた。時々暗中に牛込警察署の硝子窓に向つて遠くから礫を投げ付けるものがあると思はれて、がら／＼んとガラスの壊れる音がするが横列を作つたカーキ色の兵隊は靜かなること林の如くである。軍隊の威力は十分に群衆の心を支配してゐるのであつた。

私はいつまでもそんな危険な場處に長居をしてゐるのは無益と思つたので、又もとのとほりに軒下を傳ひながら暗い街筋を人込の中を縫ふやうにして引返へして來た。そして牛込から小石川の音羽の方に歸つて來て、目白坂を上つてくると、そこから牛込の方の高臺が暗夜の中に一帯に見渡された。晝間はそこから小石川の砲兵工廠の煙突の彼方に遠く日本銀行の建物までも見渡さ



れるほどの廣濶な眺望であつたが、その時丁度方々で又昨夜のとほりの焼討ちが始まつたと思はれて、見渡す限りの暗夜の夜空の下に、あちらにもこちらにも火の手が揚つた。西の方の四谷から新宿と思はれるあたりにも真紅な火の手が見えてゐるかと思ふと、小石川の安堂寺坂の向うの方にも火の手が夜の空を焦がしてゐるのが二た處三處見えてゐる。本郷か外神田か、或は下谷の方かとも思はれる。

私は、何だか齒たゞきするやうな、ある物凄さを身に感じながら、無事に家に急いだ。

そのうち軍隊の警戒の手がよく行き届いたゞめに三日目からはもう焼討ちはなかつた。しかしそれから暫くの間世間はまるで火の消えたやうな不景氣が続いた。そのうち残暑も次第に薄らいで九月も末になり、秋冷が加はるにつれて、四邊の寂しさは一層ひどくなつた。その頃から自分の借りて住んでゐる家の時々、差配をしてゐる男が案内をして見に来る者があつた。どうもその家が賣物になつてゐるらしい。私は、さうとは知らず、とんでもない家を借りて來たものであると思つて不安の念を催してゐた。馬鹿々々しい、いざり三百といふ譬にもいふとほり、引越しの手數ぐらゐ厭なものはない。果して賣り物に出して置きながら、一時空けておくのもつまらなうと思つて貸したといふやうなことであるなら家賃なんぞ拂つてやらないと思つてゐると、十月

の末になつて、その家は遂に賣約が調つて家を空けなければならぬことになつた。自分は、ある日その事を話しに來た差配の男と高い聲でいひ合をした湯匂一ヶ月の家賃だけは拂はぬことにした。

その頃、丁度仕事の都合などもあつて、自分もそこにゐるよりは牛込の方にいつた方が、いろ／＼便宜なこともあつたので、牛込の喜久井町に友人の居る家が空くのでそこへ移ることにした。日本開闢以來の國運を隆めた戦勝のあつたにもかゝらず、その秋は焼討ちがあつたりして、人氣はひどく沈み勝ちであつた。目白臺の森に蕭殺たる秋風が吹いて、庭の眞上に聳え立つた樺や銀杏の大木が日に日に凄じい音を立て、揺れてゐた。その頃はまだ其邊に住宅なども多く建て込んでゐなかつた。銀杏の下の生垣の外に百姓の藁屋が木の葉隠れに這ひ伏つてゐた。西北から吹いて來る風が、大きな魔物が呼吸をするやうに、神経的にどつと吹きあてると、銀杏の實が磔のやうに、ばたりばたりと高い音を立て、天から雨の如く落ちて來た。私は連日消え入るやうな寂しい風の音を聽いて尙ほ暫く其家にゐた。自分はまだ三十の聲をきいてゐるのであるが、成業のことを思ふと前途は實に遠慮で、生活の不安と艱難も從つて甚しい。蕭殺たる秋風は腸を斷つ如き凄じい音を立て、毎日々々庭前の巨樹に吹き荒れてゐた。



十一月の終に牛込の喜久井町の家に移していつた。私も女も女の老母も皆な、もう引越しに疲れてゐた。いつになつたら生涯の落着き場が定まるのであらうかと思はれた。

喜久井町の家は、昔しある大名の鴨場があつたといふ古い池の跡の水の涸枯した窪地の縁に臨んだ處にあつた。池の跡には、その頃から振返つて十年ばかり前まではまだ稻を作つてゐたのを私は學生時代に覚えてゐる。それがいつの間にかもう稻は作らなくなり、四圍の雑木林も悉く採伐され開墾されて人家が建つた。それでも、まだその邊は一面の原つばで、藪があつたり、こんもりした小山のやうな處には芝生が続いてゐた。私の住んだ家は北を向いた廻り縁が附いてゐて六疊二室、玄關が二疊、茶の間が四疊半の家であつたが、北を向いてゐるのがいけなかつたほかには、自分のその頃の不如意な生活状態などから考へて、どうか斯うか我慢出来ないこともなかつた。目白臺の家に比べると遙に劣つてゐたが、それでも音羽の溪に逼塞してゐた時に比べるとまだいくらか此の方が家らしかつた。もう随分住み荒した家でこの家が新築されてから、何代の住み手が變つたか知れなかつた。北向きの座敷から小石川の久世山の原が丁度水平に早稲田の低地を越して見透された。あの原の傍に一昨年夏は住んでゐたのだと、そちらが眼に入るたびによく思つた。

目白からそこに移つて來た時分から氣候は急に冬季に入つて、寒い雨の日が屢々つゞいた。亡くなつた島村抱月氏が四年間の歐羅巴留學から歸つて來たのは、丁度日比谷に燃討ちのあつた數日の後で、抱月氏が歸つて來るとすぐ「早稲田文學」を再刊するといふ話があるが、その歸朝以前から持ち上つてゐた。いよくそれを實現することになり、私はその編輯員の一人に加はることになつたのであつた。その當時の裏面の消息について精しく書くと、随分皮肉な事實があるのだがそれは、抱月氏も既に故人になり、「早稲田文學」も今日の如く萎微として振はない状態にあるのだから、それを書いたところで格別刺戟的の興味もない。但し、それは抱月氏の爲に不可なる事ではないのである。

私が目白の方から牛込の喜久井町へ引越して來たのも、その仕事の便宜を思つたからでもあつた。

そこに私の來る時まで居た學校で同級の人間はある編纂物をしながら、まだ獨身でそこにゐたのであるが、彼が飼つてゐた猫が子を生んだので、その中の一つの雄の兒をもらつて目白の家で飼つてゐた。そいつは元氣で面白い奴であつたが私によく馴染んでゐた。私は毎夜寝る時夜着の袖の中に入れて寝てやると、夜半になつて彼はいつの間にか私の脚の方にいつて、ころ／＼寝て



ゐる。そいつが邪魔になるので、脚で寢床の裾の方に押しやると、猫はまるで静物のやうに自由に裾の方に押されていく。翌朝彼は早くから眼を覺まして、臺所の方にいつて、一としきり散々浮戯けてゐるが、それにも飽きると、まだ、起き出して來ない彼の主人の寢床の傍に又やつて來て、早く起きるといふつもりか、私の寢てゐる蒲團の襟の上に乗つて、小さい聲で何かいひながら、すつかり爪を包んだ柔かい手先で私の顔を撫でるのである。私はそれから、やがて眼を覺まして起き上がると彼は嬉々として私の帯の端にじやれ付いたり、着物の裾に飛び上がるのである。私は殆ど小猫をいゝ對手にして戯れてゐた。

すると一日、冷い雨の降る日であつた。私が用事で外出しようとする時、彼はいつものとほり門の外まで啼きながら追掛けて出て來た。彼はいつも私の後を追ふて門の外まで出て來た。そして私が門外の阪道を下りて古い池の跡の窪地の中を渡り、對岸の土手に上つて、家の方を振願つて見るまで彼は生垣の下門外の芝土手の處にしがんで泣いてゐるのである。私は遠くまで自分の後を追ふて、もし歸り道を迷ふことがあつてはならぬと思つて、いつも門の外ですぐ家の方に追ひ返へすやうにしてゐた。その日は冷い雨が降つてゐたため、すぐに家の内へ引返すであらうと思つて、門外の芝生の處まで追掛けたのを、「しいつく」と追つておいて往つた。

すると、その晩になつても猫の兒は家の中に姿を見せなかつた。もし姿を見せないことがあつても長くつて三時間か四時間もすると何處からか、ひよつくり出て來る。大抵押入れの中の蒲團の間に圓くなつて寢てゐるのが常であつた。が、その冷い雨の降る夜は夕方になつて、五時間六時間と過ぎて、も終に姿を見せなかつた。そして夜に入つても遂に泣く聲さへ聴かなかつた。それきりたうとう彼は私の家に居なくなつてしまつた。猫捕りに取られたか、人に拾はれたか、永久に歸らなかつた。

その年はあと一と月ばかりにして暮れてしまひ、翌年の明治三十九年は一ヶ年そこに居つて「早稲田文學」の仕事に従事してゐたが、わづかに二拾圓の月給では、いくら物價の安い時分でも生活は困難を極めてゐた。そして、その又翌年の四十年の五月までその家にゐた。「早稲田文學」の方は四十年の一月まで、退いてしまつた。島村抱月氏との深い縁の切れたのもその時からであつた。そして、五月から又同じ牛込の赤城元町の方に引越して來た。赤城元町に二年近くゐてもとの目白の方に移つたり、先の喜久井町に戻つたりしてゐた。

久世山の傍の家は、家主が地所を賣つたので、その家は數年前取拂つてその跡に大きな西洋館が出來てゐるやうである。音羽の裏家は今でもまだ砂塵の中に埋もれて存在してゐる。目白の家



は二つとも取拂はれて、その邊の様子がすっかり變つてしまひ、一番古かつた喜久井町の家のみは、今でも尙ほ先のまゝで人が住んでゐるのを數年前に偶然そこを通り合はして、見たことがあつた。(をばり)六月八日

返らぬ日



霜枯れの空はよく晴れて、風もない静かな午後、十坪ばかりの中庭の片隅に植へられた紅葉や銀杏は雑木して、わびしさうに立つてゐる。石燈籠の蔭に茂つた暗緑色の八つ手ばかりが冬の寒さにも凋れず臆面もなく不恰好な姿をしてゐるかのやうに思はれる。つい先刻臺所のあと形付けをして此處に来てやう／＼座つたばかりと思つてゐたのに、もう、少しく西に傾きかけた陽影がその八つ手の大きな葉に明るくさしかけてゐた。今は店の方の人も皆な外に出てしまつて、大きな四階づくりの建て物の中には誰れもゐなかつた。家の前はすぐ河岸に沿ふた道を電車が間断なく通つてゐるので、それが絶えず騒々しい響を上げてゐるが、それも聞き馴れてゐるので、彼女の耳には聞いてゐるのか、ゐないのか分らないくらゐであつた。

おたみは裁板の前に坐つて、もう此の間から用事の合間々々に手を付けてゐた自分の不願羽織の仕立て替えをやつと八分どほり縫ひ上げたところであつたが、四邊が妙に静かなので、中庭を仕切つた煉瓦塀を一つ隔てたばかりの隣の藝者屋の二階から聞えてくる稽古の三味の音じめに聞くともなく聞きとれながら、折々針を運ぶ手を止めて、うつとりとなつてゐた。それは清元の落人を弾いてゐるのであつたが、文句よりも、そのたど／＼しい音色と未だ咽喉の定らぬ十五六の子供が精一ばいに張り揚げて唄ふ聲のあと氣なさが何となく彼女の胸をそゝるのであつた。お



たみは先刻からそれが耳について、自分の居間に來て坐はるまでも時々縁側に立つてそつちへ耳を傾けてゐたのである。彼女はそんな幼い三味線の稽古ぶりを聞くにつけて自分がまだあの聲の子供と年もあまり違はぬ時分、遠い西の方の國の、その頃藝者屋であつた養母の叔母の家にゐて稽古に通つてゐた時分のこと、まさしくと思ひ浮べられるのであつた。そこでその時教へられたお師匠さんの顔までがふいとそこに見えるやうな氣がした。

その時店の事務室の方で、チリチリンと喧しく電話の鳴る音がしたので、彼女ははつと我に返つた。丁度誰もゐないので、おたみは縁側づたひに急いで電話の音のする事務室に入つていつて受話機を耳に付けたが、不在の事をいつて向うの話を聞くだけ聴いてそのまま電話を切つた。そして、ふつと「今日こそあの電話をかけてみようか知ら。」と思つて、ひとりで首を傾けてみたが直ぐ又思ひ返へした。

「いくら學校の先生だつて、名も知らない人をたづねるのだから六ヶしい。第一電話の掛けやうがない。」と、自分で自分の思つたことを批判してみながら、事務室を出て又もとの自分の居間に戻つてきた。

おたみはこんな事をもう二年も前から毎日のやうに思ひ惱んでゐるのであつた。あの、惡毒氣

ない清元の稽古の三味の音を聞くにつけても過ぎ去つた遠い昔のことが丁度泉の湧き出るやうに胸にじつとく浮き上つてくる。自分があんな稽古をしてゐた頃からまだ間のない時分であつた。ある人に是非にと所望されて伴れて行かれ、そこで身持ちの體になつて、初めてお産をしたのが自分がまだやつと十七になつたばかりの、忘れもせぬ正月であつた。その時の前後のことを思ひ出せばおもひ出すほど涙の種である。それから、四十一の今日までお産といふことは、それつきりしなかつた。あとにもさきにも、たつた一人しか持たない女の兒は、産み落すとまだ五日も経たないうちに人手に取り去られて、そのまま音信不通になり何處へどう連れてゆかれたか分らなかつた。そして二十幾年も経た二年前にやうやく母子めぐり逢ふことが出来たのであるが、その時驚いてゐた娘の居所を、自分の生活の爲めに心を奪はれてゐて、常にそのことが念頭にありながら、つい忘れともなく忘れてしまつた。一度逢つた後に手紙を寄越して、東京には自分の連合ひの縁家の者がある處の學校の先生をしてゐる、自分も東京に出て往つてお母様に又會ひたいといふやうなことを書いてゐたが、その手紙も事にまぎれて、失くしてしまつた。おたみは、折角二十幾年ぶりで初めてめぐり逢つた實の娘の居處をさへ忘れたといふことが、今から思つてみると、自分ながらありさうにないことのやうに思へるのであるが、その二年前まで十年ほど同様



してゐた夫と離れたいと思ひながら暮しに苦勞をしてゐたことをおもへば、ありさうにない事でもそれが事實であつた。それで娘の手紙の中に縁家の者が東京のある學校に先生をしてゐるといふことゝその學校の名ばかりは不思議に記憶してゐるので、その學校へ電話を掛けてみようかと幾度も思案をし直すのであつた。

おたみは自分で、暇さへあればさう思ふのであつた。廣い世間には薄運な者も數多いけれど、自分もその數多い薄運な女の一人である。子供はさうして産みながらも生き別れになつてしまつた。夫はその子の父親の姓かに三人まで持つたが、二度めの夫は十年も一緒にゐて死なれてしまつた。父親はまだやう／＼物心が付くかつかぬに死んでしまひ、母親も丁度自分がその子を産んで間もなく亡くなつたし、たつた一人の異腹の兄もその後死んでしまつた。兄は母親は異つてゐたが今から思ひ出してみても優しい人で、自分を心から可愛がつてくれたのであつた。そして最後に二年前まで連れ添ふた自分より二十七も年が上であつた夫は、これも生き別れであつたが、遠い四國の方のその故郷に歸つてから、つい去年の夏死んだといふことを風のたよりに聞いた。おたみは二十四五年の間産みの子のことを思つてみる暇のないこともなかつたが、いつも自分の生活から男といふ者を除くことの出来ない氣持ちで經て來たので、どうかすると子供のことが男

といふものよりも強い力を以つて胸に迫つて來ない場合があつた。最後の夫と別れたのは彼女が三十九の時であつた。普通ならばまだ配偶のあつて不思議でない年配でありながらそんな事情にある彼女は、今は夫のないといふ不足よりも昔産んだ子供の方に自分の心が強い力を以つて惹かれてゆくのが、これまで自分にもついで覺えなかつた、殆ど不可抗の事のやうに思はれるのであつた。

長い間別れたいと思ひつゞけてゐた夫と、望みが叶つて別れた當座は、それでもまだ、さすがにその別れた夫の年老いたゆく先きの事などが思ひ起されて、氣の毒なことをしたといふやうなことが考へられたりしたが、一と月たち二た月立ちするうちにそんなことは次第に薄らいで來て獨身の彼女の寂しい胸をひたと襲ふてくるのはたゞ産みの娘のことであつた。四十は過ぎても、子供といつてはそんな譯で持たないも同じやうな境遇を經てきたせいもあつて、まだ何處となく姥櫻の色香の残つてゐるおたみにも、女はいつまでになつても棄たりはないと思はれて、再縁しないか、後添ひに來てほしいといふところも方々からあつた。その中には彼女の心を動かすやうな話のないこともなかつた。一番しまいに別れた夫も、男を持つのがいやで別れたのでなく、自分とは不釣合に年がながつた夫を持つてゐるのは未始終の手足まとひになるからであつて、まだ三



十に一二年も間のある時分から自分の身のことを考へ、曳擦ら、てゆくやうな氣持ちで十年の月日を仇に過してしまつたことを思へば、どんなに悔んでも取り返へしが付かなかつた。まだ今のうちに獨りになれば何うかなと思ひながら四十の年に手がとゞいてしまつた。そして身輕な獨りになつて今の家へ家政婦のやうな約束で奉公に住込んでから今日までまる二年の月日が同じやうに過ぎて來たのであるが、一年のうち大抵は支配人を頭に六七人の店員があるだけで、南満の方に本店を持つてゐる主人は年に二度か三度東京に戻つてくるだけで、おたみはまるで自分が所帯持ち同然のやうで、奉公がそれほどこいやとも思はなかつたけれど、さてさうして氣樂なひとりになつてみれば毎日々々判で捺したやうな單調な生活を繰返へすのが怠屈でならなかつた。

自分は、まだ夫が欲しいのぢやあるまいかと思つてみるものがあつた。それは欲しくないこともない。けれども今まで三度も持つた夫にいつも不幸であつたことをおもへば、今更この年をして又氣心の知ぬぬ夫に待つて心を使はねばならぬうへに、束縛を受けるのが厭であつた。折角世話をしようといつて口をきいてくれる人は、おたみの煮え切らぬのをもどかしがつて、

「こんな良い縁を斷はつてしまふのは惜しいぢやありませんか、今少しよく考へたらいゝでせう達者なうちは、獨りで氣樂なことをいつてゐらしつても、生身には病氣といふことがありますか

らな。そんな時に國へ歸つて従兄弟などに厄介者扱ひにされるより、自分で家庭をつくつてゐたら、どんなに心丈夫だか知れやしません。」といつて警告してくれるのであつた。

實際兩親も兄弟も亡くなつた彼女には今は名のみ養母の實叔母があるきりで、それとてほんとうは自分が見なければならぬのを、やつぱりその叔母には甥になる従弟が引取つて世話をしてゐるのであつた。おたみは、そんな縁談の出た時には、いつも、

「ご深切はありがたうございますけれど、わたくし今のところまだそんな氣になれませんから、先は先として、やつぱり此のまま獨りで居りたいとおもつてゐます。」といふのであつた。

折角深切に、好い縁談だとおもつて口をきいた人達は、いゝ年をして、今一時過ぎたら、もう爲様がなくなるのに、先の事がわからないんだな、と彼女の前で面と向つていふこともあるし、蔭でそんなことをいつてゐるのは、彼女自身でもそれを知つてゐたが、しかしおたみは、他人が傍から見てもゐるほど、そんな氣樂な女でもなかつた。別に財産といつて有るでもなく、どちらを向いても獨り身の彼女は、とる年とともに行く末のことが案じられて、どうかすると居ても起つてもゐられないほど心の焦せることがあるのであつた。それは氣心の合つた人とならば、もう一たび苦勞を試みたいといふ氣のないこともないではなかつた。そんな人とならば大して金など



欲しいとも思はぬ、むしろ人妻らしい家庭の人となつて夫の愛ある束縛をも甘受してゐたいから  
あのものであるが、自分の方でどんなにさう思つても、そのとほりの人はこれから先もう得られ  
さうにないので、それは彼女も諦めてゐるのであつた。

それにつけても諦められないのは、母でありながら世間はれて名乗ることの出来ない娘の交代  
のことであつた。その時のことを思へばひとりで涙が潤む。産まれてまだ、やう／＼五日か六  
日にしかならぬ赤兒の交代は、まるで鬼のやうに情けない、父方の祖母の爲めに、産褥の重い  
枕にゐる彼の女の腕から撈ぎ取るやうにして乳母の手に渡つてゆかれてしまつた。そして、その  
翌日皮肉らしく上田交代と誌した名札をそへた祝ひ物を寄越したきり、二十年の間絶えてその後  
の消息を知らなかつたのである。おたみは、それ以來産んだ子の生死について片時も心の底から  
忘れることが出来なかつた。

今から四年ばかり前彼女が三度めの夫と牛込の方でしがない暮しをしてゐる時であつた。ある  
朝目馴れない女文字の手紙を受取つた。おたみは合點ゆかぬながら、裏返へして差出人の名前を  
見ると、それには思ひがけなくも上田交代と書いてあつた。それと一と目みた彼女は、忽ち、何  
か重い力のある物にでも押し付けられたやうに、掌先がぶる／＼慄えた。そして心を鎮めるやう

にしながら、も一度よく、じいつとその名前のところを凝視めた二つの眼にはだん／＼霧がかゝ  
つて、交代の文字が幾つにも見えてきた。やゝ暫くさうしてゐるうちに封筒の文字がはふり落ちる  
涙ににじんでしまつた。彼女は、そのまゝすぐ封を切る力がなかつた。幸ひ夫が何處かへ往つた  
留守の間であつたので——尤も、そんな古いことは、折々その年の違つた夫にも話してゐたこと  
があるので、自分も三四十年前に四人の子と妻とを郷里に置き去りにして國を飛出した夫は、  
彼女の前半生に對して理解と同情とを持つて聽いてくれるのであつた。——彼女が恐い物に  
でも觸れるやうな氣持で、二三十分も経つてから、やつと心を落ち着けてから封を切つた。

中の文句は覺束ない字體で、

……この手紙をご覧になつたら、さぞお驚きなされるでせうが、交代の二字はお忘れではないと  
ぞんじます。あなたには子ひとり、私には親ひとりの仲でございます。私は貴母のご住所を知る  
ためにどんなに苦心をしたか知れませぬ。どうぞしてたつた一度なりともお目にかゝりたい、お  
國へおかへりになることがなければ此方から上京してもよいと思つて居ります。……といったや  
うな意味のことが繰返へして書いてあつた。

それを讀んだ彼女は、これが、あの産まれてやう／＼六日めに自分の腕から撈ぎ取られて去つ



てしまった赤兒の、あの眞實の文代か知らん。と、疑はれた。父方の祖母に引取られて往つた時赤兒は彼女の乳房を啣へて半ば眠つてゐた。そしておたみがそつと乳房から離すと、赤兒は眉と眉との間をくしゃくしゃして黒眼の勝つた大きな眼を見張つてゐた。その時の眼や小さな口元が十九年の長い間たつたそれよりほかに忘るすに記憶に残つてゐるものがないゆゑでもあるか、その手紙の差出しぬしと自分の思つてゐる文代とは別なものゝやうに思はれてならなかつた。けれども文代はやつぱりその文代にちがひなかつた。おたみは、翔つて往けるものならば、すぐにも飛んで往つて會ひたいと、心が逸つたけれども、以前と異ひ、その日を暮しかねてゐる境遇では、どうすることも出来なかつた。それなら上京して来いと言つてやるにしても、今の、慘めな生活の態を見せるのが辛かつた。それでとにかく、いづれ都合で近いうちに國の方へ往くから、その時必ずお會する事にするといふやうな曖昧なことをいつて返事を出して置いた。その後も文代からは二三回も、まだか／＼楽しんでお出でになるのを待つてゐるといふ堪りかねて待つてゐるらしい手紙を寄越してゐた。

それから間もなく年が變つて、一月の早々であつた。郷里の養母の叔母が病が危篤といふ電報を受取つたので、それには否應をいつてゐられないので、彼女は夫と相談のうへ早速旅費を調へ

てその夜の汽車で出立した。それは八年ぶりに國へ往くのであつた。そして向うへ着いてみるととても死に目に遭はれないと覺悟して往つた病人は、彼女のゆき着いた頃から案外持ち直して、今に今といふやうなこともなさうであつた。おたみは、養母に娘の文代のこと話してみたくつて堪らなかつたが、今そんなことをいひ出しては、病氣に障ると思つて差控へてそんなことを口に出さないでゐた。そして、いつも心の中にその事を思ひながら一日送りにいひ出すのを延ばしてゐた。すると、ある日のこと、病人の方から好い鹽梅に文代のことを言ひ出した。それは、去年の秋文代からおたみの方へ手紙を寄越してゐた時分であつた。その養母のところへ文代が突然訪ねて来て、東京にゐるお母さんに是非會はしてもらひたいといふから、そのうち一度歸つて来たら、きつと會はずやうにすると約束をして置いた。此度来たのを幸ひにぜひ會つてやつたらいゝだらうといつて、叔母は病み疲れた眼に涙を浮べて、

「私達の血のつゞいてゐる者といつては、お前と私とあの子と三人きりだ。可哀さうに、あの子も産まれ落ちると他人の手に育てられて、年の行かぬうちから、随分苦勞もしたらしい様子だ。」といつて、年寄りの愚痴を繰返へしてゐた。

おたみは、養母の枕頭に坐はつてそんな昔ばなしを聴きながら、それから其へと又しても留度



なく思ひ出されるのは文代を産んだ前後のことであつた。やう／＼まだ十六か七のおたみ自身は出るにも引くにもみんな周囲の者のいひなり放題になつてゐるのであつたが、もと／＼藝者屋などをしてゐたことがあるくらいで金銭づくでおたみの一身上のことを考へてゐる養母は、彼女の入籍の話が起つた時にも今までの養育料としてかなり鮮くない金を向うへ要求したりしたところから双方の間がまづい關係になつてゐたのであつた。おたみは口にくそ出さなかつたが、自分で自分の事が判断が付くやうになつてから、あの時養母が、あんな無法な欲の深いことさへ言ひ出してくれなかつたならば、いくら氣の強い先方の親達でもまさか我が倅の思ひ込んでもらつて来た戀女房で、しかも子供まで生れた仲を生木を裂くやうな無惨なことをしなかつたらう。養母ひとりの考へ方が間違つてゐたために、自分の一生を誤る遠因ともなつてしまつたのである。おたみは、寢返へり一つするにも人手を借りなければ自由の利かぬ體を仰向けに寢て、じつ／＼天井の方を見遣りながら老ひ窪んだ眼に涙を湛えてゐる養母の顔を眺めながら、今のこの涙はおほかた、自分の一圖の無法の處置が二人の若い者達に永久の悲しみを見せしめた悔悟の涙かしらぬと思ふと、彼女は今更にこの叔母が恨めしくもあり、又さすがに氣の毒なやうにも思はれた。

縣廳の所在地であるその市からは十五六里も離れた深い山の中の村から、文代がおたみに會ふために出て来たのは、おたみが通知してやつてから三日めであつた。文代はその時縁づいて一人の女の子さへ出来てゐた。おたみは、自分にはもう孫さへあるのかと思ふと、いつの間にか自分が年を取つたのが今更のやうに胸に喰入るのであつた。

ちやうどお午頃には文代がこゝに來着くのだと思ふと、おたみは我れにもなく、自分がまるで子供のやうに何となくそは／＼して心が落着かなかつた。そして病人の寢床のまはりを形付けたり、取つて置きの奇麗な掛け蒲團を出して掛けかえたり、病人に、いやがるのを、むりに汚らしい寢巻を柔かい物の綿入れに着替えさせたりして、自分も頭髮を撫で付けたり、着物を着かえたりして、まるで自分達よりは目上の來客でも迎へるやうな餘處ゆきの心持になつて文代の來着するのを今か今かと待つてゐた。

おたみはいろ／＼に想像をめぐらしてみた。もしも自分の産んだ文代が見るに堪えられない、醜い女であつたら？　と思ふと、逢つてみるのが何だか恐しいやうな氣がした。そして病人に向つて、



「お婆さん、文代はどんな顔ですか。あまり見つともないやうなことはありませんか。」と、さぐるやうに訊ねてみた。病母は病み衰へた手を怠儀さうに持ち扱ひながら、太息を吐くやうな聲を出して、

「さうだねえ、あんまり別嬪といふほどではないが肌膚のこまかい色の白い子だ。……頭髮の毛もさうたんと悪くはない、黒い毛ぢやつた。可愛い顔をしてゐる。」

それを訊いて、おたみは安心したやうな氣にもなつたが、でも、やつぱり二十年前の産まれたまゝの面影が眼の底にこびり着いてゐるので、彼女は今來る文代の顔は何とも想像が付かなかつた。

お午すぎになつて、おたみには義理の従弟の家内になるお榮に案内せられて、養母の病室にしてゐる縁側づたいの奥の離室に、お榮の背後について文代は入つてきた。

「おいでになりました。」お榮は遠くから聲を掛けて、襖をすうつと開きながら、「さあ、すつとお入んなさいまし。」といつて、自分は脇へ身を送はすやうにした。

その聲に、はつと思つて、おたみは、そちらを見ると、すぐ眼についたのは、半分開きかけた襖の闕際に、メリンス友禪の巻ぶとんにくるんだ、毛糸の雪除け帽子をかぶらせた赤坊を横抱き

にした文代が、「ご免下さい。」と、ほそい低い聲で云つたまゝ、入りかねて、もちく／＼してゐる。おたみは、

「どうぞ此方へ。」といつて、ふと文代の顔を見た刹那の彼女は、今までの期待を裏切られたやうに感じた。それと同時に自分の勝手の想像がそも／＼間違つてゐたのだと思つた。藝者屋をしてゐた叔母に育てられたおたみは自分の小娘時分のけぼ／＼しい装や、東京に來てから都の娘姿の眼に馴れてゐる彼女は我が子もその風に似通つてゐるものと思つてゐたのに、その文代は黒い房々とした髪の毛を無雑作な束髪に束ねて、田舎じみた縞柄の新お召の對の羽織と着物を着て、青色地に紅の勝つた安つほい模様の襦袢の半衿を掛けてゐた。そのうへおたみの知らない赤坊まで抱いて、何となく所帯じみた、みすばらしい姿をしてゐるのが、町で育つた此家の娘達よりも遙かに見劣りがした。おたみは、自分の肩身を剝がれたやうで、たまらなく憐れであつた。はじめで逢つたら、あゝもいはう、こうも云つてと、胸に一杯溜めてゐたことも、何處かへいつてしまつて、話の端緒さへも見付からなかつた。そして、ひとり所在のなささうにしてゐた従妹のお榮がお座なりの愛相を振りまいて、その場を濁してくれた。お榮は文代の膝から子供を抱き取つたと思つたら、



「姉さん、あなたもお祖母さんにおんなすつたんですよ。さあ、お祖母さんに抱っこしておもらひなさい。」といつて、おたみの膝のうへにそつとそれを載せた。

おたみは、さう差し付けられて爲方なく両手を掛けたものゝ、若い時から子供に経験のない彼女はどうして愛やすことさへ知らなかつた。赤ん坊は産まれてまだ二十日餘りだといつてゐたが誰れに似たのか落着いた静かな子で、眼をぱちくりさせておたみの顔を見てゐた。病人は寝ながらおたみの不器用な抱き方を見て、にこ／＼してゐた。

文代は、おたみに抱かれた赤坊の方を見ながら、「お祖母さんに抱いて戴いて、ようござんすね。おしつこしてはいけませんよ。」などゝ母親らしいことをいつてゐた。

おたみは何だか探つたい、薄氣味の悪いやうな心地がしてゐた。孫なんていふ心持も浮ばねば自分がこの赤坊の祖母だといふ感じには何うしてもなれなかつた。たゞ普通の來客の子供をお世辭半分に抱いてゐるとしか思へなかつた。やがてお榮が文代の爲めに馳走の支度にと座をはづして出ていつた後は病人もいつの間にかすやく／＼と心地よく眠つてしまつた。

病室の次の四疊半は、おたみが滞在中の部屋にあてがはれて従妹が氣を付けていつも暖い置炬燵がしてあつた。おたみと文代とは病室からそこへ座を移して來て安火に寄つて差向ひになつた

さうしてゐるとおたみは、朝のうちからそはそはとして落着かなかつた氣分も漸次鎮まつてきた。そして、不思議と母らしい優しい氣持さへ潤むやうに胸に浮んでくるのであつた。彼女は身體をすこし斜にして坐はりながら、伏眼になつてゐる文代の横顔をじいつと見てゐた。髪の毛の生え際も濃いといふほどではないが、それでも自分のやうに薄くはなかつた。眼は想像してゐたとほり黒眼の多い、明るい目をしてゐた。鼻も小さいなりに母親の自分よりは筋がよく通つてゐると思つて見てゐた。それだけは、おたみの心を満足させたけれど、口元が見るから父方の祖母にそつくりなのが厭はしかつた。自分の手から文代を生まれて六日目に浚らつて去つた祖母はいかにも意地の悪さうな受け唇であつた。そんな悪い處を此の文代が又そのまゝ受け繼いでゐるのが皮肉であつた。文代が産まれた時には眼よりも口が小さな、可愛い口であると思つてゐたことなどを思ひ起した。他の者もみんなお母さんよりも好くならんとお世辭でなくいつてくれた。それがどうしてこんな形に變るものかと不思議に思はれた。

薄縁な母と子とはさうして世間を忍びながら、此の家の者達にまで幾らか遠慮をして逢つてゐるのかと思ふと、おたみは自分達の境涯が淺ましくもあり、みじめで堪らなかつた。そして、ものゝ二十分間くらゐも互に凝乎と無言の状態をつづけてゐるうちにおたみは心臓の中に自然と暖



かい血が溢れて来たやうな親しみが湧くのを感じた。それに伴って彼女は夢のやうな遠い過去の事を懐しく回想させられた。今まであんまり思ひ出してみようともしはなかつた。文代の實父の初縁の夫のことが思ひ起された。たれよりも一層自分に優しくしてくれた勇造といふ抱車夫の顔などもひとりでに眼に見えるやうに思ひうかべられた。彼女は、

「お父さんは相變らずお達者ですか。」と、やつと口を切つて何よりも先きにそれを訊いてみた。そして、それだけ云ふと、何となく自分の心が咎められるやうな氣がしてそのまま思はず眼を伏せてしまつた。

文代は、おたみのそんな様子には氣の付かぬらしい顔をして、

「父ですか、父は昨年夏亡くなりました。私もお父さんさへ達者でゐて下さればいいのです。が。」と、いつたきり、あとは涙をはら／＼と溢してゐた。

「まあ、さうですか。……去年の夏。」

と、いつて、おたみはついと顔を上げて文代の方を見た。その時水落の處へ棒のやうな物をきゆうと挿込まれたやうな氣がしたまゝ後の言葉を續けることが出来なかつた。文代が去年の秋に出拔けに初めて手紙をよこして、その中に「今は親ひとり子ひとり」と書いてゐたのが、なるほ

どとやつと合點出來た。そして、

「ほんとにまあ何といふ不仕合なわが子であらうか。」と、涙ぐみながら文代の顔をじつと見つめてゐると、都の派手な娘達を見慣れた眼に、貧しい田舎じみた装ひをしてゐるその風俗や顔容が又一入いぢらしくなつてきて堪らなかつた。おたみはそのまま暫く又無言に耽つてゐたが、やがて、

「それぢや文代さんも心細いわねえ。」と慰め顔にいつたが、彼女自身も、その初縁の夫に別れて以來、ついで、會つてみたいなどと思つたことは、たゞの一度さへなかつた人ではあるが、もう未來永劫、再會したいと思つても會ふことの叶はぬ人になつてしまつたのかと思ふと、さすがにその人の影でも追ふて行きたいやうに慕はしかつた。

その人は市で相應に舊い醫者の家で次男に生まれて分家ではあつたが、多少の財産もあつて、東京の方で學校を卒業して歸るとすぐ町で開業してゐた。たしか彼女と九つか十くらゐ違つてゐたからその頃まだやつと二十五か六であつた。柳子といふ、兩親の眼鏡で貰つた立派な妻があつたのに、それを離縁して、その時分やつと小學校を済まして裁縫の稽古に通つてゐたおたみを途中で見染めて、やい／＼云つて連れていつたのであつた。彼女の養母はそこへ遣ふことは大反對



であつただけけれど、その頃まだ存命であつた兄や實母のはからいで、それほど欲しがらぬものならば本人も可愛がつてもらへるものだらうといつて先方のいふがまゝに嫁かしたのであつた。

先妻の柳子は、上田の家から離縁せられた、丁度その月から妊娠してゐた。それは、おたみが上田へ来て一と月の後に知れた。勿論上田の方でも知らなかつたらしい。そして生まれた子はやはり女の子で、あつたが、それを引取つて、おたみが其家へゐる間は里子に遣つてあつた。おたみは十五でそこへ行つて、十六の時に上田の方へ籍を入れる話が持ち上つた時今の叔母が、おたみを歸へしてもらひたい、かへさなければ今までの養育費を寄越してもらはねばならぬといふやうなことを、あけすけに切り出したので、それが原因で上田の方に氣まづい考を起さしてしまひいろ／＼な悶着の揚句、ある日實母の處から一寸來てもらひたいといふ迎への俤が來たので、何心なくそれに乗つて行くと、それは實母とは嘘で、養母が一人考へて迎へを出したのであつたとは後になつて直ぐ知れた。そして俤に乗せられた彼女は市中から遠く離れた、とある寂しい農家に連れてゆかれて、其家の一室に深く隠匿されてしまつた。それつきり彼女は上田の家へは歸らなかつた。勿論上田にも逢ふ機會は與へられなかつた。その時彼女はもう妊娠して四月になつてゐたのであつたが、まだ十六の彼女はそんなことは、少しも氣付かなかつた。後に話の様子でそ

れと分ると叔母は、何處までもそれを世間に知らすまいとした。それで身二つになるまでそのまゝその農家に預けて置かれた。おたみが妊娠した、そして分娩したといふことが上田の方にも知られると、そちらは又そちらで、氣の強い祖母の一存で、そんな子供を二人の仲に置いてさへゐなければ手を切らすにも都合がよい、又折角生まれた子供を私生兒にするも可哀さうだと思つた所から、おたみを欺して浚つて去つて、一寸した縁故のあつた遠くの農家へ、幾許かの養育料を附けて、生涯音信不通の約束にして呉れてしまつたのであつた。そして文代はその農家の長女として届け出された。おたみは、そんなことは、ずつと後になつてはじめて知つたのであるが、その頃まだ少しもそんな事に深い考のなかつた彼女は、籍くらゐはどうなつたとて構はないと思つて格別氣にも留めずにあつた。

文代が今涙ながらに語るところによると、彼女が十三になつた時その農家の養父は、妻と文代とに少しばかりの田畑を遺して置いたきり、所持してゐた財産全部を賣つて、すつかり金に換へそれを持つて他の好きな女を伴れて南洋の方へ出稼ぎに往つたきり、音沙汰は絶えてしまつた。後に捨てられた母と子とは爲方なく寂しく佗しい暮しをしてゐるうちに、縁があつて今の處へ嫁づくことになつた。



そして上田の方の實父は、四五年前から兎角健康が勝れなかつたところから醫者を廢してしまつて、家族の者とも別居してしまひ、市から大分離れたとある海岸に家を新築して、昔から氣に入りの勇造といふ抱車夫をしてゐた男を伴れてそこで靜かに餘生を送つてゐた。

丁度そこまで話した時、今までの母の膝に眠つてゐた赤坊が眼を覺まして泣き出した。文代は話を止めて、手早く乳房を含ませると子供は又すぐ音なく泣き止んだが、文代はそれが、さもなく可愛くつて、堪らないやうに、兩手に確と抱き締めて頬擦りをしてゐた。おたみはそれを見てゐて、子を産んだきりで、そのまゝ育てたことも持つたこともなかつた彼女は、まだ二十歳にもならない若い女が人前で恥かし氣もなく胸をはだけて乳房を出したり、馬鹿なことをいひながら子供に頬擦りをしたりするのが無作法にさへ思はれた。彼女は、そんなことを見てゐるよりも少しも早く話の後が聴きたくつて、心が急<sup>せ</sup>げた。そして、

「文さん」と、やさしい言葉をかけて、「そして、あなた私の事が、此處の家へ來れば知れるだらうと、それがよく分りましたわねえ。」と訊ひをかけると、

「あゝ、それは斯うなんですの。」と、少し聲を低めながら、

「去年の夏、お父さんが亡くなる前に、わたし海岸の家へまゐりますと、お父さんは四五日前か

ら持病の神經痛が起つたといつて、肩から、腕がひどく痛むと申してゐました。そして自分の居間で寝ころんでばかりゐまして、私も二三日逗留して、夜は父の蚊帳が廣かつたものですから一緒にその中に入つて休みました。田舎のことですから夜になつたつて、別に遊びに行くところもありませんし、二人は宵のうちから蚊帳の中へ入つてゐました。そして私はお父さんの肩を揉んで上げたりしてゐますと、お父さんは、「女の子は優しい」といつて、喜んでおいでになりました。その晩も痛む方の肩から腕を擦つてあげてゐますと、お父さんは何を考へてゐらつたのですか。「不意とおたみもゝういゝお婆さんになつたらう。」と仰有るから、私はすぐと「お母さんですか。」と訊き返へしました。

「それまで何かの話のついでに、あなたの事をも度々訊いてみたのですが、いつでも、又それを訊くかといふやうに顔を擧めて、「お前は彼れの事をあまり口にしない方がいゝ。お前の爲に好くない。分る時期が自然に來る。」と、そんなこと仰有つてゐたのに、その夜に限り、どうお思ひになつたのですか、

「彼れの事は、××に往つて、あそこのお婆さんに訊けば分る。」と、それだけ仰有つてよした。その時お父さんからそのことを訊きませんでしたら、私、あなたに、もう一生會ふことが出來な



かつたかも知れません。やつぱり父は近いうちに死ぬものと虫が知らせたのかも知れません。」

と、いつて悲しうに手巾を取出して眼を拭いてゐた。おたみも共に萬感胸に迫る思ひがしながら、やゝ暫く顔をそむけて、襟袵の袖で涙を抑へてゐた。それでも彼女は、まだ何か物足りないやうな氣がして、

「文さん、それでお父さんは、私の事を、その他何もいつてゐませんでしたか。」と訊いてみた。文代は眼から手巾を放して、

「いえ、別に。」といつて、後をいひにくさうにしながら、

「たゞねえ、私が、かあさんは何うしてゐるんでしやうと申しましたら、「彼れも、あの時私のいふことを守らなかつたから一生の方針を過つてしまつた。」といつてゐらつしやいました……あの……。」

と後をいひ澁みながら、病人の寝てゐる自分の背後を指して、

「悪かつたのですつてねえ。」と囁いて、口を噤んだ文代は、少し言ひ過ぎたと思つたのか、おたみを一寸見上げて、また直ぐに赤坊の顔に眼を落してしまつた。

文代の云つたことは、僅か二言三言に過ぎなかつたけれど、おたみには當時の事が轟々と胸に

ひびいて、不甲斐なき自身を省みて悔恨の念に耐えられなかつた。……養母から上田に酷しい交渉をした時、上田はおたみに向つて、どこまでも私を信じてゐれば可いのだ。他から誰れが、どんな事をいつても心を動かしてはならぬと、囁んで含めるやうにいひ聴かされたことは、彼女の記憶にも残つてゐる。あの時自分は何故養母から逃れて上田の家へ歸らなかつたのであらう。あの時の自分はなぜ、あんなに弱かつたのか知らん。上田に頼つてゐたら現在のやうな惨めな境遇は知らずに済んだかも知れなかつた。それも持つて生まれた運命と思へば爲方もない。……と、自分だけは諦らめたけれど、前に坐はつてゐる文代を見てゐると、あの時自分の心が弱かつたゝめに罪もない娘にまで不幸な目を見させたのだと思はれて胸を掻き撚りたいほど情けなくなつた。

上田は自分が歸つてから又三度めの妻を迎へたことは餘處ながら聞いて知つてゐたが、それには子供が生れなかつた。そして夫婦養子をして自分は隠居して居たのであるから、上田にとつても文代がたゞ一粒の子種なのであつた。先妻の柳子の産んだ子は間もなく死んでしまつた。そんな縁に繋がれてゐたせゐでもあつたらうか、それにしても二十年も昔の舊いことを死ぬまでも忘れずに覚えてゐてくれた男の心が、彼女には床しいやうな有難いやうで、濟まないやうな氣がし



た。

話が一通り済んでから、おたみは、手近にあつた自分の信支袋を引寄せて、中からサツクに入れたまゝの指環を取り出して文代の前に置いた。その品は彼女に取つては、又別の意味で大切な品であつたが、ほかに何も遣るやうな持合せの品がなかつたので、彼女はせめてもの土産にそれを文代にやることにした。文代は嬉しさうに頂いてそれを受取つた。

なほ色々話してゐるうちにやがて八時が打つと、文代は俄に氣が付いたやうに歸るといつて立ちかけた。おたみは、もつと傍に置いといていつまでも話してゐたいやうな氣がするので、せひ泊まつて枕を並べて寝て話をしようと思つたけれど、文代は、自分を七つの歳まで育ててくれた乳母が市中に嫁づいてゐるので、その朝も此方へ来る時に一寸寄つて、今晚はそちらに歸つて泊めてもらふ約束をして来たから、きつと乳母が楽しんで待つてゐます。此方へは明朝十時頃までにうかがひます。それに、こんな者を伴れてゐますからといつて、抱いてゐる子供の方を見てその夜は歸つてしまつた。

おたみは、眞實血を分けた娘であり孫でありながら、やつぱり子供の時から自分の手鹽にかけて育てた者でない、そこに遠慮があつたり隔てがあつたりして馴染んでくれないのかと思ふと

今更に自分の孤獨が思ひ知られて、母らしい務めもせずにおた自分が咎められた。

その翌朝おたみがまだ寢床の中に眼を覺ましてゐる時、従弟の娘が、出しぬけに、

「東京の小母さん、叔父さんから電報です。」

といつて、彼女に渡していつた。おたみは、どんな急な事が出来たのかと思つて、寝ながら封を切つて披いてみると、

「カヘラヌモヨイカヘルナ」としてあつた。

彼女は、それを見ると、口の中で「何だ、これだから厭になつてしまふ。」といつて、そのまゝ電信紙をそこに投出して又枕を引寄せて蒲團を顔まで引つ被いでしまつた。

今の夫とは、いつまでかうしてゐてもつまらない、別れたいといふ心がいとも胸にあるので、どうかした蟲の居どころから、ついそれを口に出したりなどすることも稀しくなかつた。そんな僻みも手傳つてゐるのであるが、一體が氣の狭い、束縛のきびしい夫の傍を離れて、偶々久振りに郷里に来て、いくらか氣分も伸々してゐるし、それにまた病人も、長く見なかつた彼女に一日でも多く傍にゐてもらひたがるので、おたみは、東京への手紙の度に、一日延ばしに歸京を猶豫



さしてもらつてゐたのであつた。知らぬ者には親子と見ちがへられるほど年の相違してゐる夫婦であるのから、彼女はそれを見つともない、あゝ厭だと思ふこともあるが、自分が朝鮮の方へ志して行つた時懇望されて内縁を結んだ味分には夫もその地で相應な巨利を占めてゐた後であつた。そして彼女と一緒になつた頃から段々下り坂になつて、たうとう終には夜逃げのやうにして内地に戻つて來たのであるが、落ち目になつた處を見棄るに忍びなかつたばかりに、それからつと十年近く末の見込みもない不如意な生活を續けてゐるのであつた。八年前、朝鮮から歸つて來て、東京の方に行く途中三四日郷里に逗留してゐた時にも、養母の叔母は今夫と別れさして彼女を自分の傍に引留めて置きたかつたのである。一旦夫婦となれば、さすがに彼女は、それならならず、そのまゝ一緒に東京に來て、今日まで八年の月日はあぶく／＼してゐる間に流れるやうに過ぎてしまつた。

彼女は凝乎と蒲團の下に眼を瞑りながら、今度は暫く今の夫との仲のことを思ひ返へしてゐた。そして、折もあり、あんな電報を寄越したりするなら、「デンミタカヘラヌ」と返電を打つてやうと、字句を空で考へてゐた。あの人とかうして何時までもする／＼一緒にさへ居なかつたならば、ひとりの子の文代とどんなにしても一所に居らうと思へばゐられないこともないのだ。向

うがこんな電報を打つて寄越したのは願つてもない好い機會だ、これを幸ひにいつそもう歸らな  
いで居らう。そんなことを色々考へ惑ひながらゐると、東京から電報が來たと聞いた従弟夫婦  
は二人狼てゝおたみの寢てゐる枕頭へ入つてきて、心配さうに、

「姉さん電報が來ましたつて、何か心配な事でもあるんですか。」と、口を揃へて訊いた。

おたみは蒲團から顔を出して、狡さうに微笑みながら、

「なに、何でもありませんよ。そんな事を云つて來たから、私、ちやうど幸ひ、デンミタカヘラ  
ヌといふ返電を打たうと思つて、今考へてゐたところなの。」

平氣な顔をしてさういふと、夫婦は眼を圓くして互に顔を見合せてゐたが、やがて妻のお榮は  
亭主よりも分別ありさうな顔をして、

「姉さん、それは可けません。今度來て頂いたのも、私達の方から、ぜひ姉さんに暇を戴いて寄  
越して下さるやうに願ひして、機嫌よくよこしてくだすつたのですから、此處でこのまゝ歸ら  
なかつたら、私達夫婦の者が東京のおちさんに對して義理が濟まない事になります。今度は一と  
先づお歸りになつたらうへで又話は何とでも着くと思ひます。お婆さんもあのとほり、先生も今度  
は全快は請合ふといつて下さるので、どうぞ今夜の汽車で歸つて下さい。私の家から今夜の



汽車でかへすといふ電報を打つて置きますから。」

女房がさういふと、亭主も傍から口を添へて、

「どうぞさうなすつて下さい。私の方では姉さんに何時までも逗留していただきたいのですけれど、まあ今度は一應機嫌よく東京へおかへりになつた方が後で話をするのに都合がよからうと思ひます。」と宥めるやうにいふのであつた。

おたみも、なるほどさういへば、今夫婦の前で駄々を捏ねたところで爲方がないと思つたので彼等の言葉にまかせて、ともかくもその夜の汽車で歸京することにした。

やがておたみは、寢床を離れて頭髮をとき付けたりしながら、十時頃には文代が又來ると云つたので、それを待ち心地で、何かまだ彼女に遣る物はないかと考へてゐたが、ふつと思ひついたのは、簞笥の抽斗に藏つてある、今は自分には派手で挿せなくなつた頭の物であつた。たしか二組や三組はある筈だ。さうだ、あれを遣らうと思つて、すぐ起つて、自分の簞笥などの置いてある奥の三疊の物置きに入つてゆくと、その薄暗い壁際に黒塗りの重ね簞笥が主に見放されたやうに置いてある。それ等は自分が、文代の父の上田の次に、二度目に嫁いてゐた夫に死別れた時

持つてそのまゝ叔母の手許に預けて置いた品であつた。その夫とは十年連れ添ふてゐた。夫には死なれても彼女は三十にはまだ大分間があつた。……そんな返らぬことをふつと思ひうかべながらその簞笥の前に立つと、火の氣のない冷たい物置きの中に、黒塗りの簞笥はおたみの姿をさびしく映してゐた。

彼女は八年の間手を掛けなかつた簞笥の小抽斗の開きをあけて、たしか此處に藏つて置いた筈だと三つ重なつてゐる桐の小抽斗の一番上を引出すと、その中には紅絹や紫のいろ／＼な小布がもとのまゝに一杯つまつてゐて、冷いなかにも、ばつと、床しい香の薫が鼻を打つた。それ等は女氣の細心に彼女が衣類を新調するたびに、まさかの時のあて布にと思つて少しづつ切り残しておいた、羽織や着物や長襦袢などの友ぎれであつた。それはそのまゝ、かうしてもとのまゝに保存されてゐるのに、肝腎のその相手の衣類はみんな無くしてしまつて一枚も残つてゐないのだと思つたら、彼女はじわじわと涙がにじんだ。その次の抽斗を何氣なく開けてみると、それには又いろ／＼な寫眞が入つてゐた。それも自分が藏つたまゝになつてゐる。そしてその寫眞の中には又どの夫にも話されなかつたやうな物があつた。おたみはそれを見ると、今でも胸が亂れるやうであつた。三つめの抽斗には頭の飾り道具が一切入つてゐた。それを引出して何より先に目につい



たのは赤や淡紅色の、鬚の手柄であつた。自分にもこんな物をかけた時代があつたのだと思ふとそれも懐しかつた。そして文代に遣りたいと思つた桐の小箱を三つばかり取り出して、その中の紅絹の小袋に入れた鼈甲の櫛や中挿しを一つひとつ抜き取つて、袋の布でよく拭いてみたり、高く差上げて透かしてみたりしながら、それを挿してゐた時が自分の世盛りであつたと、やゝ暫くうつとりしてゐた。……

そこへ文代が來たのを知らずために、姪が出抜けに入つて來て背後から、「東京の小母さん何してゐるの。」聲を掛けたので彼女はびっくりして物置から出てきた。

文代とは両方で互に、昨日よりは打融けた調子で話すことができた。おたみは、今夜の汽車で急に歸らねばならなくなつた譯をかい摘んで話すと、文代は驚いて、失望の色を表はしながら、實は昨夜あれから電報を打つて、自分の夫にぜひ會いに來るやうにいつてやつたから、今晚必ず來るにちがひないから、どうぞそれまで出立を延ばして待つてゐて會つてやつて下さいと頼むやうにいつたけれど、おたみの方は何時の汽車で立つと、東京へ時間まで知らして置いたので、今更それを變更することもならなかつた。それで慰めるやうに、

「わたし今度は歸つても、都合で又すぐ引返へして來ないとも限りません。そしたら幾らでも會

へます。」

といつて、今の夫との事情をあらまし話して聽かすと、文代は、何處までも眞面目な顔で、

「今度おかへりになつたら、すぐ私の家に来て下さい。山の中の田舎で贅澤は出來なくつても、お母さん一人に、決して御不自由な目はさせません。」

と、いひ／＼涙を流してじつと泣いてゐた。

その時、おたみの心では今の夫と貧しい暮しをしてゐる處を、何としても文代達に見せたくなかつた。今の夫との間が何とかなるまでは會ふのも何となく氣が進まなかつた。そして、それから又その夫とは二三年の間曳摺られて行くやうな生活をつゞけてゐて、やつと思ひが叶つて、獨りになることが出來たのであつた。

文代達が訪ねて來はせぬか、今の惨めなさまを彼等に見せたくないといふやうな氣持ちから、その夫と一緒にゐる間は、今にいまにと思ひつゝ本意なくわざと疎々しくしてゐた。向うでは定めて薄情な母親だといつて、怨んだり諦めたりしてゐるかも知れぬ。けれども自分では決して／＼そんな冷たい心はなかつたのである。それどころか、今となつては、一枚づゝ拵へる衣類や身のまはりの物など、自分には少し派手すぎると思ふやうな物もわざとさうするので、あはれ文代



別

離

136

のほかにだれにも譲る者もない。(をほり)六月六日



茶の間の柱に懸つてゐる竹細工の状差しに、黒枠の大きな封筒が、もう先々月の八月の半頃から他の手紙や端書と一所に差込んであつた。それは、去年の二月に生き別れをした夫の死去の通知状であつた。けれども、それはお富に宛てゝ寄越したのではなく、お富が現在奉公してゐる主人の店に宛てゝよこしたものであつた。その通知状が来た時、店の支配人の石原さんといふのが、「おばさん、お爺さんが遂に亡くなりましたな、お氣の毒ですね。」と、店の方から聲を掛けながら彼女の手にその黒枠の封筒を渡された時には、

「ぢや、たうとうあの人も死んでしまつたのか。」と思つただけであつた。そして、一寸見たまゝすぐ茶の間の状差しに挿し込んでおいたのである。そして、日に幾度となくそこへ出入りするお富には、其室に入つてくるたびに何よりも先きにその黒枠が眼について、中の本文の武之助の父何某云々の極り文句の活字が、はつきり、白い西洋紙の封筒の上に浮いて見えるやうに思へてならなかつた。

その状差しにある他の手紙も端書も皆な、店の若主人とお富自身とにあてゝ来たものばかりでほかの、店の人あてののは一通もなかつた。そして、二人とも、そんな大切な要件の手紙は酷々の自分の室へ持つていつて、單に時候見舞だとか、安着の報知だとかいつたやうな、讀んであとは



すぐ屑籠に投げ入れても差支へないのをも、人情として、さうもならないので、爲方なく、そのまゝ手近の茶の間の状差しに挿して置くのである。そして、そんなのが段々堆積して這入りきれなくなると、屑籠へ惜気もなく投込んでしまふ。

もう八月の半頃から二三回も、他の手紙や端書は、ちやうど先様おかはりといったやうに溜ると屑籠へ投入しながら、何故か黒枠の封筒ばかりは、むざと投げ入れもならず、いつまでも状差しに残つてゐるのであつた。

支配人の石原さんから、その封筒を渡されて四五日過ぎて、お富はかねて懇意にしてゐる、牛込の方のある家へ久し振りで訪づれたことがあつた。その主人夫婦はやつぱり彼女と同じ中國の方のある都會から出て來てゐるのであつたが、深切な老人夫婦で、いつ訪ねていつても、必ず郷里へ歸つていつたお富の先の夫の噂をするのであつた。その夫の郷里といふは、彼等の郷里は異つてゐて、それは暖い海を受けた四國の方の町であつた。で、その時も、年とつた細君が、お富からまだ云ひ出さぬ先きに、

「どうです。その後四國から何かおたよりが有りますか。」と云つて訊いた。お富は、もうその事は忘れてゐたので、さう云はれて、ふつと思ひ出し、

「まあ奥さん、たうとう亡くなりました。つい四五日前に、それも私に宛てゝ寄越したのではなく、お店へあてて死去の通知がまゐりましたの。」

それを聽いて細君は驚いたやうに、

「おや、まあさうですか。ほんとにお傷はしうございますねえ。」といつて、もう眼に涙を一杯ためてゐた。そして、涙聲で、

「お爺さんが、お國へ歸るまへに、今日は氣分が少しいゝからお別れに來ましたといつて、來て下さつた時には、あなたの事をいつて喜んでおいでなすつたよ。……あれも、私のやうな年を取つた者を、いや／＼ながらも、よく深切に世話をしてくれました。近日私は郷里へ歸ります。いづれ、彼女も國へ歸へるでせう。あれも今の内ならば、どうにかなるでせう。私も國へ歸つて、都合さへ付けば金を送つて寄越してやりたいと思つてゐます。と、そんなことをいつておいでなすつたよ。死際にはさぞ貴女に別れが言ひたかつたでせう……。」「さういつてゐるうちに、細君はしやくり上げて浴衣の袖で眼を抑へて泣き出した。

それに伴れてお富も無上に悲しくなつて、暫くの間一緒に泣いてゐた。

細君の泣いてゐるのは、無論死んだ人を傷はしがつて泣いてゐるのであるが、彼女の泣いてゐ



るのは、その爲めではなさうであつた。彼女は、四五日前支配人の手からその通知状を受取つた時から、今日此の家へ来るまで、そのために涙の出るほど悲しいとは思はなかつた。さうかと云つて、あの人が死ねばよいとは、固より夢にも思つたことはなかつた。自分とは二十七も年の遠ふその夫と別れたい／＼とは、多年の希望ではあつたけれど、人に恨まれることが何よりも苦痛であつたお富は、他人の眼にも餘るほどの束縛をその夫から受けながらも盡されるだけの事は盡して來たし、去年の春の初、長い間の望みが叶つて漸つと別れる時機が自然に來て、互に得心の上別れたので、向ふが四國の方の故郷に歸つて去つてから後も、まだ五月頃までは、病人の口に合ふやうな物などを、月に一度は心に掛けて送つて遣つたりしてゐた。

それに、別れ際にお富自身でも、その年の五月頃になつたら郷里の方へ歸るやうなことをいつて置いたものだから、いつまでも東京から物を送つたりするのも變であつたり、又奉公してゐる店の人達も、そんな物はもう送つてやらない方が、向ふの爲めにもよいと注意されたりしたので、其後は全く音信不通になつてゐただけれど、彼女の心の中ではどうか此の先きも無事で、幸福でゐてくれるやうにと祈つてゐたのであつた。そして、どうかすると、ふと夫の娘の嫁に行つてゐる家へでも手紙をやつて、お父さんの病氣は全快したかどうか訊ねてみようかなどと思つ

たこともあつたけれど、生半そんなことをして、又籤をつゝいて蛇を出すやうなことがあつてはならぬ、向ふは此方に對して未練が残つてゐて爲方がないのだから。と、思つて、その儘にして置いたのであつた。

その夫とお富が夫婦になつたのは、彼女がまだ二十六七の時分で、それから丁度まる十二年ほど連れ添つてゐたが子供は一人も生まれなかつた。けれども夫には故郷には四五人の息子や娘があつて、皆なそれ／＼に形付いてゐた。夫は若い時から、妻子を國に棄て、飛び出し、殆ど四十年近くの間自分の好きな眞似をして、しかも終を、碌々自分の手鹽に掛けもしなかつた實子の傍に引取られて手厚い介抱を受けて世を去つたのであるから、その老いた夫に生別れて後は子とてもない、ほんとの獨りである彼女自身よりは遙かに幸福な人であると思つてゐるので、死んだと聞いても、すこしも残り惜しいとも思はないし、又悲しいとも思はないのであつた。たゞ其家の細君の涙に誘はれて泣いただけであつた。

年取つた細君は、やがて鼻をかんだり、眼を赤くしながら、

「お富さん、人の死ぬ前には近親の者とか懇意な人達には蟲の知らせか何かがあるといひますがあなたにはそんな事はありませんでしたか。」といつて、訊く。



さういはれてお富は考へてみると、ふと思ひ出したことがあつた。その時から一ヶ月ほど前の夢だつた。あの夜寝てゐると、枕下に誰れか来て坐わつてゐるやうな気がしたので、眼を明けてみると、先の夫が来てゐる。彼女は驚いて何處かへ逃げ出さうとして跳きながら本當に眼を覺ました。

その翌朝若主人が食事の時傍に附いてゐて昨夜の夢の話をする、いつでもお富の話を茶化してしまふのに、その時に限つて、何か深く感じたやうに、箸の手を休めて、

「ふうん。」といつたまゝ彼女の顔を見ながら、「お爺さんももう長くはないね。お前に別れに來たのだ。」といつた。

「おどかしちや厭ですよ。」とお富も戯談のやうに云つたけれども、その實襟元から水でも浴せられたやうに冷りとしたのであつた。で、

「奥さんがさう仰有れば、こんな事もございました。」と、その話をする、細君は、なるほど、云つたやうに靜かにうなづいて、

「それは、きつと貴女に、お爺さんの魂が、お禮を言ひに來たのですよ。ほんとうに可哀さうに。」と、しみ／＼云つて又新たに涙をはら／＼とこぼしてゐた。

牛込のその家へ行くまでは、茶の間へ入つてその封筒が眼に着いても、さう氣にも留めなかつたのが、牛込の家の細君から、いろんな事を聞かされたり、訊いたりして歸つてからは、封筒の黒枠が眼に入ると同時に、夫の死といふ事が第一に胸に浮んでくる。それから、死の原因の病氣は、この家へ來てからのこと、其の當時の事などを次から次と聯想せずにはゐられなくなる。へ、

忘れもせぬ、丁度今から三年前の一昨年八月の末だつた。生活の都合上夫と共に今ゐる家へ夫婦づれで奉公に住込むことになつた。さうして此家へ越して來て二三日すると夫は暑氣あたりのやうな鹽梅で、どつと寝付いてしまつた。でも家の主人の厚い情けで、すぐ附近の病院へ入れてもらつた。院長の診断では若い血氣の人なれば心配のない病氣だが、何分老人の事で、衰弱が烈しいから何とも受合はれない。兎に角近親の人へ報知して置いてもいゝとの事であつた。

夫は長年他國へ出て失敗の結果、郷里にゐる息子や娘達にも久しく音信不通になつてゐるので今更病氣だからと云つて、自分から通知したいとはいはなかつたけれど、お富は萬一の時、來てからまだ馴染みの浅い主家にこの上の迷惑は掛けられないと思つて、店の支配人に相談して、支配人から郷里の方へ通知してもらつた。すると、一週間の後郷里から、娘の良人だといふ村田と



いふ人間が上京して来た。その時病人は少しく良い方へ向つてゐたが、村田は、今少し快くなつたら連れて歸りたいと云つて、病人に歸國を勧めたけれども、病人は主家にこんなにお世話になつて、このまま歸國しては義理が濟まない、快くなつて萬分の一つでも御恩報じをした上でなければと云つて、歸らうとはどうしても云はない。それで村田も爲方なしに、院長が、この後一ヶ月もすれば全快して退院が出来るであらうと云つた言葉を土産に、十日間ばかり滞京したうへで一人で國へ歸つてしまつた。病氣は、それでも院長のいつてくれたやうに順調に快方に向つて、豫定よりも早く退院することが出来たのであつた。そして退院してから間もなくであつた。此度は夫の總領息子の武之助が上京して来た。武之助は自分の勤め先の會社の用事を兼ねて、どうしても父を引連れて歸るつもりで来たらしかつた。

お富は、その武之助とは、東京で會ふのはそれが初めてだが、今から十年前、まだ彼女と老人の夫とが兩方とも朝鮮の釜山にゐて、ふとした縁で夫婦になつてから間のない時分には、數度も會つてよく知つてゐた。その時分はお爺さんがまだ、一時朝鮮で成功して、そして、まだすつかり失敗してしまはない頃であつたので、その息子も朝鮮まで時々やつて来た。

それで、武之助が父親を連れて歸ることについては、直接お富に向つては何も話さなかつたけ

れど、支配人の石原さんと夫と息子の三人で相談してゐたらしかつた。父親はぜひとも伴れて歸りたいが、お富をまで一緒にとは郷里の方の事情が許さなかつた。伴の武之助はお富よりは年が三つ上でもあるし、それに、もう長い間、夫婦別れをしてゐるとはいへ、武之助の實母で、若い時から今日まで幾十年の苦節を守つてゐる夫の先妻も同じ郷里にまだ存命してゐるのであつた。武之助の立場からも、夫の立場からお富と一緒に伴れて行くことは、あまりに父親としても勝手過ぎるやうでいひ出せないのであつた。そして、武之助が、この前娘の婚の村田が迎へに來た時と同じやうに、やつぱり一人で歸ることゝなつた時、今までの、店の主人から立換へてもらつてゐる入院前後の費用全部を辨償して行くといつたのを、父親は何と思つてか強く辭退して、自分が身體さへ健康になれば、働いて少しづつでも返濟するといつて、伴からその金を出してもらふことを肯んじなかつたからである。いくら實の子でも、幼少の時に置き去りにして、自分の力で育てなかつたといふ遠慮があるのであつた。

武之助は出立際にお富に五十圓だけ金を渡して、

「何かこれで滋養になる物を買つてやつて下さい。何分よろしくお頼み申します……今度は連れてかへるつもりでしたが、主家に義理が有るから當分歸國は厭だといつてゐますから。」といつて



みた。

父親が主家に對して義理が有るから當分歸らないといふのも本當ではあるが、彼はそんな事よりも何よりも斯よりも若いお富に離れるのが一番つらいのであつた。彼はお富と一緒にさへゐるなら、東京にゐて、どんな窮迫した生活をすらすらも辞さないものであつた。事實彼等が今の家へ夫婦奉公に住込むまでには、一時お爺さんは、馴れぬ屑屋をまでして歩いたのであつた。

そして、武之助が歸つて間もなく、又病氣に罹つた。それは先の病氣とは異つた病症ではあつたが、衰弱の結果自然に出て來た病氣であつた。十一月十二月はそんな事で隣りに暮れてしまひ、年を越しても病氣は捗々しくなかつた。醫者の診察では、腎臓病だから急には癒りさうもないことを云つた。それで、今まで随分剛情であつた本人も、漸く心細くなつて來たので、遂に我を折り、國に歸りたい意志を洩らすやうになつた。お富にしてももう此の上主家に迷惑を掛けるのが心苦くなつて、老夫に納得ゆくやうによく因果を含めて歸國をすゝめ、早速郷里へあてゝ迎へに來るやうに書いてやつた。武之助からは、病人の氣分の好い時に神戸まで歸つてくれば、こちらから迎へに行くといふ返事を寄越した。それで二月の六日に神戸三の宮驛の某旅館に着いて待ち合はしてゐることを言つてやると、折返へして電報爲替で旅費を送つてきたので、遂に極寒

の二月の五日に東京を立つて、お富は神戸まで病夫を送り届けることにして二三日の暇を主家からもらひ汽車に乗つたのであつた。

三の宮の某旅館に到着したのは豫定のとほり翌日の午後二時頃であつたが、旅館の者はお富が病夫をおじいさんと呼んでゐると、誰れが眼にも年が三十くらゐは違つてゐるので親子だと思つたらしかつた。表二階の六疊の間へ案内せられたが、お富は、案内した女中に向つて、

「少し病人ですから、すぐ床を敷いてやつて下さい。」と頼んでおいて、すぐ自分で帳場に下りていつて、頼信紙をもらつて、今此處の家へ着いて待つてゐるといふ電報を四國の郷里へあてゝ打たしてもらつた。

そして、病人の傍へ戻つて來た。ふと見ると、病人の眼には涙が滲んでゐる。別れたい〜と多年望んでゐた彼女もこの人とかうして一緒にゐるのも今日明日の一日か二日だと思ふと、さすがに胸が一ぱいになつて、自分もともに涙ぐまずにはゐられなかつた。折から空は雪模様に鈍く曇つて障子の影さへ何となく薄暗く濕つてゐるやうに思はれた。そのうちすぐ日が暮れて、互に何ともいへない淋しい氣持ちで夕食の膳に向つたが、箸を置くまで無言のまゝであつた。

丁度食事の済んだ頃郷里から返電があつて、



アスノフネデムカイニユク

といふ意味であつた。

その翌朝食事が済むと、病人は昨日汽車で揺られて病氣に障らないかと氣づかつてゐたにも係らず、こちらへ來てから大變氣分が軽くなつたと云つてゐたが、お富が寂しさうにして黙りがちであるのが氣にかゝると見えて、

「お前も神戸は久し振りだらうから、散歩かた／＼楠公さんの方へでも行つてみたらいいだらう。」

といつて、頻りに勧めるので、彼女も、別に手數のかゝる病人でもないしと思つて、その氣になり、一人で外出して東京へ持つて歸る土産物などを買つたりして、午少し過ぎに旅館へ戻つてきた。

そして寂しい氣持ちに胸を鎖ざゝれながら、背後にまはつて、骨と皮ばかりになつた病人の背を摩つてやつたりしてゐた。ついまだ三四年前までは、薬といふものを殆ど服んだことのないくらの頑丈に出來た體で、何時か酷しい暑さのつゞいた揚句の秋口に、はじめて食事が進まぬので、醫者に診てもらつた時にも、六十幾つとは思へないくらい、體の諸機關がまだ二十五六の壯者の

とほりであると云つたといつて、醫者から歸つて來て話してゐたことがあつたが、その時、お富は、お爺さんにそんなに長く生きてゐられたら、今ならば、まだ何とかなる自分の方が先きに死ぬかも知れぬと思つてみたりしたのであつた。考へてみると、その三四年前に稀しく醫者にかゝつた時分から健康な體にも罅が入りかけてゐたのであつた。

病人は、くゞり枕に顔を伏せて、尖つた肩先に惱ましげな溜息を切つてゐた。そして光澤の失せた、利久ねすみの綿のやうになつた變の毛が薄暗い電燈に照らされてゐるのが、いたいやうのない哀れに思はれた。

病人はいつまでも枕に顔を押當てながら、「お前に苦勞ばかりをさせて濟まなかつた。おまへも私と別れたあととはきつと好くなるだらうと思ふ。私も死ぬまでお前と一緒に居られるとは思つてゐなかつた。どうにかして相當な金を持たして國へ歸してやりたいとは思つてゐたのだ。武之助も可なりに暮してゐるさうだから、病氣でも快くなつて、都合がつけば少しでも送りたいと思つてゐる。お前も女獨りで何時までも餘處の家へ奉公なぞしてゐないで、都合よく話を着けて國へ歸んなさい。すれば老人も喜ぶだらうし、そして又實の娘を訪づねて互に往來して置く方が可い。それとも今の内ならば適當なところがあつたら身を固めて、末の安樂といふ事を計んなさい。そ



の方がいゝ、其のほうが可い。」

と、繰返へしておいて、俯向いたまゝ頭を左右に動かしてゐた。きつと胸が迫まつて、枕で眼でもこすつてゐたのだらう。

お富には、國にもう両親も兄弟もなかつたが、幼い時から母親の妹にあたる叔母の養女になつてゐるのであつた。そして、彼等がまだ十六七の時分に生んだ娘が一人あつて、それは事情があつて、生れ落ちるときから一生音信不通の約束で遠くへ養女に遣つてしまひ、自分もその時嫁入つた先きから離縁してしまつたのであつた。でも、そんなことは皆な親がかりの時分のこと、自分の意思でしたことはなかつたのだ。

それで、彼女は、病夫の今いつたのに答へて、何か云はうとしたが、涙がじわ／＼と滲んできて、唇がぶる／＼と慄えて口を利くことが出来なかつた。やゝ暫く黙つて襟袵の袖口で涙を拭いてゐたが、

「あなたはお國へ歸れば幸福ですわ。第一土地が東京と異つて暖かだし、あなたの病氣もきつと早く快くなるでせう。そして今までの様に物質にも不自由はないと思ひますわ。私も今すぐといつては主人へ義理も濟まないが、五月頃までには何とか話をつけて歸りたいと思ひます。國へ歸

つても、之からほかへ縁づきたいなどは思ひません。あなたもどうぞ身を大切に早くと早く快くなつて、長生きして下さい。私も又どんな都合でお國へ行かぬとも限りません。その時はきつとお訪ねします。」

さういふと、病人は力なげに横に向き直つて、

「お前も疲れてゐるだらうから、休んでくれ。私も眠つてみるから。」といつて、じつと眼をとじてゐた。

その翌朝まだ六時時分に、寢床の中にて聞いてゐると、旅館の門口に俥の梶棒を卸す音がして、はてなと思つてゐると、間もなく梯子段をどし／＼と上がる足音がして、

「遅くなりました。」といひつゝ、娘婿の村田が入つてきた。そして、すこしも飾りつ氣のない、律義らしい彼は、懐しさうに先づ舅の顔を凝乎と見てゐたが、やがてお富の方へ向き直つて、

「いろ／＼とお世話さまでした。義兄さんも宜敷く申した。實は義兄が来る筈でしたが、社の方の手抜けが出来ませんので私がまゐる事になりました。」といつて、彼女からその後のことや、今度の病氣の模様などを、さつと掻い摘んで聞き取つてから話の末に、



「……お父さんも、貴女と一緒に来て頂いたら好いのですが、それにまた……」と、いひさしてなぜか澀んでゐると、病人は、それを直ぐ引取つて、

「なに、これは國にぜひとも見なければならぬ老人が有るので来てくれといつても行かれないんだ。」といつて、それから、今から自分の歸つて行く家を不安にでも思つたのか、横に寝ながら村田を見て、

「武之助には子供が二三人もあるといつてゐたが、随分賑かだらうな。」といふと、村田は頭を軽く横に振つて、

「そんなことはございません。家は廣いし、お父さんの病室として二階の日當りの好い八疊の間をそれに定めてあります。そして藁蒲團と絹夜具をも新調しました。……義兄さんも伴田の重役でそのうち支配人になるだらうと、皆なで噂してゐます。」伴田といふのは、郷里の方の其邊切つての富豪であつた。村田は鼻を感めるやうに、又話を次いで、

「早く快くおんなすつて、此の夏は昔のやうに桂濱へ釣魚にゐらつしやるんですね。御自分の相續人の家へ歸るんですもの、誰に遠慮も心配もありません。内のおいそも喜んでお父さんのお歸りを待つてゐます。」

そんなことを云つて、又お富の方を見て、

「どうぞお父さんのことは御安心なすつて下さい。お聴きのとほりですから。」といふ。

病人もそれをきいて、満足さうにうなづいてゐた。

お富の用事もそれで済んだのであつたが、もう朝の特急列車にも遅れてしまつたので、

「もう貴郎が来て下すつたら安心ですから、私は今晚の汽車で東京へ歸りましょうか。」

相談するやうにいつてみた。すると村田は、

「まことに勝手を申上げるやうで、すみませんが、私もこの神戸に親戚がごさいますので、折角来たついでですから一寸顔出しがしたいとぞんじます。社員のことですから、夕方から一寸行つてみたいと存じます。そしてお父さんの気分がよかつたら、明日の午後三時出帆の船で歸國したいと思ひますが、ご都合さへ悪くなければ、どうか今夜もう一と晩こゝへお泊りになつて、明朝の汽車に爲すつて下さいませんか。」といふ。病人も傍から、

「今夜電報を打つておいて、明朝にしたら、どうだ。」と口をそへる。

お富も、それでもとは云ひかねて、歸京をもう一晚延ばすことにした。村田は夕方から宿を出ていつたが、やがて九時頃に出先から電話を掛けてきて、親戚でぜひにといつて、引留めて、



今晚は宿へ歸れぬから宜しくお頼みする、明朝貴女の出立の間には必ず合ふやうに歸つてお見送りしますといふ。それはしかし、親類で引留めたばかりでなく、村田がわざと氣を利かして老人が離愁の最終の夜をばづしたのであつたかも知れぬ。

お富はそれから夜遅くまで起きてゐて、船の中で食べる物を買つて來たり、行李を解いて、向ふへ着くまで入らないものの中に入れて、船が彼方へ着いた時の着替へを、出しよいやうに、上重ねに重ねなほしたりした。それも着替へといふほどの物でもなかつた。失敗の度に良い物も悪い物も金に換へられるだけかへて、元も子も無くしてしまつたのであつた。たつた一枚全盛時代に不斷着だといつて拵へた高貴の鐵無地の羽織が残つてゐるだけであつた。それも疾に金にしようとしかけたのを男はどんなことで無くてはならぬ場合があるかも知れぬといつて、苦しい中からそれだけは襤褸かくしに残して置いたのが、今度郷里へ飾る錦のかはりになるとは思はなかつた。彼女はそれを行李の一番上に藏ひながら、「あゝこの羽織ももう再び私の手に縫ひ返へすことも手に觸れることもなくなる。これが最後か。」

と思ふと、玉のやうな熱い涙がぼた／＼とその羽織の袖に降りかゝつた。お富はその涙を押包むやうに急いで拭いた。そして病人はと、夫の方をそつと振顧つてみると、病夫はもう萬事を諦

めてゐるのか、餘り口數もきかないで、彼女がいつまでも、こた／＼してゐるのを怠儀さうに見て、

「いゝ加減にして早く休みなさい。明日朝が早いのでから、荷造りは村田がよくするだらう。」と云つたきり、電燈と反對の方へ顔を向けて眼をつむつてゐた。

お富は床の中へ入つても眠られなかつた。あと幾時間の後は病める人を看す／＼捨て、自分は東京へ歸つてゆくのだと思ふと、冷淡の自分の心が淺ましかつた。彼女は夫の達者な時から別れたい／＼と思つても、互に厭な思ひをして別れたり、腹立ちまぎれに飛び出したりして、のち／＼まで恨みを遺したりなどしたくはない。どうかして得心づくで心持ちよく別れたいと思つてゐて、今度たゞとう自分の望んでゐたとほりの、自然に別れねばならぬ時機が來て別れるのだけれど、こんなに苦しい思ひをするのだつたら、いつぞ喧嘩別れか、それとも死別れの方が對手が口を利かないだけ、ましであつたかも知れぬと思つた。

そして碌々眠らないで、もう四時前に彼女は、そうつと寢床を離れて帯を締めてゐると、病夫はふつと眼を覺まして、

「もう行くのか。」と、淋しさうにいつた。



お富はそれには答へないで、

「今朝は気分はどうですか。」と訊いてみた。

別に悪くもないと云つてゐた。彼女はやがてごたく支度をすまして、火鉢の傍に座わつて、病人の枕頭にある時計を手にとつて見ると、丁度四時になつてゐた。

「おぢいさん、それでは私もう出掛けますわ。」と、思ひ切つていつた。「そして、あなたもよく養生をして早く快くなつて下さい。あちらへ着いたらお手紙を下さい。また欲しい物でも有つたらいつて寄越して下さい、送ります。武之助さんや留さんによろしくいつて下さい。」

「お前もあまり達者な生れ付でもないんだから、大事にして患はぬやうに。そして一時も早く郷里へ歸んなさい。東京へ歸つたら主人や支配人や、外の皆さんによくいつてくれ。朝は冷えるから、風を引かぬやうに暖かくして行きなさい。」といつて、顔をそむけてしまつた。

お富は靜に立つて、コートを着てゐると、病夫は、やつと掛け聲しながら起き上らうとしてゐる。

「はどかりへでも行くのですか。」と訊いてみると、

「いや、村田が歸へらないから、せめて階下まで見送らうと思ふ。」といふ。

「可けません〜。」といひながら、彼女は病人を蒲團の上から抑へ付けるやうにして、「又階段を上つたり下りたりして、呼吸がはづんだら、どうします。どうぞ靜かに心を落ち着けて寝てゐて下さい。」と頼むやうにいつて、元のとほりに寝かした。

村田が少しも早く歸つてくれればよいにと、お富は戸外の足音ばかり氣にかけてゐたけれど、村田はまだ歸つて來なかつた。病人をひとり残して行くのは餘り薄情で、濟まないやうな心がして、暫らく起ちわづらふてゐたけれども、いつまで斯うしてゐても際限がないと思つて、

「あなた、村田さんが歸るまで獨りでゐても大丈夫ですか。」といつてみた。

すると、病人はうなづいてゐた。お富は、風の入らないやうに、掛け蒲團のまはりを抑へてやつて、

「それでは、私もう往きます。どうぞお大事に。」と、最後の言葉を殘して、やつと階下へおりた。當番の女中が、そんなに早く降りてきたお富を見て、

「あんたはん、まだ大分早うおますやろ。ちよつとお待ちやす、今俵屋さん呼びますさかい。」といふのを、お富は手を左右に振つて、



「いゝのです。荷物は之れだけですから。」と、バスケットを指し、そして、村田が今に歸つてくる筈だから、それまで病人によく氣を付けてやつて下さいと、それを繰返へし／＼頼んでおいてやつと戸外に立ち出でた。そして二三十歩ステーションの方へ歩んでくると、今まで堪えにこらえぬいてゐた涙が樋の口を切つたやうに、はら／＼と溢れでた。彼女はそれを拭かうともせず、涙に霞む眼を上げて、振り返つて病夫の寝てゐる向ふの表二階の方を見やつたまゝ、暫く其處へ釘付けにされたやうになつて凝乎と立つてゐた。

外は摩耶山風しの夜明けの風が身を切るやうに寒かつた。

黒梓の封筒が、何だか物をいつてゐるやうに状差しの中から此方を覗いて見てゐるのが、亡夫と同棲してゐて散々感じさせられたと同じやうな壓迫をお富に與へてゐるのである。(をばり)

(十年十二月七日)

## 旅 人



その晩は京都に泊つた。二度目の上京の途次京都に泊るのは私に最初の上京のときの思ひ出があつたからである。二年前のやつぱり九月の初め私は自家へ無断で、はじめて東京へ出てきたのであつた。その年の一月大阪の學校へ入るつもりで初めて大阪まで出てきて、四月までゐたことがあつたが、大阪から東への旅はその時が初めてであつた。その頃私の若い、當もない、夢のやうな空想にとゞ憧憬してゐた頭には東京といふ二字によつて云ひ表はされた土地が何とも譬へやうのない光榮に満ちた天國のやうに思ひ做されてゐたのであつた。人と生れた以上は、東京に行かねば全く生き効ひがないやうにさへも思はれたのであつた。——その時から二十三年後の今日でも私はさう思はぬこともないが——その正月私は折角父の快諾を得て大阪に出て來たが、病氣のために大阪を引揚げて國へ歸つてゆくとき、汽車の窓から、降りしきる冷い春雨に濡れしほれてゐる大阪の西郊につゞく茶畑や麥の緑などを、どんなにわびしい心持ちで眺めてゐたことであらう。私は到頭耐へ切れないで、その九月に東京にゆくことを決心したのであつた。

その頃都會好きの父は一人〇縣の田舎の家から十里ばかりも西に離れた〇市に出てきて、私と二人で、その春〇市のある家へ養子にいつた私のすぐ上の兄夫妻の別居してゐる家の一と間に起臥してゐた。十年ばかり前、四十をちよつと越した時分に三四日も人事不省の状態をつゞけてゐ



たやうな大患に罹つて以來父は年よりはいつも十歳ばかり若く見えてゐた。背の高い瘦せぎすなところは五人の兄弟の中で私が一番酷く似てゐることを、私が自分で段々年をとるにつけてさう感ずるのである。父の持病も脳神経衰弱と消化器病とにあつた。私はその父の遺傳を受けてゐるやうにおもふ。

私は一つ蚊帳に寝ながら、時々絶え入るやうに咳きをつゞける父に眼を覺まされながら、傷ましく瘦せ衰へた骸軀を横へてゐる、その骨立つた肩から腰の方を凝乎と見やつて、自分の無斷の上京の決心を幾度鈍らされたか知れなかつた。その冬の初途々父は亡くなつたのである。それゆゑ私は父の死に目には會はなかつた。

その初めて上京する時私は動もすれば後髪を引かれるやうな心地のするのを努めて我れと心を勵ましつゝ、速くの東京の空を志して汽車の旅をつゞけたのであつた。今ではすこし遠い隣家へでも行くつもりで東京を夜の九時に立つて汽車の中を自分の書齋にでもゐるやうな氣輕い心地で一夜を過し翌日の午前にはもう京都の土を踏んでゐる私も、二十三年前の私には中國の市から東京まで二百里の里程がどんなに遠く思はれたか知れない。勿論その頃の私の空想に描かれた東京までの行程は、單に汽車の一室に座してゐて簡単に到達せられるといふより以上に、遙に幾多の

聯想や追憶に富んだものであつた。幼い頃から他の何の課目よりも好きであつた地理歴史を讀んで、早くから思ひ望んでゐた大きな川や、名高い山や、有名な史蹟や、乃至稗史小説の類を讀んで知つてゐた興味あるローマンズの跡などが、行く路に満ちみちてゐるのであつた。私はそのいかなる山河や史蹟をも見落すまいと思つて車窓に顔を面して、どんな物に對しても新鮮な興味を刺戟されるやうな生々とした眼と胸とを開いてゐた。そして昔の武者修行や仇討ちを志す者などが遙々の旅路を道なき山に分け入つたり、降りつゞく霖雨に渡船の途絶えた大河を裸體で遊び渡つたり、幾多の艱難に遭遇しながら倍々意志を強うして城下から城下へと知らぬ國々を彷徨ひ、武を練り智を磨き、最後に首尾よく父の驪を討つて多年の鬱憤を晴らすといふ様な、稚い物語に書き綴られた傳奇小説によつて形造られてゐた私の空想は、宛がら廣重の道中圖繪に見るやうな暢閑な、遙けき旅を行きつゝあるかのやうに私の前途をさまざまに彩色つて見せたのであつた。それのみならず、さういふ遠國への初めての旅行を、たとひ汽車に乗つてとはいひながら、一氣に直行するには種々な不安があつた。それで第一日の晩に京都に泊ることにしたのであつた。

その時汽車の中で口をきゝ合つた二人づれの學生があつた。どちらもその時十九の私よりは年長らしく、一人は熊本あたりの高等中學を卒業して初めて東京の工科大学にゆくところ、一人は



稍年少で東京の第一高等中學校に入學して、いづれも楽しい新學期の始まる前に上京するところであつた。彼等は廣島縣人で中學の同窓であるらしかつた。私は、彼等の殆ど成功の第一階段に足を踏みかけてゐるに反して、自分の前途の尙ほ望洋の歎に堪へざることを思はずにはゐられなかつた。高等中學生の方は光榮に輝いたやうな、小豆色の鉢巻を飾つた縁の廣い麥藁帽子の正面に、一高の徽章たる金色の三つ柏葉を着けてゐた。光明に輝いたやうな彼等は、二人で希望に満ちてゐるかのやうに楽しさうに談笑しながら車窓の無恥を忘れてゐるかの如く見えた。私はその隣席に腰掛けながら、彼等の現在の學歴を知れば知るほど心が暗く沈んでゆくやうであつた。そしてこれから東京への車行についての心得ぬことなどを、種々私の方から口を切つて訊ねたりなどした。さういふ事から、二人も京都に一泊する豫定であるといふので、私も誘はれるまゝに七條停車場前のとある旅人宿に入つて一緒に泊つた。そしてその翌朝は彼等が早目に起きて一番の汽車に乗るのを、私はわざと一と汽車遅れて出立した。彼等は立入つて深切でもなかつたが、決して深切ではなかつたけれど、私は何となく第二日もまた彼等と一緒に車行をつゞけることを自分の方から遠慮したのであつた。その頃は今のやうに急行列車などはもとよりなく、車體もボギー式でない極めて舊式のものであつた。そして京都驛なども今のやうに改築されない時分で、

その時その二人の學生と泊るところを相談しながら、停車場前のとある待合茶屋に入つて腰を掛けて少時休息したことがある、その茶屋には瘦形の、色の蒼白い細長い顔の娘とも妻君ともつかぬやうな女がゐたのがいつまでも私の記憶に残つて、その後もどうかして京都に下車した時にはよくその茶屋に入つて休息した。が、今は取拂はれて、蒼白い顔をした女はどこにいつたか分らなくなつた。

最初の出京のときの、さういふ追憶があつたのと、一つは折から九月初旬の秋雨がもう一週間ばかりも降りつゞいてゐたので、或は汽車が不通になるやうな場合がありはせぬかと思つて、郷里の停車場を立つとき京都までの乗車券を求めて、ともかくもそこで下車して一昨年九月に二人づれの學生と同宿した宿屋を覚えてゐたので、そこに泊つたのであつた。その宿はどんな宿であつたか、その時どんな女中が給仕をしてくれたか、また自分がどういふ心持ちを抱いて一人旅寢の夢を結んだか、今となつてはすこしも覚えてゐないが、たゞ一昨年年初冬に父を失つたところへ、丁度その一週忌の過ぎた頃から二番目の兄が急性な肺炎を患つて今年の正月の五日の日に廿九で天逝した。それが母には父に先立たれたよりも強い打撃であつた。それゆゑ母は病身な私を再び遠くへ遣ることを内心甚だ好まなかつた。けれども私は自身の將來の志望の爲には現在の母



の寂寥な心持くらの犠牲にしなければならぬと決心したのであつた。さうして母にはいろいろ力付けるやうなことをいつて慰めたり、詫びたりしながら、私は強忍な心地で立つて来たのである。今朝佗しい秋雨のしとくと降る中を出るとき、別れ際に強く眼に残つた母の心細さうな面影が、汽車に乗つて京都まで来ても、何時迄も眼の先に見えてゐた。多分その母の寂しい顔を思ひ描き乍ら冷い夢に入つたことであつたとおもふ。

翌朝眼を覺ますと、雨はやつぱり降つてゐる。宿の話では、どうやら木曾川が汎濫して東海道は不通になつたらしい。けれども關西線はまだ通じてゐるといふことだ。ぢや兎も角も草津までいつて、そこから關西線に乗り換へ伊勢路を経て名古屋へ出てゆかう。かう思案して朝餉を済ますと、早速宿を立ち出で、停車場に入つていつた。すると、驛内は前路を斷られた旅客で一杯になつて、大きな手荷物などを持って餘しながら途方に暮れてゐるやうな旅人が三等待合室にぎつしり詰つてゐた。そして旅客の眼に着きやすいところへに掲示の紙が張つてあつて、木曾川揖斐川出水のため東海道線不通。關西線は名古屋まで通ず。といふやうなことが書いてある。それで私は其順路を取ることにして三等切符の賣口の前にいつて立つた。その時の私には一つは、さうして出水の爲に阻止せられた旅路を種々に工夫して、どうかして東京まで行き着くといふことにも少

からぬ興味があつた。で、多勢列をつくつて警官に立番をせられながら一人づゝ順次に出札口の方に練つてゆきながら自分の順番が来るのを待つてゐた。と、私はすぐ耳の傍で出し抜けに何か言葉をかけられたのでそちらを振顧ると、私のすぐ背後に附着いたやうにして五十あまりの在所有者らしい老婦が立つてゐた。そして、

「あんたはんは何處までおいきやすのどすか。」と、優しい近江言葉で丁寧に問ひかけた。

「私は東京へ行くのですが、今は草津までいつて、そこから名古屋の方へゆくつもりです。」と、私は委しくいつて聞かせた。

「さうですか。えらい遠いところへおいきやすのどすなあ。私はなあ、ぢきその江州の八幡の在の者として、家は種油を製造してますのや。そやつて私の内はちよいとも困ることはあらしまへんのやけど、たつたひとりの息子が、あんたはん今年丁度検査どしたに、えゝ具合に籤が免がれた思つてましたら、背にえらい大けな癩ができましたなあ、ほて京の病院へ二度も入院さしました、えゝ先生にかゝつて手術にも手を盡しましたけど、遂々あんたはん七日ほど前に京の病院で死にまして、此方で火葬にして内に連れていんで、お葬式ももうすましましたのやけど、またその遺骨をこつちの智恵院さんへ納めるので昨日私一人で京へ出てきましてお寺はんへもまゐつた



り、えらうお世話になりましたさかい、病院へもいて先生にお禮をいふたり、やつとそれで用事が済みましたによつて、これから内へ往ぬとことすのやけど、一人息子に長いこと思はれましたので、私もきつうきつう胸を痛めましたさかい、えらい耳が遠うなりまして、こして汽車に乗るにも不具どすよつて私一人でえらい難儀してますとことす。あんたはんお願ひどすさかい、どつちやへいたらよろしいか、私の乗る汽車をどうぞ云うて聞かしてくれやすお願ひいたします。」

老婦はおろ／＼聲で問はず語りにそんなこと話しかけた。

「あ、さうですか。それはお氣の毒なことです。八幡の方なら私も草津まで行くのですから、私と一緒に乗りませう。」

といつて慰さめてやると、彼女は安心したやうにいたく喜んで、

「どうぞお頼んまをします。年取つて一人息子に死なれまして、私の連合もなあ、も、えらう力を落してはりますのが氣の毒としてなあ。温順しいなあ、ほん、え、息子どしたに思ふてよう忘られしまへん。あんたはんがその息子によう似たはります。こない深切に云うてもらはますと、私あんたはんが死んだ息子のやうにおもはれます。私んところ八幡在の油屋どすさかい、さういうてきいとくれやすしたらよう分りますよつて、あつちやの方へお越しやしたら、どうぞ必ずお寄りや

しとくれやす。私んところほん安氣に暮して居りますものどすさかい、ちよいとも遠慮せんとも来てくれやす。あんたはん、もうあんまり遠い處に行かんとおきやす。」

老婦はまたさういつて、どうかすると此のまゝ私と一緒に自分の家まで来てくれとでもいひたげな口振りになつた。私も彼女の息子と同じやうに此の春徴兵検査だつたのである。私は老いて一人子に死なれた哀れな彼女の心の迷ひはよく察することができたのであつた。五人の男女の一人に死なれた私の母の悲みを見ても親の心はよく解つてゐるのに、況して一人息子を失うた老婦の落膽は察するに餘りある。私の村で昔大庄屋を勤めてゐたある舊家の主人は、その一人の男子を東京の慶應義塾に入れておいたが、肺病で房州の海岸に客死した。その時父はわが兒の遺骨を携へて遙々郷里へ歸つて来る汽車の中で、自分の子に瓜二つの若い者を見た。古風ながら多少修養のある彼は、それを愛子を失うて心の顛倒した凡夫の眼の迷ひとは思ひ反したけれど、やつぱり見ればみるほど死んだ息子によく似てゐたといふ。さういふ話を私は知つてゐた。また昔人買ひに愛兒を浚はれたといふ「隅田川」の狂女の切ない心のうちなどをも聯想しながら、

「え、難有う。また機があつたら、あなたの處へたづねてゆきます。」といつて應答をしてゐた。やがて私の前に立つた列は一人づゝ減り私の順番がきたので出札口で切符を買ひとると、この



時私は初めてその出札口は關西線のみ出札口で、八ヶゆきの切符はそこで賣つてゐないことに気が付いたので、後につゞいてゐる老婦にそのことをいつて聞かせようとして、気が脱けたやうな顔をして呆然餘慮見をしながら立つてゐるその方を振顧りつゝ、對手はひどい聾なので私は大きな聲を出して口をきかうとしてゐると、そこに見張りをしたてゐた巡查は、「買うた者はさあ早う退くんだ。」といひながら、強く私の肩先を捉まへて押遣るやうにした。私は横から不意に小突かれたので跼々と半分のめり加減に出札口を退いてそのまま揉み合ふ群集の中に吸ひ込まれてしまつた。さうされながらも私は、老婦は氣の毒に長い間立ち盡して、發車間際になつて出札口を間違へてさぞ困るだらうと思つて、人を押分けて、そつちを眼で探したがもう出札口には知らぬ旅客が折り重つて詰め寄せてゐた。と、あちらのプラツトフォームの方ではもう氣立しい鈴の鳴る音がして、薄暗く降る雨に濕つた構内を、

「草津、龜山、名古屋ゆき。關西線ゆき。」と、高く呼んで歩く聲が響き渡つた。それで私は仕方なく老婦の方に心を残しながら、急いで關西線のプラツトフォームの方に出ていつた。

雨は朝から小休みもなく降りつゞいてゐる。聽て關西線の列車はその雨を衝いて京都を出立し

た。大谷の隧道を向にぬけて、近江の平野に出ると、さらぬだに水近い一望の水郷は、降りつゞく淫雨に琵琶湖に注ぐ野川は兩岸を没するばかりに濁水滔々と溢れて、今しも黄熟しかけてゐる稲田や街道の區別なく、到るところに大きな沼を湛えて、遙かの湖水の空をと眺めると、そちらは一面に薄墨を流したやうな密雲に閉されて、湖面には降りしきる雨の脚が朦朧として灰色に掻き曇つてゐる。背合せに横に仕切つた座席に膝を並べて腰掛けた三等車の旅客の顔色も、車窓を降り罩める佗しい飛沫とともに陰氣に曇つて、云ひ合はしたやうに等しく不安が漂うてゐた。それでも中には放棄つたやうに度胸を据ゑた連中もあつて、私の乗り合はした一仕切りの中に腰掛けた老人の旅客などは、二十年振りに偶然そこで出會したやうな奇談などもあつた。

やがて草津の驛に着車すると、案の定揖斐川が出水のために桑名より先は一と汽車前から不通になつてゐた。その頃のことであるから列車の往復度も今よりは少かつたし、何彼につけて今ほど交通の便利が發達してゐなかつたので、草津まで來ることは來ても、もうその日の内に京阪方面に歸る汽車は發しなかつた、それに京都の停車場で前路の開塞如何を見極める爲に殆ど半日以上も發車を躊躇してゐたので、草津まで來た時にはさうなくてさへ日の詰つてきてる時分なのに雨のために日の暮れるのも一層早く、進退に谷つた多勢の旅客はそのまま草津の宿に一夜を明



かすよりほかはなかつた。私はその一區劃に乗り込んでゐた六七人の旅客と一緒に誘はれるまゝに連れ立つて停車場近くのとある旅籠屋に上つた。其等の旅客は何れも安心の出来るやうな老人ばかりで、若い男は私一人であつた。

私はその草津の町には妙に去年も一泊したことがあつた。一昨年の初冬父が亡くなつてから歸國してすつと今まで國の〇市にゐた間に去年の夏十日ばかり伊勢路の方へ避暑旅行をしたことがあつて、その時草津に泊つた。その時ははじの郷里を立つた日に汽車の中で〇市で知つてゐる唐物屋の古い内儀と二十ばかりのその娘と二人に出會つた。すると彼等も私と同じやうに伊勢の大神宮に参拜してそれから附近を暫時見物して歩く豫定であつたので、自然伊勢まで同行することになつたのである。私はその時何となく姥餅で名のある古い草津の宿に泊つて見たかつたので、一と息に伊勢まで行けないこともなかつたのを、わざとそこに下車したのである。「すると、その婦人づれの二人も、

「えゝえゝ、もう老人の女旅のことでごさんすから、私共も御一緒に草津に泊ります。何も先を急がいでよろしいのですから。」

さういつて、彼等も私と一緒に停車場から三臺一俵を連ねて、その時は汽車沿ひの新開の街か

らすつと奥まつた昔の宿の、ある古風な旅籠屋へ乗りつけた。その頃は京阪あたりから汽車を利用する伊勢参宮の旅客はこの一筋の關西線に依るほかはなかつたし、昔の東海道の時分の見影もなく街筋はひどく寂れてゐたが、それでも東海道の官線——その頃は東海道のみが官線の鐵道であつた——との分岐點になつてゐるので此驛に降り降りする旅客は相應にあつた。

私達は古めかしい入口の土間からすぐ庭前の植込みを滑つて飛石づたひに、すつと奥の廊下つゞきの離座敷に案内せられた。壁も天井も黒く煤けて、随分古い頃からの建物らしかつたが、そのわりには小綺麗に掃降がゆきとゞいて、何となく居り心地の好い、二間に仕切つた座敷であつた。

「これは昔皆歩いてお伊勢詣りをしてゐた時分からある建物ぢやなあ。」唐物屋の婆さんはさういつて座敷を仰いで見廻はした。その晩夕飯も済んで、姥餅を取つて食べてみたりしながら婆さんと私とは按摩を呼んで、やがて老婦を中央に、私と娘とはその兩脇に三人枕を並べて一つ蚊帳に寝た。そのとき私には快い空想が湧かぬではなかつたが、資産家の娘にしてはあまり美しい方ではなかつたので、私の空想は縦に奔騰しなかつたのであつた。そしてその翌日も一緒に伊勢路の旅をつゞけて、宇治山田の旅館でまた一晚同室に寝て、その翌朝彼等は早く立つていつた。私は一



人残つてそれから二見浦の方にいつて一週間ばかり海水浴などをしてゐた。

それゆゑ私は去年のことなど思ひ浮べながら、旅籠屋の入口に立つて、その一人連れの旅客に向ひ、

「もつと先へゆくと好い宿がありますよ。」

といったが、老人連中は、

「一と晩のことでござりますよつて、明日また停車場に近い方が便利だすやる。」

と、互にうなづき合ひつゝ入口からすぐ端近にある段階をぞろ／＼二階に押上つた。二十年振りで見えず出會つたといふ老人の一人は、今大阪の土修町で大きく薬屋を営んでゐるといふ坊主頭をてら／＼光らした品の好い大入道の老爺さんであつた。彼は東京へ商用で行く途中であつた一人はそれよりもまだやゝ若い小造りな、これも上品な爺さんで伊勢の山田の人間であつた。彼等は互に奇遇を悦びつゝ、自分達の年老いて仕合せよき現在の身の上ばなしなどを、それからそれへと話し耽つてゐた。伊勢の老人は總領は陸軍の大尉で、次男は今士官學校に在學中であつた娘も姉の方は京都の高等女學校を卒業すると東京の兄の手許に遣つて、それから同僚のところへ婚嫁けて、もう孫が一人ある、妹の方を今度また京都の女學校に入れて、それを京都へ連れてい

つた今その歸途であつた。彼は皆出來の好い子供を持つた幸福を感じてゐるものゝ如く満足してその息子や娘達のことを語つた。初め長男が東京へ行つて軍人になりたいといふから、そんならゆけと云つて出して遣ることにしたが、學資などもさう餘分には仕送らなかつたけれど彼は節約して螢雪の苦學をつゞけ、到頭立派に軍人になつた。

「錢は少いくらゐに遣るのがやつぱり當人の爲になります。」

そんなことを云つて、彼は私の方を向ひて、

「あんたは東京はどちらの學校にお入りやす？」などと訊ねた。

私はその時彼の問ひに對して明確に答へるほどの準備を實はまだ自分でも持つてゐなかつたのである。一昨年をはじめて上京する時にはそれで少年の頃からの私の空想であつた一つの理想を抱いてゐた。それは慶應義塾に入つて、そこで修學した明治の先覺者が揚言したやうに、文明の木鐸たる立派な新聞記者になるといふのがそれであつた。ところが去年一年田舎に引込んでゐる間に私の眞純なりし稚い理想はいつしか弛緩を生じてやゝ道樂に耽けるやうな傾向になり、純文學に對して今まで覺えなかつた興味が強くなり目ざめてきたやうになつてゐた。私は、そんな軟文學の末技に可惜男子の一生を捧げてしまふことを潔しとしなかつたが、私の胸の底には抑へ難い文學



慾が醜僻しつゝあることを否むわけにゆかなかつた。私は一面それを擯斥しながら、盗むやうな心持で尙ほそれを斷念することができなかつたのである。

「私は、まだ何をするか分りません。」口ごもりつゝ、さういつて答へたが、その老人はさだめし人の子ながら不安を感じたことであつたらう。

「まだお若うごわすよつて、あんた方はこれからだすわい。精出しておやり。」

大阪の老人はさういつて笑顔で私の方を見た。

そのほかには東京の魚河岸だといふ六十あまりの爺さんと、そのおかみさん、その連れの四十五六の相撲のやうに肥つたおかみさんの三人。彼等は京大阪を見物した歸途であつた。

「ほて、あんたは、何ぼにおなりやす？」伊勢の老人は見上げるやうにして、また大阪の老爺さんに問ひかけた。

「もうあきまへんわ。」大阪の老爺さんは齒のせいで音の洩れるやうな含み聲で大きく笑ひながら

「丁度です。」

「七十ですか。」

「くす。」

「もう七十におなりか。壯健なもんやなあ。この方若い時はなかく／＼いろ／＼なことをした人だひせ。」

伊勢の老人は東京の旅客に向つてさういつた。

「左様でございませうねえ。」色の淺黒い顔の骨立つたやうな魚河岸のおかみさんは、伊勢や大阪の言葉を聞いてゐた耳にはひどく角張つたやうに思はれる強い語音で調子を合はした。

「たんと悪いこともしてきました。」大阪の爺さんはさういつてまた大きく笑つた。

「悪いことをいうたて、あんたのは賭博ぐらゐなものや、だれでも一度はする道樂や。そやけど一と頃は仕方のない極道やつたなあ、私、あんたはもうあれきりになる人かと思つた。それが年をお取りやしてそないにお仕合せで何より結構なことです。」

「はゝゝ、酒ももう二十年止めてます。」

「ほう、酒ももうあがらんか。そらえらう飲んだもんやがなあ。」

「盛んな時には、そら飲んましたで。三升ぐらゐ飲まんと、ちよいとも飲んだやうにこわへなんだもんだす。」大阪の老人はさういつて、四邊の人を見まはしながらまた人の好ささうに笑つた。

「さうでせうよ、何しろ體軀が好いから。」



背の低い小肥りのした魚河岸の老人はさういつて調子を合はせた。

「ほて、財産もたんとお出来やしたやろ。」伊勢の老人は打解けてそんなことまで訊ねてゐた。

「はい、借家を二十軒ばかりと河内に田地を二十町ほど持つとります。」爺さんは謙遜したやうな言葉でさういつた。

「それだけ持つてはればえらい身上や。」

二人の老人の物語に夜は追々更けていつたが雨の音はいつまで経つても止まなかつた。座敷は何處も満員で、宿の者はいづれも夜明しであつた。やがて國々の者の寄合つた吾々六人は十疊の座敷に枕を並べて眠に就いた。そしてやゝ暫らく一と寝入りしたと思ふころ私達は氣立たましい半鐘の鳴り響く音によつて眼を覺まされた。階下では俄かに再び騒ぐ物音がしてゐる。

「あ、火事！ おかみさん火事です。」

私と頭を向ひ合せて寝てゐた相撲のやうに肥つた魚河岸のおかみさんの寢聲が聞えた。

「あゝ、火事だ。」魚河岸の爺さんの聲がつゞいて出た。

「火事かな。火事ではないやろ。」此度は伊勢の老人の聲が聞えた。

そして吾々はいひ合はしたやうに起き上つて、二階の雨戸を明けて戸外を見渡した。と、外は

漆を流したやうな眞黒暗で内から火影の射してゐるところだけ末廣がりに茫乎として細引を下げたやうな雨の脚が微白く光つて見える。

「あ、あれぢや、火事でなうて水。」

と伊勢の老人の云ふ聲につれて向の方に眼を放つと、夜目に三四町ばかりも隔つた、今吾々が立つてゐる二階よりは遙に高い一帯の堤防の上に暗夜を照す松明の火光が星の如く連なつて、赫と雨の空を焦してゐる。その火明の中を黒い人影が盛に動いてゐる。半鐘の音は倍々物凄く鳴り響いた。

「大丈夫でござりませう。」大阪の老人はさう云つた。

「堤が切れるやうなことはありませんまい。」

伊勢の老人もさういつて、吾々はまた寢床に入つた。老人連はきつとそのまま眼を覺ましてゐたかも知れぬが、私は若い最中のこととて、床に入ると前後も知らずまた深い睡に落ちてしまつた。

翌日はそれ等の人々がどういふ方針で立つていつたか、それは今記憶にないが伊勢に歸る老人



は正午ごろの汽車で一と足先きに別れて立つていった。大阪の老爺さんは

「私一遍出直しますわ。」

と云つて、これもわけなく大阪に戻ることにした。私も大阪まで引返へすことにした。或は神戸から汽船に乗つて横濱まで行かうと考へたのである。ひとり魚河岸の連中は途方に暮れながらそのまま草津に居残つて、もう少し様子を見ることにしたのであつた。

そして雨はまだ霽れる模様はなかつた。どうかすると少しの間明るくなつて好い顔を見せたと思つてゐると、忽ちまた驟雨のやうな雨が篠を突く如く降つて來たりした。大阪の方へ行く汽車は漸うやう日の暮れる時分になつて一と汽車仕立られた。空はまた被かぶせるやうに暗く曇つて雨はびしよびしよ降りつゞいてゐた。瀬田川の鐵橋は昨日よりはまた遙に水嵩の増した濁水が物凄しい勢ひで今にも橋梁に打つからうとするところであつた。段々大津、京都と歸つて來ると停車場ごとに聞く噂は倍々通路の不安ばかりで、大阪も安治川の下流は大變な出水で梅田の停車場あたりまでも水が乗つてゐるといふやうなことも云つてゐる。神戸と大阪との間はもう午前の中に交通が止つて開通の見込は立たなくなつた。吹田あたりまでやつてくると汽車はもう危険に瀕してゐる、大きな鐵橋の上などを徐行して渡つていつた。やがて梅田驛に着車すると、平常ならば

旅客の雑沓してゐる、さしもの停車場はまだ宵の口といふのに寂然と濕つて旅人らしい人影さへもなく、たゞ緊張したやうに驛員がところ／＼立つてゐるばかりである。改札口を出てくると、停車場前の廣場にも人影絶えて、いつもはそこに群つてゐる俤さへ一臺も見つからぬ。雨の落ちるのだけはつい先刻から止んでゐるが、ところ／＼に滲えた水溜りや濡れた地べたが、そこらに並んだ休み茶屋や物賣り屋などから射してくる火影を明るく照り返へしてゐる。その中を物々しく身を固めた人夫などが蒿口などの得物を持つてびちやびちや渡つてゐる。

私は一昨年春の時つたことのある江戸堀の方の下宿屋までゆかうといふ考で柳行李と小さい鞆とを手荷物取扱所にあづけたまゝ俤をさがして街の方にゆかうとすると、水が脛まで没した。すると丁度そこに老人の車が一臺ゐたのでそれを呼んで手荷物を受取つて江戸堀までゆかうとしたが、

「とてもゆけしめへん、渡邊橋が落ちるいうてえらい騒動だす。」

「なに、渡邊橋が落ちる。」私は一昨年春よくその橋の下あたりで友達とボートを漕いでゐたのであの大きな鐵橋が危険を告ぐるほどの騒ぎかと驚きながら、

「ぢや、どこでも好いから、宿屋へ案内してくれ。」



「もう何處も客を断つて泊めへんが。」

といひながら彼は轆棒を取り上げて水の中をびちゃ／＼と挽いていつた。するとものゝ一町も來たと思ふところで、店先へ大きな提燈を吊した、とある小さい旅人宿の前に来た、内のものとか掛け合つてゐたが、

「よろしうおます。こゝで泊めますよつて。」と云つて、俵を下りよといつた。私はもう宿屋の贅澤など云つてゐる場合でないので俵を下りてその店に入つていつた。

「どうぞお上り。こつちやへ。」といつて、十七八の、派手な手拭地を着た見るから大阪者らしい華奢な風俗の娘が先に立つて、すぐ店の上の二階に案内した。

「もう座敷が一ばいだすよつて、どうぞこゝで辛抱しておくれやす。」

さういつて、もう一人相容のゐる。うつかりすると天井に頭を打つつけるやうな薄暗い部屋に導き入れた。驚いたのは相容は女である。年の頃は二十七八、頭髪を銀杏返しにした、色の淺黒い瘦せて貧相な、あまり美人といふ方ではない。廣島縣の者であるが京都あたへりへいつてゐて、歸國の途中を阪神間が不通になつたために此處に立ち往生してゐるのであつた。私達は互に旅に行き惑うてゐる話をしてゐるところへ、やがて先刻の十七八の別嬪の娘が膳を運んできた。廣島の

女の顔を見てゐたのではあまり御飯が甘さうではなかつたが、その大阪の女の物腰、顔容、紅味を帯びた白い皮膚の色、言葉つきの氣さくで、あどけ無いところなどが、その頃まで都會の女などをしみ／＼見たことのなかつた眼に私の興味をそゝつて、その女に給仕をしてもらひながら、佗しい旅籠屋の飯をも空腹に心地よく食べた、

「宿を断わられて随分困つた客があるだらうなあ。」

「えらうおまんね、内でもあんたはんお越しになる、ちよつと前三人づれのお客はんお断りいふたんだつせ、ほすると、どうしても泊めいいうて、それを断つたら、仕舞には悪口たら／＼云うていききました。」

娘はそんなことを話しながら、急しさに亂れて房々となつた銀杏返しの鬢の後れ毛を、黒い塗り盆を膝に支へてゐた白い、すんなりとした指でまたしては搔き上げた。

その晩も私は廣島の女と狭い部屋に床を並べて寝た。(六年十月廿六日)



老  
若



祖母の三十三年、父の二十七年、次兄の二十三年を延期したり繰り上げたりして此處で一度に弔ふといふ案内があつたので、私は暫くぶりで四月の末に京都から郷里の方に歸省した。もう二十幾年といふもの私ひとり郷里とは遠く懸けはなれた東京の方に暮してゐるので、可なり親戚なども多く大抵近いところに生活してゐるので、平常の往來なども頻繁で、親戚相互、身内の者の噂や、生死、嫁娶その他人の身の上について起つて來るいろ／＼な出來事などが彼等の間には一つの世界を成り立たしてゐるのであるが、私ひとりにはさういふ世界から自然遠ざかつてゐたけれども私に最も肉縁の深い其等の過去の人達の年忌には、平生、段々遠くへ過ぎてゆく歳月とゞもに忘れがちになつてゐる其等の人々の記憶をせめてさういふ機會に思ひいで、追憶にふけてみたいのが私の志であつた。それゆゑ東京にゐても、近年はさういふ年忌の際にはなるべく歸省するやうにしてゐるのである。それに一つは、母が八十に近い老齡なので時々行つてみたいといふやうな都合から京都にゐると、遙々東京から出掛けてゆくよりも時間が十二時間位は短縮されてゐるわけである。

私は長閑な春の播磨路の野山を五時間ばかり汽車に揺られて、午過にはもう播磨と備前との國境の船阪山のトンネルを回りに通過してゐた。そしてトンネルを出はづれると近年煉瓦製造の工



業地として繁昌してゐる三石驛で、三石の一部落に姉の家があつて、高い鐵道の下にその家が見えてゐる。私は毎時汽車の窓からその姉の家の裏側を見下して往來するのである。その日も此處の家からも誰れかと法事にゆくであらうと思ひながら見てゐたが、誰の影も見えなかつた。姉とは二十日ばかり前娘と婿の夫婦と一緒に京阪から伊勢路の方を見物し、その歸途に京都の宿に泊つてゐる時に私は會つた。昨年春も丁度その頃やつぱり曾祖父の五十年忌があつて東京から歸つていつた時には姉も來てゐて會つてからまる二年ぶりで會つたのであつた。京都ではその時三人づれで私の宿に訪ねて來てくれたのだが、生憎私がそこらへ出てゐて留守だつたので、その夜私は姪の夫が紙切れに書置きをしておいたのをたよりに七條の停車場近くの旅人宿に訪ねていつて三人に面會した。女連は丁度夕飯の箸をおいたところで、酒の好きな姪の夫がまだ膳の上の物をつまきながら酒盃を離さずにゐる處であつた。私がまだ夕飯前だつたので姪の夫は女中を呼んで客膳を命じて序に酒の熱いのを持つて來させたりして好い氣嫌になつてゐた。彼はもう私と同じくらいの年輩で相當に教養のある氣の好い男であつたが、肥料の卸しなどを近頃可なり手びろくやつてゐるらしかつた。

「エスさん此の頃大變儲かるといふぢやないか。」私は盃を返しなから戲談のやうにいつた。

「え、儲かりもしませんが、商買もこれでなか／＼面白いもんです。」といひながら、彼は好い氣嫌で手酌をしてひとりで飲んでゐた。

「かうして二人で方々を遊んで歩くところを見ると、私には何にも分らんけれど、おほかた儲かるのぢやらうと思はれる。」

姉は傍からさういつてゐた。姪の身體が虚弱なせいとか、彼等には子供がなかつた。

話は此度見物して歩いた處の事から、それからそれへと擴がつていつた。大阪にゐるエスの從弟の處を訪ねて一緒に浪花座を観たこと、其日返へりに從弟連夫婦多勢で有馬にいつて温泉に入つたこと、大阪に二た晩泊つて、翌日電車で奈良にいつてそれからすぐ伊勢參宮をして昨夜は大津に泊つて三井寺や石山寺を見てまはつて今日早く京都に來たのであつた。

そんな陽氣な話が一通り盡きると姉はふつと私の方を見て、

「それよりワイが死んでなあ。」

と話しかけた。

「あゝさう。ワイが死んだ。」私もすぐ姉の心を察して、同情のある聲を發した。

ひとりワイばかりではない、姉の家では近年度々死ぬ者がつゞいてゐた。その時も姉は十年の



間に八人とか九人とか死んだといふはなしをしてゐた。舅姑の祖父母は順序であつたが長男の嫁次男の嫁、長男の子が一人、次男の子が二人、自身の連合ひが四五年前に五十六で死に、去年の二月にまた三男のワイが二十九で亡くなつた。その中で長男の嫁と姉の夫と三男のワイとはいづれも明かに肺結核であつた。血統からいつてもさういふ病氣は出来さうもないやうに思はれてゐたが、いつとなく忌むべき病魔に姉の一家は襲はれてゐた。

とり分け三男のワイは中學校時分から、なか／＼秀才で、どこか性質に野太いところもあつたが學校はよく出来る方であつた。中學校を卒業してから東京に出て外國語學校のマレイ語科を修めた。私は彼の學問の傾向から判斷して大學の法科をでもやることを勧めたのであつたが自分で志を立てゝゐて南洋にゆくのだといつて、その方をやつたのだ。しばらく私の家にもゐたことがあつたが、後には外へ下宿して、學校を卒業してから神戸の方のある汽船會社に勤めて濠洲の方へ二度ばかり航海したといつてゐた。尤も私は今のやうに、その頃も一年ばかり京阪の方へ滞在してゐたので、彼が外國語學校を卒業する時分から毎時かけ違つて逢はなかつた。死ぬまで逢はなかつた。が、噂だけは偶に郷里へ歸つた時などに聞いてゐた。どういふ事情であつたか南洋へは二度航海したきりで會社の方は止めて主に大阪あたりにゐたらしかつた。その頃まだ生きてゐた

彼の父親や兄などが心配して折角學校を卒業して校長の周旋で就職した地位を自から棄てゝ大阪あたりに轉々してゐるのをやかましくいつてゐるらしいことも私は耳にしてゐた。學生々活からつゝいさういふ俸給生活に入つていつた經驗などのない田舎の父親などの考ばかりでは分らないから私も都合よく會へる機會があつたら一度會つて事情を訊いてみたいと思つてゐるうちに父親はさういふ病で死んだ。その頃ワイ自身からも彼の兄からも手紙を寄越して何か好い就職口はないだらうかといつて、私のところに頼んでよこしてゐたこともあつたりして、會つて委しい事情を訊いてみねば分らないが、南洋は面白かつたぢやないか、最初から自分で志を立てゝその通りにいつた、それを止すやうぢや私の方からどういふことを希望に抱いてゐるのだから判斷しかねる。支那へでも朝鮮でもアメリカへでもゆく處はあるぢやないかといふやうな返事をやつておいた。

それからまた二年ばかり立つて一昨年春歸省した時にワイはやつぱり大阪にゐるが身體が良くない、そしてそれは彼の父の病氣を傳へてゐるらしいやうな様子であつた。それを聞いた時ワイがそんな病になつてゐるかと思つて私は驚いたが、彼の父も身體は本來虚弱な方ではなかつたのだが、醫者は晩年殊に放縱になつてゐた深酒の爲に健康を害したのが原因であるといつてゐた



ワイも體格などは兄弟中で最も屈強に出来てゐた。南洋の方に行つたが事志と相違して、さうして失意の感を抱いて父兄の意に背き大阪あたりにゐて下宿屋に不如意な生活を送つてゐるワイが遂に父の病を繼承いでそんな貧乏くじを引いたのも、何だかそこに悪い運命のまはり合せがあるやうに、私には思はれぬでもなかつた。その時私の歸省を聞いて私を訪ねて話しに來たワイの小學校時代の友達である隣村のある豪農の息子は、丁度ワイが東京の私の家にゐる時分にその息子は早稲田の文學科に入つてゐて、やつぱり私の家に寄寓してゐたが、丁度ワイが私の家を出てゆく時分に、その息子は家の事情で學校を止めて歸郷した。その時私を訪ねて來た息子はワイの話をして、

「ワイ君が南洋の航海を止められた事情も成程僕にお話しになつたので見ると、よく解るのですワイ君のお家では皆さんが、随分誤解といつてはどうかと思ひますが——よくワイ君の心持ちがお分りにならんから、一圖にワイ君がいけないやうに思つてお出になるらしいのですが、僕に語られた處によると、全く舟乗りなどには仕方のない、云はゞ破落漢のやうな者が多いんですからな。きいてみると、ワイ君などのやうに修養といふやうな人生問題などを考へてゐる人にはそんな仲間入りは出来ませんよ。」

その息子は、そんなことを私に向つて話した。さういへばワイはやつぱり文學などが好きであつた處を見ると、南洋などに出かけて男性的な企業などに従事するには適しく出来てゐたのであつたかも知れぬ。大阪から一度寄越した手紙には大阪にゐて、そして(叔父)私の様に文學がやりたいといつてセンチメンタルな事を書いてゐた。私はさういふ事をいふ親戚の青年(或は他人の子弟でも)の文學志望に對しては何時も反對を表してゐた。それは生活の危険を思つたからでもあつた。けれどもワイはやつぱり文學——廣い意味でいふ——にゆく人間であつたか、知れなかつた。彼は自分の心で自分の身體を食つた傾があつたらしい。

すると、去年の二月の初私は箱根にいつてゐる間に郷里から來た手紙にワイがたうとう須磨の病院で死んだ。二十九歳であつたといふことを書いてあつた。その時可哀さうなことをした、近いうち歸省するつもりであるから、しばらくゆかぬ姉の家をたづねて、度々の不幸の見舞をいはうと思つてゐたのだが、歸省するのが段々遅れて、歸つたのは夏の初めの六月であつた。その時は遂に會はず京都まで戻つてしまつたから、ずつと姉には會はなかつたのである。多勢の死んだ者の中で、ワイは彼女にとつて最も忘れられない悲しい追憶となつてゐるのであつた。それは無理のないことであつた。彼女はワイが死んだ時のことをいひ出して、私に話してきかした。長男



に二度めにもらつた嫁などに氣がねがあるので、家ではいくらいひたくつても堪えてゐるワイの追憶を彼女はそこで遠慮をせず繰返へすことが出来た。彼女は、長男に二度目の嫁を貰ふ時に三男のワイが頻りに懐しい家庭に歸つてみたかつたことや、臨終の場に肉身の者がだれも傍に附いてゐてやらなかつたといふやうなセンチメンタルな話を繰返へしてゐた。

長男の婚禮の時に歸つてみたいが、どうしようかといふ手紙を寄越した時に彼女は歸りたがつてゐる病身の息子を現在の自分の家に歸つて来るなといふことも云へず、歸つて來させたさは腹一ばいであるが、長男の心の内を量りかねて何といつてよいか分らなかつた。そして長男の心まかせに委ねた。長男も弟の心や母親の心の内を思つて無下に歸りたい心を拒むこともできなかつた。殊に先の嫁が同じ病氣で死んだ後なので二度目に迎へる嫁については特にさういふ思はしい聯想や不愉快な危惧から、すつかり別な新しい世界に入りたいのが母親やその子達の希望であつた。誰れの心も此度の再婚を回轉機として一家が幸福を招徠する新紀元を開かねばならぬといふことに存してゐた。長男の心もさうであつた。彼の母親の心もさうであつた。母子はワイの心に任せて歸郷を快諾するかどうかといふ點について胸を痛めて相談をした。

「私は、ワイが歸りたうてかへりたうてならぬのも知つてゐるし、さうかといつてエー（長男の

名)が私やワイに對して、歸すことはならぬとも思ひ切つてよいはず、その心の内を知つて見れば、歸さしてやつてくれとも私はよう云はず、ほんとうに腹を傷めた。」

姉はそんなことをいつて、センチメンタルな話をつゞけた。

私は黙つて聞きながら、なるほどと思つてゐた。

「そして遂にかへらなかつたのか。」

「それで私は、エイに、私はどちらでも好い。お前が歸るなといつてやつても、お前を怨まず、また歸れといつてやつて、かへつて來ても何とも云はぬ。そこはお前のかうと思ふやうに計らつておくれ、といつてエイの考にまかしてしまつた。エイも餘程その時はつらかつたらしいが、思案に餘つて居つたらしいが、委しい手紙を書いてやつたやうであつた。……たうどうそれで戻らなんだ。」姉はさういつた。

「さうか、可哀さうだが止むを得ぬ。どうもあの病氣に罹つたが最々當人の運の悪いのだと思つて遠慮をするよりほかにない。」私は定まれる家もなくして長い間旅の空に漂浪してゐる自分の身の事を考へ、そして私よりは十五年も年若くして夭逝したワイの薄命をも考へて見た。

「それにしては、この私は案外に長命をしてゐるねえ、幼い時から、とても遠くへ出掛けて不自



由な暮しをして生きてゆかれる人間ぢやないと思つてゐるのだが。」

「叔父さんの身體とワイの體とはまた違ふてをつた。」

酒で好い氣嫌になつてゐるエヌは傍から口を入れた。エヌはそんなことをいつたが、ワイは私などよりは遙かに強壯な體格の持主であつた。

「その代りエイも、ワイに手紙でもさう書いてやるし、ずつと悪うなつて私とエイと二人で須磨の病院へ見舞にいつた時にも、金はなんぼ入つても構はんから、その事はすこしも心配せんようにして養生をせねばならぬといふて、エイも金は何時も不足のないやうに送つてくれた。」

姉は、傍に訊いてゐる者に話すよりも、今まで何度も人にも話し又自分でも繰返へして思ひ浮べたことを、またおさらひして、じつと思つてみるために語るといふやうな調子でいつた。けれども私は、それを何度人に語らうとも、當分の間は、さういふ心持ちから全然忘れてしまふことの出来ぬのは無理もないことだと思つて黙つて訊いてゐた。

「須磨の病院へ入るのが、自分では厭でいやで爲様がなかつたのを、騙すやうに賺かして入らしたのぢやさうぢや。」

大阪にゐる間は、東京の母校の校長の周旋で其他のある大きな商會に附屬してゐる外國語學校

の教師をして小使ひとりをしてゐたのだが、それも病氣が重くなつてから、自分の健康にも障るし生徒の爲にもよくないといふので、その方は休職になつてゐたが南洋語を教へてゐたある金満家の息子がひどく同情して肉身の者も及ばぬ心配をしてゐた。遂々病院に入らしたのもその人間が切に勧めて入らしたのであつた。

「まだ大阪に居る時分に此の冬は鹿兒島の櫻島にゆくつもりだといふから、何處でもお前の好きな處へゆくがいといつて、エイも金はいくらでも送るからといつてやつて、いよくゆく時にはさういふから、その時金を送つてもらはうとワイから云ふて來てゐたのに、何時までたつても、ねつから金を送つてくれと云ふて來ぬと思つてゐると、須磨の病院へ入つてゐるのぢやつた。」

須磨の病院へ入つてからは次第に病勢は募る一方であつた。その時母親は兄と伴つてワイを見にいつた。けれども病人はまだなか／＼自分では死ぬるものとは思つてゐなかつた。それでも病氣のことはよく知つてゐて、兄にも母親にも自分から制して餘り傍に寄りつかせなかつた。病院に泊ることもさせなかつた。母親は病院を恐しいとは思はなかつたけれど、悴達のいふとほり病人の體や衣類にさはつたりすることを避けてゐた。彼女にはそれが何時までも追憶の種になつてゐた。宿に一晚泊つて翌日また見舞ふて、いよく歸るといふ時に「そんならもう歸る。大事に



しなさい、悪かつたらまた直き来る。何にも欲しい物はないか。」といつて、病室を出る時に最後の別れをいふと、病人は何にもほしいものはないといつてゐたが、いよ／＼病室を立ち去らうとして振顧つてみると、ワイは寢臺の上に這ひ伏つて聲を忍ばせて泣いてゐた。

彼女にはそれが今でもあり／＼と眼の底に膠着してゐるのであつた。そして十日ばかりして急に悪くなつたといふ電報が来て、此度行つた時にはもう死んでゐた。若い深切な看護婦は臨終の模様を委しく話してきかせながら、

「このとほり靜かに眼を瞑つておいでなさいませう。」

といひつゝ顔に被ふた白い布をとり除けてみせた。

「それでも私、どなたも御肉身の方がひとりもお出でになりませんので、ほんとに御病人がたよりなさうで傍についてゐてお氣の毒でございました。」

看護婦はさういつて、親や兄弟のあまりに思ひ分けのいゝのを薄情がるやうにも感心するやうにもいつた。家に健康である他の悴達の後々の事などを思つて、死ぬる者には可哀さうだと思ひながら、なるべく病人に接近せぬやうにしてゐた彼女の心では、その看護婦と、ワイが南洋語を教へてゐた金持の息子とで肉身に代るほどの深切を盡してくれたことが忘れなかつた。ワイの

臨終の際に傍に附いてゐたのはその二人きりであつた。

いよ／＼息が切れる時にワイは仰けに寝ながら、看護婦に

「僕はもう眼が見えなくなつた。」

と、いつたさうである。それから間もなく死んだ。

私はもう此の上姉の、ワイの臨終の模様や、東京にゐて外國語學校に通つてゐた時分の風貌などを、明歴と私に思ひ起さしめるやうなセンチメンタルな繰りごとを言はせたくなくなつた。

「そして明日は京都を一日見物する豫定なのか。」

新聞の夕刊を女中に持つて來させて、相場表などを見て歸國を急ぐやうな口調でゐたエヌに向つて、私は話頭を轉じた。

「えゝ歸れたら明日の午後の汽車でかへらうと思つてゐます。」

「ぢや、おねえさんだけ、どうだ。私のところへ來て泊つて一人残つて、もつとゆつくり京都を見物しては。去年からの約束ぢやないか。」去年も手紙の往復では京都から大阪奈良の方を案内したり、してもらつたりするやうな相談だけをしてゐて、遂に果たさなかつた。けれどもう歸途



の二等切符まで買つてゐるのを無駄にするのがつまらないといつて、明日の豫定は相談が纏らな  
いままゝで私はそれから暫く話して自分の宿に戻つてきた。翌日立ち寄るかとおもつてゐたけれど  
も寄らなかつたと思はれて、それつきり訪ねて来なかつた。

汽車はそれから一つ中間にあるステーションを通り越して私の村の中を突切り、その次の私  
の降りるステーションの少し手前まで来ると汽車の窓から長閑かな春光の一面に漲り渡つてゐる  
田圃の道を三人づれの女が歩いてゆくのが遠くに見えてゐた。眞赤な長襦袢の裾を端折つてゐる  
のが人どほりの少い田舎道に浮き立つて眼についた。いかにも春爛の野景色である。と、思つて  
私は見てゐた。

やがてステーションに着いて、その近くに門屋の店を出してゐるエヌの家に立ち寄ると、先日  
京都で會つた姪がひとりゐて、

「あ、おかへんなさい。今すぐ一と足先へオー市の連中が叔母さんとケイさんやエムさんの嫁さん  
をつれてエフへいつたばかりのところですよ。」

「あゝさうか。ぢや三人づれで此の先の田圃を歩いてゐたのがさうか。」

「えゝ、それ〜。」

「ぢや、それに追ひつく處まで俥で急がう。」さういつて、私は店前に待たして置いた俥に飛び乗  
つた。そこからエフといふ私の村までは一里ばかりの道であつた。

オー市の連中といふのは、十二三年前にアメリカにいつてゐて急死して果てた私の兄の遺族で  
あつた。その時十二を頭に三人あつた男ばかりの子が今は成人して總領は去年の秋妻を娶り、次  
男はそれから一と月おくれで、親類つゞきの家へ養子にもらはれた。その若い息子の嫁達をつれ  
て姑の母親がエフの村へゆくのであつた。私は先刻汽車の窓から見た春光の下をゆく華美な日傘  
を翳した赤い長襦袢の連中が私の甥達の若い妻であつたことを思つてゐると聯想は必然に十二年  
前の秋三十八歳を一期としてアメリカの果てに客死した兄の事に及ばざるを得なかつた。冷かな  
運命の手はまるで暗討ちを食はずやうに人の親、人の夫を一夜の内、一時間の内に死の世界に強  
奪してゆくが、その半面に於て、自然はまた強い無意識の力を以つて若い者を育て、ゆく。十二  
年は、過ぎた後から振顧つてみると思つたより早く経つた。先刻汽車の窓から見えた眞赤な長襦  
袢が十二年前にアメリカで、人の知らぬ間に急死して見出された父親の遺児達の若い嫁であると  
いふのが私には夢のやうに思はれた。そして私は車夫に命じて春光の漲つた野道を彼等に追ひ着



くべく駆けさした。私は車の上に腰をかけて軟かい春の風に吹かれながら、何となく胸の迫るやうな心持ちがして熱い涙が流れてきた。それは早く死んだ者に對する氣の毒の感情であつた。それは清い涙であつた。やがてステーションにつづく村落を通り越して、十町ばかりいつた時分に向うの村はづれを往く其等の女づれに追ひついた。

「おうい！」と聲を掛けて呼びとめた。

赤い長襦袢と白縮緬の長襦袢の三人づれの女は後を振顧つて車から降りる私を認めて立ちどまつた。白縮緬の長襦袢は死んだ兄の未亡人で、私と同年であることを私は思ひだしてゐた。三人の中では彼女だけが私を知つてゐるので、遠くから笑ひながら何かいつてゐる。彼女はもう二人の嫁の姑母らしい小型の丸髻に結つて、いかにも中年を疾に過ぎた年老いた婦人らしい様子にくつてゐる。男と女の相違こそあれ、私もう彼女くらゐの初老の域に入つてゐるのである。田舎にゐる七十八の老母は、

「四十暮れといふことをいふが、お前はまだ眼は何ともないか。」  
と、いつて訊くことがある。

「さうだなあ、眼はまだ何ともないが、今に老人の眼鏡が入るやうになるかも知れない。併し齒

は大分悪くなつた。頭髮も大分白髪が出来た。」

「うむ、白髪は大分ある。」老母は何時だつたか、さういつて私の額のまはりを眺めたことがあつた。

私には白髪は案外に早く生えてきた。

丁度三十二になつた春の時分であつた。ふと左の額の上には私は五六本の白髪をはじめて認めて老いといふことをはつと意識して哀愁の胸に迫るのを覺えたことがあつた。それは恰も洛陽少年惜顔色往逢落花長歎息といつたやうな心持ちであつた。その時私はこれから、まる五年ほど歸らない郷里に久しぶりに歸郷しようとしてよい／＼出で立つ間際になつて立ちながら一寸鏡を見ると、今の白髪をはじめて自分の前額の邊に發見したのであつた。――世間の私に關する噂には私がいづも鏡ばかり見てゐるかのやうに傳へられてゐるが、私は平常鏡をあまり見ない方である。私は着物は、他人に見せようとどなく、自分で着てゐて氣持が好いから着るのだが、めかす爲に顔を鏡に映すやうなことは減多にない。そんなにしなくつても親はさう醜い顔に私を生みつけてゐなかつた。髻などは殆ど自分で剃らない。人は大抵自分で剃刀などを用意してゐるが、私は母に「四十暮れといはれる此の歳になつてもまづ剃刀を備へておいて時々顔にあてるなど、



いつたやうなおめかしをした覚えさへない。

六年前、學生々活を終つてまだ間のない時分に歸郷して以來、その春の歸郷までに私は可なりに生涯の苦艱を嘗めてゐた。白髪はおほかたその爲であつたらうと思はれた。田舎の家の縁側に寝轉んで暖い春の日を浴びながら、母は私の頭を撫でまはして、

「まだ白髪の生える時分ぢやない、これは若白髪ぢや。」

といつて、眼鏡をかけて私の額から數莖の白髪を抜きとつてくれた。——それも今からもう十二三年前の昔の春となつてしまつた。母が若白髪といつた私の額の白髪は、そのまゝ歳月とよもにふえるばかりで、若白髪はもう若白髪でなくなつてしまつた。

私は元來體質の強壯ならぬ割りに不思議に眼は好い。若い生意氣ざかりに、眼鏡をかけてみたりなどと思つたこともあつたが、今日までその必要はなかつた、そしてまだ老眼鏡を用ゐねばならぬこともないが、母の所謂「四十ぐれ」が今にも襲ひかゝつて來はせぬかと思つて、時々それが意識の表に浮び上つて一種の氣味悪い脅迫となつてゐるのである。

「えらい早かつたぢやないか。」

彼女は岡山言葉で遠くの方から聲をかけた。そこへ私は俥からおりて追いついた。

「どこから？ 東京から？」

「いえ、京都から。」

ステーションまで迎ひに出た作男が手荷物を擔いで附いてゐる。私もそれに荷物をくゝりつけて多勢で話しながら春の野道を歩いた。街道に沿ふた小川の水も暖かさうに春の日を浴びて土手の青草が蒸息れるやうに萌えてゐる。若い嫁達の赤い長襦袢も燃えたつやうに野邊を彩どつてゐる。私はまた胸が迫つて涙がにじんできた。アメリカに行つて煙のごとく死んでしまつた兄のことが聯想せられるのである。それは考へてみると、もう十五六年の昔となつてゐる。

「まあ御挨拶はどうでもいゝ。どちらが何方のお嫁さんです？」

私は春の野道を笑ひながら、さういつて振願つて兄の未亡人に訊ねた。一同笑ひながら遅々とした歩みを更にゆるめた。

「これがケイの方です。こつちがエヌの方。」

といつて、姑母は笑ひながら教へた。ケイの方はもう先刻から、白い刺繡のある黒い蝙蝠傘を翳して顔を隠してゐた。



「これ、そんなに隠れんかていゝぢやないの。」

よく仰山に笑ひながら物をいふ癖のある姑母は賑やかにさういつて、道の真中でさよめいた。さういはれても頑強に黒い傘で胸から上の方を隠したケイの方は友禪の縮緬の長襦袢を着けてゐる。エヌの方はまだまるで人見知りをせぬ子供のやうに青に白い蝶々を刺繍した傘をかざしたまゝ物がいへないほど笑つて俯向いてゐる。眞赤な緋縮緬の長襦袢はこの方であつた。

若い者があんまり恥かしさうにしてゐるので、私はあまりじろく／＼振顧つて見ないやうに遠慮をしてゐたので、どちらがケイの嫁どちらがエヌの嫁と、はつきり記憶するまでには、春の野道をもう大分歩いてゐた。途には清い水のせゝらぎつゝ流れてゆく小溝に沿ふた繩手があつたり、村と村との境に流れる川の堰の上を渡つていつたりした。ぐるりの山も遠くに潤けて麥の圃も白く霞を罩めて夢みるごとく長閑に煙つてゐる。

私は姑母と會話を交えながらも、時々蝙蝠傘の蔭に顔を隠してゐる若い嫁達の方にも言葉をかけた。するとはじめ頑強に顔を隠したケイの方が返辭はエヌの方よりはテキパキした。そして最初は傘の蔭で口をきいてゐたのが間もなく後には顔をみせてきた。物をいふ聲もその方がいくらかませてゐる。

「しくつです。」

「どちらも十八。姑母がいふ。」

「同じ歳!? しかし二つくらゐは違つてゐさうだなあ。ケイの方が兄さんの嫁さんだけに年を取つて見える。」

「だれでもさういふ。ケイの嫁がいふ。」

「同じ年のわりに二つくらゐも古く見えて不服かね。さう見えて丁度いゝんだ。」

「さうでございます。それで丁度いゝんです。姑母がいふ。」

道はそんな會話の中に涼しい藪蔭を歩いて小村の中を通つて、また麥圃の中を歩いてゆく。段々私達のゆく家に近くなつて來た。向うの青い麥の波の上に小さい寺の屋根が見えて、白い塀の中から銀杏の樹が青く繁つてゐる。私達はその麥圃の中の小徑を傳ふて歩いた。

「こんなに東から西から一度に揃つてゆくと、家でもびつくりするだらう。」

「またいゝ具合になりました。」

「先日ステーションのエヌが野谷の姉と京都の方へ來た時に、藤野の叔父さんは、もうお婆さんが親類まはりができんから、今年の櫻花見には自家で嫁品評會をする、いふて居られた。といつ



てゐたが、此度はその嫁の品評會だ。」

「ほんとうに、お婆さんは多勢孫の嫁が見られる。」

「こんなに甥達の若いお嫁さんを見ると、私も嫁さんがほしくなつた。」

と、いつて笑ひながら振顧ると、若い嫁達はすぐまた蝙蝠傘で顔を隠してしまつた。小徑の兩側には葦、蒲公英、蓮華草などが黄や紅や紫の花を咲きこぼしてゐる。黄白の蝶々が道をゆく人とあとになり先になつて飛びむれてゐる。

と、見ると向うの田圃の畦に私達の兄が四つになる初孫を抱へて出て迎へてゐるのが眼に入つた。

「ほう、あそこに出てゐる、でゝゐる。」

「おうい！」

と兩方から聲をかけた。

春の日は廣い野面に満ちてゐた。

大正十三年四月二十日印刷  
大正十三年四月二十九日發行

返らぬ春

定價金壹圓貳拾錢

著者

近松秋江

發行者

東京市牛込區横寺町四三  
後藤誠雄

印刷者

東京市外下戸塚町二四〇  
内田廣藏

製複許不



發行所

東京市牛込區横寺町四三  
英閣

電話牛込四六一番  
振替口座東京四七八六九番

印刷所 東京市外下戸塚二四〇  
内田印刷所



◆ 類書 感想 筆 隨 ◆

吉田絃二郎著  
 □ 雜草の中  
 定價 一圓四十錢  
 送料 十三錢

近松秋江著  
 □ 返らぬ春  
 定價 一圓二十錢  
 送料 十三錢

相馬泰三著  
 □ 草の上 (近刊)  
 定價 一圓二十錢  
 送料 十三錢

豐島與志雄著  
 □ 旅人の言 (近刊)  
 定價 一圓二十錢  
 送料 十三錢

秦 豐吉著  
 □ 文藝趣味 (近刊)  
 定價 一圓四十錢  
 送料 十三錢

◆ 忽ち七版 ◆

中西伊之助著 新刊  
 赤道

定價 一圓二十錢  
 送料 十八錢

四判六頁 函裝  
 新入 函美 類本

今や特殊階級は將に滅せんとする華かな苦悶の舞踏をなしつつあるの際、現存せる某貴族をモデルとせる現代の半面を窺ふべき縮圖たると共にプロ文學の一新境を開拓せる作者近來の名篇也。

本書一篇は將に階級戦に纏はる哀しき戀物語にして人間愛慾の惱みを描く。即ち本篇の主人公は眞理と因襲の十字街道に立てども彼が階級的傳統の血は、無限なる絶望の悲涙に偲び、波瀾重疊を極め然も此の若き革命兒を取巻いて妖艶の貴婦人あり花の如き少女あり怪しくも闇に咲く賣笑婦と多角な戀愛の颯風は、多情多恨なる彼をして遂に極北の雪の曠野に昏倒せしむ……

大杉榮、伊藤野枝共著

乞食の名譽

◆ 六十版 ◆  
 定價 一圓  
 送料 十錢  
 總計 十五錢

無政府主義者として最も大膽に、外、官憲と闘ひ、内、同志と争ひ來れる沈痛、悲壯の思ひ出を、生前唯一の創作的形式を借りて赤裸々に告白せるもの也  
 尾行の影  
 自動車の疾驅  
 秘密出版  
 同志間の暗闘  
 獄

全篇を通じて變轉極りなき生活描寫の反面に彼等兩人が如何にしてその思想共鳴を生じ戀愛的苦惱の課程に至れるかを如實に活敘せるものである。今や彼等が最後の光景は國境を越えて人心の胸底ふかく突入し、あらゆる場合に於ける隨一の話題に供せられつつあるの際、本書の出現は正に死灰の中より蘇へつた新たなる恐怖である。



國小松原雋譯

圖四六版函入美

定價一圓七十錢

送料十五錢

原著  
ゴリキイ  
クウブリ  
フーニン

チエホフと  
トルストイの

### 回想

本書はゴリキイ・クウブリ・フウニンの露西亞の三文豪が追憶の記念として描きたる大文豪トルストイとチエホフの回想記にして何れも兩文豪の不用意の中に洩らされし一言一句と、秘めたる心奥とを遺憾なく、各自獨特の心境をもて描寫せし、極めて興趣豊かなる、稀有の譯書也。切に兩文豪の生活の委曲を窺はんとする人々の愛讀を待つ。

### イバニエス傑作集

中河幹子譯

定價一圓 郵送料十五錢

南歐文壇巨擘たる文豪イバニエスの名は今や世界文壇を風靡し、其作品は相競ふて翻譯されつゝあり。即ち本編は彼の全面目を語る不朽の名篇集にして、その雄大な作風と飽くまで強烈なる色彩と、深刻を極めし解剖とは、一讀直ちに人の肺腑を刺すと共に、自由を熱愛し冒險的精神に富み不盡の精力を以て人類愛を基調とする世界主義を説く、彼の傑作は必ずや此の精妙無比なる譯筆に依つて邦人の胸に一大啓示を與へん。世界の新聲に接せんとする人は、須らく本書に就け！

### マルサス人口論

鈴木政孝譯

定價一圓五十錢 送料十五錢

本書はマルサスが産業革命に基く貧困等級の激増と加ふるにゴツドウキーン一派の無政府主義思想の横行に依り、歐洲の天地再び恐怖時代を出現せんとする時に際し、人生に於ける性慾と食慾との二大鐵則を以て時代の輿論を指導せる彼の有名なる人口論の譯にして、殊に初學者の爲に第一版第二版を主譯對照し、更に第三版第五版の主要部分を加へて、人口論の理論的體系を傳へんことを期せるもの也。大經典として大方に薦む。

## 泰西詩人叢書

(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
ユーゴー詩集	ゲエテ名詩選集	バイロン詩集	ハイネ名詩選集	ブレイク詩集	ポオ全詩集	佛蘭西近代詩集	バアンス詩集	エマスン詩集	シエリー詩集
加藤 利美譯	松山 敏譯	松山 敏譯	松山 敏譯	渡邊 正知譯	佐藤 一英譯	藤林みさを譯	生田 春月譯	中村 詳一譯	牛山 充譯
定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料	定價 送料
	〇八 〇六	〇八 〇六	〇八 〇六	〇八 〇六	〇九 〇六	一〇 〇六	〇八 〇六	〇八 〇六	〇八 〇六



□ 著名三水泉井 □

萩原井泉水著 ◇ 忽ち六版 ◇

古人を説く

四六判特製函入美本  
定價 金壹圓五拾錢  
郵送料 拾五錢

内容

講話 芭蕉の生活と其俳句。芭蕉といふ人。蕪村の俳句と藝術味。  
研究 「春風馬堤曲」評釋  
附録 芭蕉雜話「奥の細道」贅註。一茶が生活の一記録。  
夏目漱石の俳句に就て。尾崎紅葉の俳句に就て。

俳句 昇る日を待つ間

俳壇の巨擘たる著者が多年俳句の徹底的研究を仕遂げやうと、その遂に蘊蓄を傾けられ、其所説を公にせられしもの、其の精神より形式へ、しもの、其の表現へ、自己より自然へ等しく、聞きべきもの不尠。

四版  
本美入函判六四  
錢十九圓一價定  
錢七十料送

俳句 流轉しつゝ

流轉又流轉、孤獨の心を抱いて、青空の下を歩きつゝ、太陽も亦孤獨である、と、著者が、さうした、と、只自然に對する信賴と禮讃との一念によつて、氏の魂が、大きな自然の愛に感じ、産んだ偉大な自然の收穫の句集である。

最新刊  
製特入函判六四  
錢十八圓一價定  
錢五十料送



